エンの奇妙な冒険

霧夜凍霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エンの奇妙な冒険

【Ｎコード】
Ｎ３８０３Ｔ

【作者名】
霧夜凍霞

【あらすじ】
エン・カームリィ　彼女は気づいたら真っ白空間にいた！
なにこれテンプレ！？転生！？
自らを”異能者”と呼ぶ謎な女性によって
新しい身体とチカラを得た、エンの奇妙な冒険が始まる！！

…まぁ、嘘ですけど。

浮往な住人であるわたし　篠江遠音（しのえとおね）がジョジョ世界に往ってくるオハナシです。

ちなみにジョジョ世界以前に幾つか世界旅行してます。例えば海賊の跋扈する世界。例えば人型自在戦闘装甲騎のある世界。何が言いたいかというと、わたしの科学力はァァァァァァアア世界一ィィィイイイイ！！　なのです。

（という結果だけはありますが、その過程（小説）はまだありません。勘違いの無きよう）

第０１話：移世界

おはようございましてこんばんは、はたまたまさかのこんにちは、
わたしは篠江遠音（しのえとおね）、渾名はエンです。
気軽に遠音お嬢様って呼んでくれてもいいですよ？
……冗談です♪

それはさておき、今日はレント（レント）さんに呼ばれてんですよねえ、だいたいどういう用事か判りますけど。
ま、とりあえず行ってみましょうかね。

居間です、今です。

なんとなく此処に居るかなーと思って来てみたら案の定居たレントさん。フラーちゃんもありました。
レントさん今日の気分は幼女ですかそうですか。

「レントさん、今回は何処に往かされるんですか？それとフラーちゃんはありますけど兄さんはどうしたんですか？」
「ああエン、今回はねぇ、『ジョジョの奇妙な冒険』だよ。あときりやはまたフーと一緒に、仕入れたのを試しにいつものダンジョンに往くって言ってた」

「そうですか、じゃあ時期と場所をちゃんと教えてください。兄さ

ん達今度は何処のを拾ったんでしょう？」

「ん、時期は第三部はじめの花京院戦、保健室の場面からで場所はその近くね。やっぱ事前の確認はだいじだよね。今度はこないだエアの行った某豹頭の戦士の居る世界の”魔道”だってさ」

「そりゃあ時期場所共に突拍子も無いっていうか超想定外のとこに飛ばされましたからね以前にっ。ということは”閉じた空間”とか黒蓮の粉を使ったやつとかそんな感じですね」

「あはは、拗ねない拗ねない。んー、愛いやつういやつー、なでなでー。ん、だいたいそんな感じだろーねー」

「むぅ、幼女さんに子供扱いはされたくないですねぇ」

「そいつぁ今更だぜーまいどーたー。んじゃ、向こう往くにあたり欲しいオプションとかあったら言って？」

「それもそうですね、はい。んー、まずはやはり『スタンド使い』であるようにしてください」

「スタンド見えないと話にならないしね。像（ヴィジョン）とか型とかはどーすんの？私君（わたしくん）としては同化、無像、憑依辺りがオススメ。ビジュアル考えんのめんどいもん」

「うーん……じゃあ、像は無くていいんで、わたしが干渉したモノにスタンドパワーが込められるようにしてください。それが出来ないとなんにもならないですし」

「ほいさ、オッケー。防御力とかは君の場合無視していいしね。他

にあるー？」

「はい、えーっと、止まった時を認識できるようにしてください。ラストの辺りは時止め中のが多いですから見逃せないです」

「わかった、オッケー。んと、他無い？前みたいにリミッター解除とか」

「いえ、そこまでする程の世界じゃあないですよね。今のままで充分だと思うからいいです、他も無いです」

「あいよ、そんじゃそろそろ往ってもらおか。そっちの三番の扉だから」

「わかりました」

言ってわたしは部屋の一辺、扉が幾つかついてる方に行く。こっちにある扉は普段開けても向こう側は壁なんですが――

――三番扉を開けた向こうは真っ白な空間になっていました。

たまに目に悪そうな色彩になってたりするんでそこんところはどうにかして欲しいと思うわたしです。

と、往く前に、

「ではいってきますね、母さん」

席についたままのレントさんに挨拶しときます、見た目幼女ですけど。

そして移世界ゲートを抜けた先は――

「……えっ」

…トイレでした。

第０１話：移世界（後書き）

遠「またやられました」

怜「ふっふーん、場所の詳細は言わなかったもんねー♪」

遠「こういうつまらない悪戯好きですね、ほんと」

怜「それが私君が私君たる所以（ゆえん）だから！」グッ

遠「それはそれでどうかと思うんですけどー」

第０１．５話：パラメータ

【スタンド名：バリアブルズ
破壊力－Ｃ（場合によりＢ）
スピード－Ｂ
射程距離－なし
持続力－Ａ
精密動作性－Ｃ
成長性－Ｄ

一体化型のスタンド。
様々なスタンド能力に”変化”させることが可能なスタンド
変化させた能力による効果は自分以外にも適用され、範囲は十数ｍ程
干渉したモノは効果範囲を離れても元に戻ることはない。戻すこと
はできる。

自身や干渉したモノでスタンドに攻撃することは可能。】

裏返してみると、
【静止時間の視認だけを憑けるのは無理だったから
『断片「時間干渉」』にさせてもらったよ
自由に動けるからまあいいでしょ】

と書かれた紙がいつの間にか着ていた制服のポケットに入ってました。

大方、ゲートを通ってる時にレントさんがやったんでしょうが。そんなわたしはトイレから出て保健室を探してる途中。近くって言ってたじゃないですかと内心愚痴ったりしつつその辺にいた生徒に訊いて向かいます。

場所はわたしが居たトイレと真反対でした。ミスですかレントさん？

でも花京院戦はあまり干渉する余地はなさそうな気がするし、ちょっと傍観気味になりそうです。

と、保健室に着きました。とりあえず入ることにしましょうかね。

ドキュ―ｚ―ン

あ、その場面ですか。

第０２話：花京院典明

ども、前回医務室を保健室って言ってしまったエンです。
只今スタープラチナが光ったメロンを引き摺り出したところみたいです。

しっかし、最初から居たらいろいろと楽だったんですけど、こう中途半端っていうか……いつでしゃばりましょうかねー。

ま、いいや。それとなく承太郎君の後ろ辺りにでも立ってよっと。

「ひきずり出したことを…　後悔することになるぞ……　ＪＯＪＯ」

うわぁ、花京院の額に指のあとがくっきり浮き出てますよ、実物を実際に見るとなんか不思議な感じですねえ。

ところで、わたし今承太郎君の真後ろ、つまりハイエロファントの射線上に居るんですが、実はアレの巻き添えくってみようかなーって思ってるんです。
なんとなくスムーズに話に入れそうですし。

とか言ってる間に時間は来ましたか。

「くらえ　我がスタンド『法皇の緑』の…」

「花京院！妙な動きをするんじゃあねえ！！」

とりあえず怪我しないように、というより無駄に部屋が壊されないように承太郎君を受け止める体勢を…っと。

「エメラルドスプラッシュ！！」

そういえば漫画だと波が描かれてましたけどアレ一体なんなんうわっ！

うっー、息が詰まりましたよ、全く。

承太郎君重い上に勢いついてたから衝撃は結構なものでしたよ。

結局壁にぶつかって壊しちゃいましたし。

普通の人だったら相当痛いんじゃあないでしょうか？わたしはまぁ、ダメージを『無かった事に』しましたけど。

「我が「スタンド」『法皇の緑』の体液にみえたのは破壊のエネルギーの像（ヴィジョン）！きさまのスタンドの胸をつらぬいた…　よって　きさま自身の内蔵はズタボロよ」

…もしかしてわたし視界に入ってない？

「そしてその女医も」

先生頭からパーンって出血して倒れちゃいました、後でなんとかしときましょかね。

んでもってなんか長々と花京院が承太郎君を責めるような発言。ちょいといい加減にこっから抜けましょ、承太郎君の下敷きなんですよねまだ。

ごそごそもぞもぞ

…ふう

「あーやれやれ、いきなり人と壁に挟まれる経験なんていらないですよ全く。んでんで、そこのメロン使いさん、種飛ばしは西瓜で縁側でやってくださいな。屋内で周り壊しながらやるもんじゃあないって、わたし思うんです」

「…おまえもスタンド使いか」

「是的，是（Ｓｈｉ　ｄｅ，　ｓｈｉ）、はいそうです。と言っても、貴方達みたいな像っていうんですか?それは無いんですけど、ね。嗚呼、不便なものです」

やれやれ。とため息しつつ不満アピールしてみたり、格好だけですけどね。

と、横で承太郎君が立ち上がる気配。

「立ち上がる気か…
だが悲しいかな　その行動を例えるなら　ボクサーの前のサンドバッグ…
ただうたれるだけにのみ立ち上がったのだ」

んー、やっぱりわたし存在が薄いんでしょうか?少しスルー気味に扱われてる気がするんですよね。

「……この空条承太郎は……　いわゆる不良のレッテルをはられている…

ケンカの相手を必要以上にブチのめし　いまだ病院から出てこれねえヤツもいる…

料金以下のマズイめしを食わせるレストランには代金を払わねーなんてのはしょっちゅうよ

だが　こんなおれにも　はき気のする「悪」はわかる!!

「悪」とはてめー自身のためだけに弱者を利用し　ふみつけるやつのことだ!!

ましてや女をーっ!

きさまがやったのはそれだ!
あ〜〜〜〜ん
おめーの「スタンド」は被害者自身にも法律にも見えねえしわからねえ…

だから

おれが裁く！」

さすがＪＯＪＯ！わたしに出来ないし言えないことを平然と言ってのける！そこに痺れ…ません憧れ…も別にしないです。
少なくともわたしには「裁く」だなんて言える資格は無いって思ってますけど。

「それはちがうな

「悪」？「悪」とは敗者のこと…「正義」とは勝者のこと……

生き残った者のことだ　過程は問題じゃあない

敗けたやつが『悪』なのだ

とどめだ！そしておまえもくらえ！

エメラルドスプラッシュ！」

「なに…敗者が『悪』

それじゃあー

やっぱりィ

てめーのことじゃあねーかァ――ッ！」

承太郎君がエメラルドスプラッシュをはじき…って！

「わたしの方に飛ばさないでくださいよ！そしてそちらの！はじいたのこっちに飛んでますから！」

ちょっとびっくりしたじゃないですか！受け流したからいいですけど！

そしてスタープラチナがハイエロファントを掴まえて

「オラララオラ　裁くのは

おれの『スタンド』だッー！！」

ぶっ飛ばして外壁まで壊しちゃいました。

「な……なんてパワーのスタンドだ」

「さっきはふいをくらってちょいと胸を傷つけただけだ」

と、そこでやっとわたしに気付いたかのようにこちらを向いて

「さっきは下敷きにして悪かったな。怪我は…無いみたいだが」

なんて言ってくれました。

まあ、承太郎君が見ての通り怪我どころか服が破れてたりも汚れてさえもないですし。

「いえ、気にしないでくださいな。で、どうするんです？騒ぎが大きくなったみたいですけど」

「…今日は学校をフケるぜ
こいつにはＤＩＯについていろいろしゃべってもらわなくてはな…
おまえも来な、聞きたい事もある」

「わかりました。そいじゃあ先行って裏門辺りで待っててください、女医さんの手当とかするんで」

…行きましたね、さてと

―――――――――

―――――――――

―――――――――

所変わって空条邸は茶室であります。
え？キンクリ？気にしないでくださいな。女医さんの怪我と医務室の損傷をある程度『無かった事に』したってだけですし。
あとは空条邸に行きしなに承太郎君に少しばかり説明したことと、

邸に着いてここにいた二人に簡単な自己紹介したってくらいですかね。

「だめだなこりゃあ」

ジョセフさんちゃんと額見てないような気がしたんですけど?まあいいですけど。

「手おくれじゃ
こいつはもう助からん
あと数日のうちに死ぬ」

関係ないですけど漫画での承太郎君の帽子見る度に後ろが有ったり無かったりでした。実際見ると、無い…ように、見えますけど……どうなんでしょ?確認は……別にいいや。

「承太郎…おまえのせいではない…
見ろ…この男がなぜ
ＤＩＯに忠誠を誓い
おまえを殺しに来たのか…?理由が…

ここにあるッ！」

ジョセフさんが花京院の前髪を上げたらそこにはうわぁ…これは少々気持ち悪いですねぇ。

「なんだ?この動いているクモのような形をした肉片は?」

「それはＤＩＯの細胞からなる「肉の芽」
その少年の脳にまで達している
このちっぽけな「肉の芽」は
少年の精神に影響を与えるよう脳にうちこまれている！」

「つまり
この肉の芽はある気持ちをよび起こすコントローラーなのじゃ！！
カ　リ　ス　マ　！
ヒトラーに従う兵隊のような気持ち！邪教の教祖にあこがれる信者のような気持ち！この少年はＤＩＯにあこがれ忠誠を誓ったのじゃ！！」

うーん、もしわたしがこれをくらったらどうなるんでしょう？
自動で消せるようにすればいいですかね？
……結局、当たらなければの精神で肉の芽の接触を否定すればいい訳ですよね、うん。

アヴドゥルのＤＩＯ様とのファーストコンタクトの話は長いから聞き流すっ。
要するに下手したら肉の芽で仲間にさせられてたぜアブネーってことでしょ。

んで、ジョセフさん
「そしてこの少年のように数年で脳を食いつくされ死んでいたろう

な」
確定事項ですかそうですか。

「死んでいた？
ちょいと待ちな
この花京院はまだ

死んじゃあいねーぜ！！

おれのスタンドでひっこぬいてやるッ！」

――ここで「ちょっと・キングクリムゾン」！
『肉の芽を抜き取る』という過程は消し飛び
『抜き取った』という結果だけが残る！です！
だってちょっと長いですもん。――

「なぜ　おまえは自分の命の危険を冒してまでわたしを助けた…？」

「さあな…そこんとこだが
おれにもようわからん」

「さて、メロン使いさん……もとい、花京院君が無事助かってよかったよかった、です。
　ところで皆さん、わたしの能力について少しばかり説明したいと思うんですけど宜しいですか？」

一応これからそれなりに長い付き合いになるわけですから少しくらいは手札を見せておいたほうがいいでしょう。
同意は貰いました、ので早速―

「ではＪＯＪＯ、貴方のスタンドでわたしの片方の――手首辺りから切断してみてください」
あら、やっぱりみんな驚いてる、承太郎君以外。
彼には事前に少し教えましたからね。

「わかったが…いいのか？」

「ええ、遠慮なくやっちゃってください。あ、できるだけ壊さないでくださいね？スパッと綺麗にお願いします」

「ああ…。オラァッ！」

切断され、転がる左手首。
吹き出す血、されどすぐに出なくなります。
それでもさきに吹き出した血は畳に染みを作っています。

「出血がすぐに止まりました。
　これはわたしが出血を『否認』したから、です。
　そして―」
落ちた手首を拾い、傷口にあてがい、

「この傷が、塞がらないなんて、〝嘘〟」
修復します。

「この通り、傷痕もなく治りました。
ところで先程、畳に血が飛びましたけど、ちょっとそこを見てください」

左手が全く問題なく動くことを示しつつ、血が飛んだ『筈の』畳に目を向けさせると―

血の跡なんてものは無くて、普通に普段の畳がそこにありました。

「汚すのも悪いと思ったんで、血を『無かった事に』しました。
他にもいろいろと使い方があるんですけど、今日はこのくらいで」

言って、お開きにさせてもらいました。
みんなちょっと表情が固くなったような気もしますがきっと気のせいですね。

第０２話：花京院典明（後書き）

遠「実はスタンドパラメータの紙以外に一枚、たぶん、いや確実にフラーちゃんの断片的メモ用紙が」

鷹音『（何かのフラグにしようとしてるわね）』

凍霞『（ちょっと、気にしないで…）』

第０３話：「スタンド」という力

おはようございましょう、エンです。
昨日はなんやかんやで空条邸でお世話になりました。

……やっぱりというかなんというか、皆さんわたしのことを男…だと思われていたらしいです。
そりゃあ、格好は動きやすい服装（シャツ、ズボン）にしてますし、そもそもこっちに来たときの制服は何故か学ランでしたけど……
動く邪魔にならないように身体のある一部分を控え目にしているのも要因でしょうか？

まぁ、気にして無いですけど。
ほ、ホントですよ！？
「気になるんなら顔変えりゃいいじゃない」ってレントさんに言われたこともありますけど…
そもそもこんなにしたの貴女じゃあないですかって、ホント、もう……

かんわ、きゅうだいっ！

それで昨日の空いた時間で少々気になった事があったのでその確認をしてみたり。

あのメモ用紙に書かれてた『効果範囲』ってのが引っ掛かりまして、いろいろと試してみました。

そして解ったこと

『一度触れていれば効果範囲内なら直に触れてなくても変更できる』

簡単に言うと、まず小石を持って銅にする→投げる→鉄に変えようとする→変わる

こんな感じですね。

…リミッターが一部限定解除されてるじゃあないですか、別にいらないって言ったのに。

次、『効果範囲は半径およそ１５ｍの球形』

これは崩壊するように設定した小石を効果範囲では崩壊しない状態にしてから投げて確認しました。

なんだか広いような気がするんですけどねえ範囲は。

「効果範囲を離れても」云々って書かれてた事の確認として、地面に適当なモノを

造って離れて指パッチン、元の地面に戻れってやったらちゃんと戻りました。これどうなってんでしょう？

最後にパラメータの「スピード：Ｂ」

殆ど元と変わりませんが、ちょっとばかし行動速度を上げられるということが解りました。

わかりやすくいうと弾丸をつかむことは無理ですが弾丸に対応することは可能です、と

まぁ、回想?確認?はこれくらいにしてそろそろみんなが居るはずの台所にいってみますか。

「ハエだ　空間にハエがとんでいたのか！
　まてよ…このハエはッ！
　し…しっているぞ！」

ちょ、もうそこでしたか。

んで、花京院の同行表明。
置いてかれちゃあ意味が無いんでわたしも言いますよ。

「わたしも、同行させていただきますよ」

「同行するだと?なぜ?おまえらが?」

「そこんとこだが…
　なぜ…同行したくなったのかはわたしにもよくわからないんだがね…」

「ケッ」

「……おまえのおかげで目がさめた　ただそれだけさ」

「わたしは確かにあまり関係ないんじゃあないかとは思いますが、どうせ待つ人も（この世界には）いませんからね。
それにスタンド使いっていう人手は多いほうがいいでしょう？」
（そもそもついて行かないと何のためにこっちに来たか分かりゃあせんですからねぇ。）
誰にも聞こえないようにこっそり呟くのでした。

「ＪＯＪＯ
占い師のこのおれがおまえの「スタンド」の名前をつけてやろう

運命のカード　タロットだ
絵を見ずに無造作に一枚ひいて決める
これは君の運命の暗示でもあり　スタンドの能力の暗示でもある

星のカード！

名付けよう！君のスタンドは『星の白金（スタープラチナ）！』」

何かしらのネタを言おうと思ったけど別にいいや。

第０４話：エジプトへ向かえ／灰の塔（前書き）

エン以外のヒトの会話文は基本的に原作準拠です　句読点は無いものと思ってください

エンの会話文は、句読点付きます。
たぶん、エンだけです。

第０４話：エジプトへ向かえ／灰の塔

「今はまだ背中だけだが……
そのうち　シダ植物のような　あの「スタンド」は……
ゆっくりとホリィさんの全身をびっしりとおおい包むだろう」

と、いうわけでエンです。
もはや外見性別に関しては諦めているしいっそ勘違いするならすればいいじゃない！の精神で生きています。

もぐもぐ

「高熱やいろいろな病気を誘発して苦しみ
昏睡（コーマ）状態に入って
二度と目覚めることなく死ぬ……」

なんということでしょうってやつですね。
てかなんで知ってん…あぁ、何人か見た、んですか。
んだとしても何故にホリィさんのタイムリミットが５０日って分かるんでしょ？

もぐもぐ

「その前に
エジプトにいるＤＩＯを倒せばすむことだ！
ＤＩＯの体（ボディ）から発する「スタンド」のつながりを消せば助かるのだ！！」

ジョースターの血統っていうか、ツナガリっていうか、とにかくすごいですね。

ＤＩＯ様→ジョセフさん
→聖子さん
→承太郎君
→仗助ェー
→ぎおぎお（ＧＩＯＧＩＯ）……は別に無くてよいか。
他に身内？の影響でスタンド使いになるパターンはあるかあったかどうだったですっけな？

もふもふ

間違えた
これを出してる必要ない
しまっちゃいましょう

もぐもぐ

「ＪＯＪＯのおかあさん……

ホリィさんという女性は人の心をなごませる女の人ですね……
そばにいるとホッとする気持ちになる

こんなことをいうのもなんだが　恋をするとしたら　あんな　気持ちの女性がいいと思います
守ってあげたいと思う……
元気なあたたかな笑顔を見たいと思う」

「うむ
いよいよ出発のようだな…」
行くぞ！

この「行くぞ！」の立ち方って何かモデルがあったんですよね？たしか。

もぐ　ゴチ。

「ところでエン　さっきは何をしていたんだ？」

「あぁ、アヴドゥルさん
朝がちと遅くなったので朝食代わりにメロンと焼き鳥その他食べてました」

「そ…それは、また妙な食べ合わせだね」

「ちなみにデザートは焼き鳥の方ですよ花京院君」

「えっ」

……

……

……

夢を、みました。

嘘です。みてないです。

違います、正確には覚えてないです。

飛行機に乗ったこと無かったんでちょっと心配で…と思ってたんですけどそういえば結局墜ちるよなぁと思い出して。

なんなら自分で飛べばいいんじゃないか…と思えばこっちのヒトビトは飛べないからこそ、「ひこうきかい」というモノを造ったんだ

と思い至り。

もういっそグレーフライ(じいさん)をちゃっちゃと始末しちゃいましょうか…
と思っても、別に犠牲者を少なくする必要も理由も無いしわたしは
「セイギノミカタ」するつもりも無いんだと思い直し。

そんなような事をゆるゆると、聴覚を下げて目を閉じたまま考えて
たところ、なにやらざわざわとした気配を感じたので感覚を修正し
つつ目を開けると

「オラオラオラオラオラオラオラオラ！！」

プン！
「はっ！」

あ、あれェー？
またもや出遅れてるじゃあないですか…

「クク…
たとえここから一センチメートルの距離より１０丁の銃から弾丸
を撃ったとして…
弾丸は　おれのスタンドにはふれることさえできん！
もっとも　弾丸でスタンドは殺せぬがな」

ホル・ホースさんの『皇帝』やわたしの銃ならスタンドを殺せるんですけどね。
わたしのは憶測ですけどまず大丈夫でしょう。

というか、網銃みたいなんでつかま……スタプラでも捉えられないんですし無理か。
被害者になりそうな人の舌に触れればどうとでもできますけど今更過ぎる案ですし…
だって、

「ビンゴォ！
舌をひきちぎった!!
そしておれの目的は…」

ほら、手遅れです。

〈Ｍａｓｓａｃｒｅ！〉
みな（マサクゥル）殺し！

「や…やりやがった!!」

「焼き殺してくれるッ
『魔術師（マジシャンズ）の赤（レッド）』！」

「まて！待つんだ！アヴドゥル」

「うーん　ムニャムニャ
なんか騒々しいのォ
なに事かな」

でたよじーさん

「ウ〜ン　トイレでもいくかの」
ベチャリ
「なんじゃこのヌルヌルは？
　M…a……？」
「」
「ひ…血…血かちぃ〜〜！」

「あて身」ドスッ

「他の乗客が気づいてパニックを起こす前にヤツをたおさねばなりません
　アヴドゥルさん　あなたの炎のスタンドは　この飛行機までも爆発させかねないし
　ＪＯＪＯ…君のパワーも機体壁に穴でもあけたりしたら大惨事だ！！」

ここで地味にジョセフさん戦力外扱いですよね確実に。
今は念写しか出来ないって評価なんでしょーか。
てかわたしも外されてる？
いいですよ、もう決めましたから。
　わたしがやる

「ここはわたしの静なるスタンド『法皇の緑』こそヤツを始末するのにふさわしい」

「クク
花京院典明か
ＤＩＯ様からきいてよーく知っているよ
やめろ…

自分のスタンドが「静」としっているならおれには挑むまい…
きさまのスピードでは「せァっさー！」！？」

花京院に気を取られている隙に確保です。

わたしが持つは特製の虫網風金属板！
材質は合金、性質はネットッ！
勿論すぐに口を閉じて『灰の塔』を閉じ込めました。

「わたしがこいつを捕まえられないなんて”嘘”に決まってます。
アーアー、聞こえますか、『灰の塔』？
ま、スタンドの方は聞こえないでしょうけど。

そうそう、「塔針（タワーニードル）」ごときじゃあこの金属球は壊せませんよ？
何故ならわたしはこれに対する貴方からの干渉を『否認』しているから、です。

そしてこれはわたしの能力でできていますから―

この金属球が

スタンドを殺せないなんて

”嘘”」

きゅっとして

ぐしゃあっ

金属球はさっきと比べてだいぶ小さくなりました。

「わたしは引きちぎられても、引きちぎっても
ましてや擂り潰しても、くるい　もだえたりはしません」

そして

じいさんの舌と、頭が裂けました。

「さっきのおじいさんが本体だった訳ですね。
ハァ、おぞましいスタンドにはおぞましい本体がついているものですよ」

花京院、ここの出番は貰いましたよ。

「この人のひたいには…
ＤＩＯの肉の芽が埋め込まれていないようですが……？」

出番取られて空気と化した花京院はほっといてわたしのターン続行ですよ。

「「灰の塔」はもともと旅行者を事故にみせかけて殺し　金品をまきあげている根っからの悪党スタンド
金でやとわれ　欲に目がくらんでそこをＤＩＯに利用されたんだろーよ」

小説だと、喋ってないとホント空気！

…電波を受信しました

そろそろ墜落しますよー。

「変じゃ
さっきから気のせいか機体がかたむいて飛行しているぞ…」

さっきからっていつからでしょーねぇ。

「やはり傾いている…
ま…まさか！」

操縦室に急ぐみなさん。

わたしは別に急がないんで歩いて行きますけどね。

「なんてこった
してやられた」

「舌を抜かれている
あのクワガタ野郎　すでにパイロットたちを殺していたのか！」

「降下しているぞ…自動操縦装置も破壊されている……
この機は墜落するぞ……」

っと、あのじーさんが来ましたよ。

「ぶわばばあはははは――ッ！」

「！
なに！」

「ブワロロロ～～ベロォォォ
わしは事故と旅の中止を暗示する「塔」のカードをもつスタンド！
おまえらはＤＩＯ様の所へは行けんン！」
いやアンタはスタンドちゃうでしょ。
言葉のあやですか？そうですか。

「たとえこの機の墜落から助かったとて
エジプトまでは一万キロ！

その間！ＤＩＯ様に忠誠を誓った者どもが四六時中きさまらをつけねらうのドァッ！
世界中には　おまえらの知らん
想像を超えた『スタンド』が存在するゥ！」

むしろ　知ってる、想像の範囲内のスタンドなんていますか？

「ＤＩＯ様は『スタンド』をきわめるお方！ＤＩＯ様はそれらに君臨できる力を持ったお方なのドァ！
たどりつけるわけがぬぁ～～～～い！
きさまらエジプトへは決して行けんのどあああああばばばばゲロゲロ～～
べちあっ」

やっと絶命。
なんかいろいろとすごいヒトですねこのじいさん。

そして不時着頑張ってくださいなジョセフさん

「しかし承太郎…
これでわしゃ3度目だぞ
人生で3回も飛行機で墜落するなんて　そんなヤツあるかなぁ」

「2度とテメーとはいっしょに乗らねえ」

そんなこと言っても無駄でした、となるんですよね。

香港沖３５ｋｍに不時着――

次はポルポル君ですね。
アヴドゥルとの決闘だし、傍観者でいいかなぁ？

第０４話：エジプトへ向かえ／灰の塔（後書き）

遙：フライドポテトと焼き鳥がデザートはガチ

凍：それはお前だけじゃないん？

遙：ですよねー

第０５話：銀の戦車？キンクリできませんかね？（前書き）

【ティエンチー（カエル）の字が出なかったので漢字表記は諦めました】

だからどうだということもないんですけど

第０５話：銀の戦車？キンクリできませんかね？

「たしかに！
われわれはもう飛行機でエジプトへ行くのは不可能になった

また…
あのようなスタンド使いに飛行機内で出会ったなら
こんどという今度は大人数をまきこむ　大惨事をひき起こすだろう

陸路か…海路をとってエジプトへ入るしかない…」

はろはろ、エンです。

只今香港の”翠園”っていうレストランで「注文もとらずに」会議中です。

食べながらでもいいじゃあないですかーお腹空きましたよー

まぁ、嘘ですけど。

だって別に飲まず食わずでも生きていけますし。

2、3日くらいなら寝なくても大丈夫ですし。たぶん

「しかし
５０日以内にＤＩＯに出会わなければ！
ホリィさんの命が危険なことは…
前に言いましたな……」

「あの飛行機なら今ごろはカイロに着いているものを」

まぁ、あのじいさんの言うようにすんなり行けるワケがないですよね。
ＤＩＯさまだってわざわざジョナサンの体奪ってまで生きようとしてやがんですから、むざむざ殺されようと思う訳ないですもん。
結局死ぬんですけどねぇ。

「わかっている
しかし　案ずるのはまだ早い……
１００年前のジュールベルヌの小説では
８０日間で世界一周４万キロ…を旅する話がある
汽車とか蒸気船の時代だぞ

飛行機でなくとも５０日あれば
一万キロのエジプトまでわけなく行けるさ

そこでルートだが
わしは海路を行くのを提案する
適度な大きさの船をチャーターし　マレーシア半島をまわってインド洋をつっきる…
いわば海のシルクロードを行くのだ」

「わたしもそれがいいと思う
陸は国境がめんどうだし
ヒマラヤや砂漠があって
もしトラブったら足どめをくらう危険がいっぱいだ」

「わたしはそんな所両方とも行ったことがないのでなんともいえない
おふたりに従うよ」

「「同じ」く」

「だがやはり一番の危険は
ＤＩＯがさし向けてくる「スタンド使い」だ！
いかにしてみつからずにエジプトにもぐりこむか…」

ジョセフさん、それは無理な話でしょうよ。
現に今だって、ポルポル君が近づいてますし。

ほら、

「すみません
ちょっといいですか？わたしはフランスから来た旅行者なんですが
どうも漢字がむずかしくてメニューがわかりません
助けてほしいのですが」

「やかましい　向こうへ行け」

「おいおい承太郎…
まあいいじゃあないか

わしゃ何度も香港は来とるからメニューぐらいの漢字はだいたいわかる
で…　なにを注文したい？
エビとアヒルとフカのヒレとキノコの料理？」

……で、なんでエビ、アヒル、フカヒレ、キノコを頼んでカエルのまる焼きとおかゆとさかなを煮たものと貝料理が出て来るんですかジョセフさん。
「どうしてこうなった…です」

「わはははははははははは
ま…いいじゃあないか
みんなでたべよう
わしのおごりだ

なにを注文してもけっこううまいものよ
ワハハハハハハハ」

「そりゃあこれでわたしたちが払う事にとかなったらぶっとばしてますよジョセフさん
たぶん戯言ですけどね」

「よ　容赦ないのおエン」

「まぁわたしだって特に何がいいとか無かったんで別にいいんです

けどね
　じゃあ言うなよってのは無しで」
みなさん呆れてものも言えないって風に見えましたんでね、ちょっと遊んでみました。

「手まひまかけてこさえてありますなあ
ほら　このニンジンの形
星（スター）の形…なんか見おぼえあるなあ～～」

「あ、そうだ
ひとつ言い忘れてましたけど…」

「そうそう　わたしの知りあいが
首すじにこれと同じ形のアザを
もっていたな……」

「スタンド使いが、一人来てるんでした」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「きさま！新手の……」

その時！お粥が沸き立った！
…ノリですよ、はい。

「ジョースターさん　あぶないッ！」

お粥からジョセフさんに向かってレイピア？が突き出され、

「スタンドだッ！」

ジョセフさんの義手を突きました。

「「魔術師の赤」！」

魔術師の赤が炎をはきましたが、

「なにッ！」

剣であしらわれてテーブルに打ち返されました。
どうやったんでしょう？ほんとすごい剣さばきですねえ。

「おれの『スタンド』は戦車のカードを持つ『銀の戦車（シルバーチャリオッツ）』！
モハメド・アヴドゥル　始末してほしいのはきさまからのようだな…
そのテーブルに火時計を作った！
火が１２時を燃やすまでにきさまを殺す！！」

只今８時を燃やしてます

「恐るべき剣さばき　みごとなものだが……」
只今９時
「テーブルの炎が…『１２』を燃やすまでにこのわたしを倒すだと
相当うぬぼれがすぎないか？
ああーっと」

「ポルナレフ…

名のらしていただこう
J・（ジャン）
P…（ピエール）
ポルナレフ」

「ありがとう（メルシーボークー）
自己紹介　恐縮のいたり……
しかし」

アヴドゥルが手を10時を燃やすテーブルに向かって振るうと…

「おお！アヴドゥルのスタンドがうでをうごかしたら
テーブルの下半分だけが燃えてしまった」

となり。

「ムッシュ・ポルナレフ
わたしの炎が自然どおり
常に上の方や風下へ燃えていくと考えないでいただきたい…
炎を自在にあつかえるからこそ「魔術師の赤」と呼ばれている」

…自称じゃあなく？

「フム
この世の始まりは　炎につつまれていた
さすが始まりを暗示し始まりである炎をあやつる『魔術師の赤』！

しかし　このおれをうぬぼれだというのか？
このおれの剣さばきが…

うぬぼれだと!?」

コインが勿体無いと思ったのはわたしだけですかね?穴なんか空けて。

「コイン5つをたったのひと突き
かさなりあった一瞬をつらぬいた」

「いや…よーくみてみろ」

「う…う　なるほど
コインとコインの間に火炎をもとり込んでいる」

「これがどういう意味を持つかわかったようだな
うぬぼれではない…
わたしのスタンドは自由自在に炎をも切断できるということだ…
フフ…空気を裂き　空(くう)と空の間に溝をつくれるということだ
…つまり　きさまの炎はわたしの「銀の戦車」の前では無力ということ」

空を裂くのは技術で、アーマーパージは能力……て感じですかねえ?
情報世界では「解放モード」みたいな風に呼ばれてたような。
んでヴァニラ・アイス戦時のアレは「閉鎖モード」でしたっけか?
そんな感じで。

「おれのスタンド…「戦車」のカードの持つ暗示は”侵略と勝利”

そんなせまっ苦しいとこで始末してやってもいいが
アヴドゥル　おまえの炎の能力は　広い場所のほうが真価を発揮するだろう？
そこをたたきのめすのがおれの「スタンド」にふさわしい勝利…
全員おもてへ出ろ！順番に切り裂いてやる！」

所変わってタイガーバームガーデンであります。
うゥワアァー……なんというか、なんというこれはちょっと視覚にようない感じじゃあないですかァー？
何故になして何でどうして如何なる理由に於いてこのような珍妙な奇妙な奇抜なおかしな変な怪しいモノが処が場所が造られて建造されて発生して存在しているのでしょォーかぁ～？

【エンは　こんらん　している！】

「ここで予言をしてやる
まずアヴドゥル…
きさまは…きさま自身のスタンドの能力で滅びるだろう…」

「アヴドゥル…」

「承太郎…
手を出さなくていいぞ…
やつのいうとおり　これだけ広い場所なら思う存分「スタンド」をあやつれるというもの…」
Ｒｅａｄｙ．．．　Ｆｉｇｈｔ　！

Ｎｏｗ　Ｌｏａｄｉｎｇ．．．

……はッ！
意識を飛ばしていた…？
はは、まさか。

［　　］
［　エン　］
［　Ｈ：９９９　］
［　Ｍ：９９９　］
［　ト：らん　］

という幻想を見　気もします。

損那古都頼…じゃあなく、そんな　とより、今はど　な感じで　すか？

Ｎｏｗ　Ｒｅｐａｉｒｉｎｇ．．．（スペル合ってるかな）

…ふぅ

「炎で目がくらんだな
きさまが切ったのは　今さっききさまの「銀の戦車」が彫った彫刻の人形だ！
わたしの炎は自在といったろう
おまえがうち返した火炎が　人形の間接部をドロドロにとかしうごかしているのだ

自分のスタンドの能力にやられたのはおまえのほうだったな！
そしてわたしのクロスファイヤーハリケーンを　改めて

くらえッ！」

＞ゲー

銀の戦車もポルポル君も吹っ飛ばされましたね

「占い師のわたしに予言で闘おうなどとは
１０年は早いんじゃあないかな」

「アヴドゥルの「クロスファイヤーハリケーン」恐るべき威力！
まともにくらったやつのスタンドはバラバラで
しかも溶解して　もう終わりだ…」

「ひでーヤケドだ　こいつは死んだな
運が良くて重傷だな…いや運が悪けりゃかな…」

「どっちみち…3か月は立ち上がれんだろ…
スタンドもズダボロで戦闘は不可能！
さあ！
ジョースターさん　われわれは飛行機には乗れぬ身…エジプトへの旅をいそごうでは　ないか…」

さて、完全に終わったムードのみなさんに現状を教えてたげましょうかね

「まだだ、まだ終わらんよ。
まだ彼は続行可能ですよ?」

わたしが言うと同時に、チャリオッツが甲冑を外し、
「な…
なんだ…
やつのスタンドがバラバラに分解したぞ！」

飛び上がり、
「し…しんじられん」

「やつが寝たままの姿勢で空へ飛んだッ！」

「ブラボー！
おお…ブラボー！！」

これって、おちょくられてると見て間違いないですかね？

「こ…こいつはッ！」

「ピンピンしている…」

「火傷もよく見るとほとんど軽傷だ…し…しかし　やつの体がなぜ宙に浮くんだ！？」

「フフフ…感覚の目でよーく見てろ！」

わたしは見えてましたけど、やっぱりあると認識していたからでしょうね。

「これだ！
甲冑をはずしたスタンド「銀の戦車」！

あっけにとられているようだが
わたしの持っている能力を説明せずに　これから君を始末するのは騎士道に恥じる闇討ちにも等しい行為
どういうことか…説明する時間をいただけるかな」

「畏れ入る
説明していただこう」

「スタンドはさっき分解して消えたのではない
わたしのスタンドには「防御甲冑」がついていた

今　ぬぎ去ったのはそれだ
君の炎に焼かれたのは甲冑の部分……
だからわたしは軽傷で済んだのだ

そして甲冑をぬぎ捨てた分身軽になった
わたしを持ち上げた「スタンド」の動きが君らは見えたかね？
それほどのスピードで動けるようになったのだ！」

「なるほど　さきほどは甲冑の重さゆえ　私のC・F・H（クロスファイヤーハリケーン）をくらったということか…
しかし逆に
もう今は裸…
プロテクターがないということは今度再びくらったら命はないということ」
「フムム～～～…

ウイ　ごもっとも
だが無理だね」

「無理と？
ためしてみたいな」

「なぜなら君にとても「ゾッ」とすることをおみせするからだ」

「ほう　どうぞ」

アヴドゥルが言うとポルポル君のチャリオッツが増えた……ように見える程に動いている、んですよね。
ずっといったりきたりしているって想像したらなんか間抜けっぽく

思えますけど。

「な！？なんじゃ…！？
やつの「スタンド」が６……いや……７体にもふえたぞッーっ」

「ば…ばかな　スタンドはひとり一体！のはず」

「いえ、あれは増えた訳じゃあないですよ
ですがみなさん、「ゾッ」としたようですね」

「そう
そいつの言うとおり　これは残像だ……フフフ…視覚ではなく君の感覚へうったえる「スタンド」の残像群だ
君の感覚はこの動きについてこれないのだ…

こんどの剣さばきは
どうだァアアアア――ッ！？」

「おおおおお

クロスファイヤーハリケーン！」

今更ですが言わせてください
『何　故　に　ア　ン　ク』

アヴドゥルの　こうげき！
ミス！　ポルポル君は　ダメージを　うけない！
アヴドゥルは　じめんに　あなを　あけた！

「ノンノンノンノンノン
無理といったろう
今のは残像だ
わたしのスタンドには
君の業は通じない

また君の炎は地面に穴をあけるだけさ」

んで、アヴドゥルの顔にアンク形の傷が刻まれました。
映像で見たことありましたけど、あの時は丸形だと思ってました。

「なんという正確さ…
こ…これは…そ…相当訓練された「スタンド能力」！」

「ふむ…
理由あって１０年近く修行をした…
さあ　いざまいられい
次なる君の攻撃で君にとどめをさす」

「騎士道精神とやらで手の内を明かしてからの攻撃　礼に失せぬ奴…
ゆえにわたしも秘密を明かしてから次の攻撃にうつろう」

「ほう」

「実はわたしのＣ・Ｆ・Ｈにはバリエーションがある
十字架（アンク）の形の炎だが一体だけではない
分裂させ　数体で飛ばすことが可能！

C・F・H・S（クロスファイヤーハリケーンスペシャル）かわせるかッー！！」

「くだらん！アヴドゥルッ！
おおおおお！」

「！！
だめだ！やつのスタンドらが円陣を組んだ形をとったッ」

「死角がないッ！」

「はじき返されてまた炎を逆にぶつけられるぞッ！」

「しかし、アヴドゥルさんとて、そんなことは想定済みなんじゃあないですかね？」
実際、対策とってますしね。

「あまい　あまい　あまい　あまいあまいあまいあまいっ
前と同様このパワーをそのまままさまにィ――――ッ！

切断　はじき返してェェェェェェ！」

と、意気込んだところに足元の穴からアンクの炎が吹き出して、残像もまとめて吹っ飛ばしていきました。

「さっき炎であけた穴だ
さっきの炎はトンネルを掘っていた
そこからクロス・ファイヤー・ハリケーンをッ！」

「一撃めはトンネルを掘るためだった…
いったろう　わたしの炎は
分裂　何体にもわかれて飛ばせると！」

んで、アヴドゥルは倒れたポルポル君の前に短剣を投げて、

「炎に焼かれて死ぬのはくるしかろう
その短剣で
自害するといい……」

ポルポル君はアヴドゥルに短剣を投げようとして、やっぱり自害しようと首元に突きつけて、
「うぬぼれていた
炎なんかにわたしの剣さばきが負けるはずが　ないと…

フフ…やはりこのまま　いさぎよく焼け死ぬとしよう…
それが君との闘いに敗れたわたしの
君への「能力」への礼儀……
自害するのは無礼だな…」

諦めました。？

そこでアヴドゥル、指パッチン、炎を消して
…わたしのアレってこれの真似になるんでしょうか？

「あくまでも騎士道とやらの礼を失せぬ奴！
しかもわたしの背後からも短剣を投げなかった……！
ＤＩＯからの命令をも超える誇り高き精神！

殺すのはおしい！
なにかわけがあるな…こいつ…」
肉の芽を指しながら「なにかわけが」って、なんですか？
付けられることになった訳ってことですか？

「ＪＯＪＯ！」

「うむ」

肉の芽　摘出　開始　也

「うええ～～
この触手がきもち悪いんじゃよなァ～～
肉の芽をはやく抜きとれよ！
早く！

…と！
これで　肉の芽がなくなって　にくめないヤツになったわけじゃな
ジャンジャン　ヒヒ」

「花京院　オメー
こーゆーダジャレいうやつってよーっ
ムショーにハラが立ってこねーか！」

そんなこと言われたらわたし達どーなるのって感じですけど。

「そういえばエン　オメー
こいつが最初に仕掛けてきた時に「スタンド使い」がどーとか言ってたな…
あれはどういうことだ？」

「ん、それはですね…
わたしは、スタンドの匂いというか、スタンド使いの気配というかそんなのを感じることができるんです」

「「な、なんだってェーッ！？」」

まぁ、嘘ですけど。
当然勿論言うまでもなく事前の記憶（げんさくちしき）ですけどね、こんな嘘つくメリット無いのに何やってんでしょわたし。

第０５話：銀の戦車？キンクリできませんかね？（後書き）

▽空白・改行・タグを含む
６７８４文字
▽空白・改行・タグを除く
３１６４文字

３６２０文字分が空白・改行・タグ…
半分以上じゃあないですか

しかも殆どが原作文だなんて

これはちょっと、ダメな感じじゃあないですかねェ

…家出少女、名前付けようか否か

第０５．５話：ステータス（前書き）

とりあえず今界の遠音ちゃんのステータスというか説明というかそんな感じのを挙げてみましょ

第０５．５話：ステータス

篠江（しのえ）　遠音（とおね）
エン・カームリィ

通称：エン

性別：女性
（ただし外見は男性と見られやすい）

身体年齢：約１６歳

実経年：約百年

現在の（というより基本の）外見：顔立ちは東洋…というか日本風
しかしながら日本人とは思えない髪と眼の色
肩甲骨辺りまで伸びた髪を後ろで纏めている

ゆったりめの長衣で体型は分かりにくく、露出はかなり少ない
ある一部分は控え目
本来はそれなり

とりあえずジョジョ世界におくられたひと

それなりにやっていくつもり
干渉できそうならやる

所謂『不老』である
不死性－Ｃ　も持つ

「存在が薄いのか、スルー気味になるときが割りとあるんですよねぇ」

スタンド名：バリアブルズ（変幻／可変）
現時点で発揮した能力

『ＷＯＰ（言葉の力）』
・自分自身の出血の否認
・　〃　手首が切断されたことを嘘にした
・　〃　血痕を無かった事に

『バリアブルズ（可変鉱）』
・柔らかい硬合金を用意した

・それでスタンドクワガタを引き擂り潰した（ＷＯＰ）

ネタバレ
・物質同化型スタンド使い逃げてー！！

第０５．５話：ステータス（後書き）

そのうちちょいちょこ変わるかも、『可変』だし

第０６話：刺身か擂り身かっていうと、擂り身ですかね（前書き）

おはようさんです、韻です。　もとい、エンです。

先日、ポルポル君を仲間にしたジョースター一行は
わりと大きな船をチャーターして、それでまずは3日ほどかけてシンガポールまで向かうという予定を組んだようです。

その際のポルポル君による両右手の男……Ｊ・ガイルの件についての話は割愛とさせていただきます。
別にいらないでしょう？

と、いうわけで

【エンの奇妙な冒険】
第六話：暗青の月　の　調理法

……はじまります！

第０６話：刺身か揣り身かっていうと、揣り身ですかね

――香港沖　チャーター船上――

「しかし　おまえらな～
その　学生服はなんとかならんのか～！
そのカッコーで旅を続けるのか　クソあつくないの？」

「ぼくらは学生でして……
ガクセーはガクセーらしくですよ

というリユーはこじつけか」

「フン」

「それと　エンはどうした？
さっきから姿をみせんが」

「エンはさっき『ちょっと船を探険です、探索してきます！』って
言って中にいきましたよ」

ジョースター一行はチャーターした船に乗り、英気を養っていた。

いつ　敵が現れるかはわからないが、かといって常に警戒している訳にもいかない
そういうものである。

「はなせ　はなしやがれ　このボンクラが～～ッ！」
そんな時に、船内からそんな声が聞こえてきた。
「ちくしょう　はなせッ！はなしやがれ～～～！」
「しずかにしろッ！ふてェ～ガキだッ！」
船員のひとりが騒ぎ立てる子供を連れてきたようだ。
「おい…どうした！？
わしらの外には乗客は乗せない約束だぞ」

「すみません…密航です
このガキ　下の船倉にかくれてやがったんです」
「密航？」

「海上警察につき出してやる！」

「え？警察？

お…おねがいだ
み…みのがしてくれよー
シンガポールにいる父ちゃんに会いに行くだけなんだ
なんでも仕事するよ　コキ使ってくれよ～」

「どーしよーかなあ　みのがしてやろーかなー

どーしょーか・な
どーしょーか・な

やっぱりだめだね　ヤーだよッ！」

子供は見逃して欲しいと懇願するが、船員はおちょくりながら拒否をした。
それにしてもこの船員、ノリノリである。

そして最後の手段か、子供は海に飛び込み逃走を図った。船員の腕に噛み付き怯ませた隙に。

「おほ～～～っ
飛び込んだぞ…　元気いーっ」

「陸まで泳ぐ気だ」

「どうする…？」

「けっ　ほっときな
泳ぎに自信があるから飛び込んだんだろーよ」

「ま…　まずいっスよ
この辺はサメが集まっている海域なんだ！」

「なっ！

おい小僧！もどれーッ！
もどるんだ！」

「危険だッ！
サメだぞォ　サメがいるぞォ！」

子供が泳いでいると鮫が現れ、襲いかからんと向かって来た、が

「おらおらおらーッ！」

スタープラチナに殴り飛ばされていき、子供は承太郎によって保護されたが、その時に子供が女であることが発覚した。「やれやれだ……」

スタープラチナに殴り飛ばされた鮫が、突如真っ二つに切り裂かれた。

「じょ　承太郎ッ！下だ！
か…海面下から何かが襲ってくるぞッ！サメではない！
す…すごいスピードだ！」

鮫を切り裂いたモノが承太郎達の下から近づいてくる。

「承太郎　早くッ！早く船まで泳げッ！
と…遠すぎるッ！」

「あの距離ならぼくにまかせろッ　『法皇の緑』っ！！」

そのナニかに今にも攻撃されようかという時に、承太郎達は花京院によって海から引き上げられたため、ソレは近くにあった浮き輪だけしか破壊できず、姿を消した。

「う…うう…」
「き　きえたぞッ！」
「『スタンド』だッ！　今のは『スタンド』だッ！」

「海底の『スタンド』…
このアヴドゥル…うわさすらきいたことのない『スタンド』だ」

「この女の子　ま　まさか」

「……」

「今の『スタンド』の使い手か…？」

「…まさか
サメの海にＪＯＪＯをわざとさそいこんだか……？」

「な…なんだッー！てめーら
寄ってたかってにらみつけやがって　なにがなんだかわからねーが　や…やる気かァ！

相手になったるッタイマンだぜッ！
タイマンで来いッ　このビチグソがァ！」

この少女が、現れたスタンドの本体かと警戒するジョースター一行に対し、少女はポケットから折り畳み式ナイフを取り出し威嚇する。

（とぼけてやがるぞ―
もう一ペン海へ突き落とすか？）

（早まるな！本当にただの密航者ならサメに喰われるだけだ）

（しかし　この船の１０名の船員の身元はすべてチェックずみ
この少女以外に考えられん
なにか正体をつかむ方法はないものか？）

「おい　ＤＩＯの野郎は元気か？」

「……？　ＤＩＯ？
なんだそれはァ！」

「とぼけるんじゃあねーこのガキッ！」

「この田吾作どもッ！
おれと話がしてーのか　それとも刺されてーのか
どっちだッ！アア――？

ＤＩＯ？バイクの名かそれはァッ！

この妖刀が　早えーとこ三百四十人めの血をすすりてえって　慟哭しているぜ！」

「プッ」

「な　なにがおかしい！このドサンピン！」

「ドサンピン……
なんか…この女の子は違うような気がしますが…」

「うむ…しかし」

少女の反応から、だんだんとスタンドとは関係ないのではと思ってきた一行。

「この女の子かね　密航者というのは…」

その時、この船の船長だという人物が少女を掴まえた。

「わたしは…密航者には厳しいタチだ…」
「い…いて　いてて」
「女の子とはいえ　なめられると限度なく密航者がやってくる……
……」

そして少女の腕を締め上げ、ナイフを落とさせ、

「港につくまで下の船室に軟禁させてもらうよ」
「ひいい……」

連れて行こうとする。

「船長（キャプテン）…おききしたいのですが
船員１０名の身元は確かなものでしょうな」

「まちがいありませんよ　全員が１０年以上この船に乗っているベテランばかりです
どうしてそんなに神経質にこだわるのかわかりませんけれども…

ところで！」

承太郎が吸っていた煙草を取り上げ、

「甲板での喫煙はごえんりょ願おう…
君はこの灰や吸いがらをどうする気だったんだね
この美しい海に捨てるつもりだったのかね？
君はお客だが　この船のルールには従ってもらうよ

未成年くん」

帽子の金具で火を消し、ガラを彼のポケットに入れ、

「わかったね」

今度こそ少女を連れて行こうとする。

「待ちな
口でいうだけですなおに消すんだよ…
大物ぶってカッコつけんじゃあねぇ　このタコ！」

「おい承太郎！船長に対して無礼はやめろッ
おまえが悪い！」

「フン！承知の上の無礼だぜ
こいつは船長じゃあねえ　今わかった！
スタンド使いはこいつだ」

「な　「「なにィ――――ッ！」」」」

「スタ…　ンド？？
なんだね
それは…いったい」

「それは考えられんぞ承太郎
このテニール船長はＳＰＷ財団（スピードワゴン）の紹介を通じ　身元はたしかだ
信頼すべき人物
スタンド使いの疑いはゼロだ…」

「ＪＯＪＯ　いいかげんな推測は惑わすだけだぞ！！」
「証拠はあるのかＪＯＪＯ！？」
「ちょっと待ってくれ
『スタンド』？
いったい何を言ってるのかわからんが」

承太郎の言葉に騒然とするジョースター一行＋。

「『スタンド』使いに共通する見分け方を発見した
それは…スタンド使いはタバコの煙を少しでも吸うとだな…
鼻の頭に　血管が浮き出る」

「「「「えっ！」」」」
（みんな何やってんだ！？）
「うそだろ承太郎！」

「ああ　うそだぜ！
だが……マヌケは見つかったようだな」

「「「「「あっ！！」」」」」

ジョースター一行（一承太郎）とテニール船長が鼻に手をやっていた。

「承太郎なぜ船長があやしいとわかった？」

「いや　ぜんぜん思わなかったぜ

だが……
船員全員にこの手をためすつもりでいただけのこと……
だぜ」

「シブイねェ…
まったくおたくシブイぜ
たしかにおれは船員じゃあねー…本物の船長はすでに香港の海底で寝ぼけているぜ」

「それじゃあてめーは
地獄の底で寝ぼけな！！」

承太郎がそう言った時、

「きゃあぁぁぁ！」

「！！」
「「「しまったあっ！！」」」

「水のトラブル！
嘘と裏切り！
未知の世界への恐怖を暗示する『月』のカード
その名は『暗青の月（ダークブルームーン）』！」

スタンドが少女を抱え拘束していた。
「てめーらと6対1じゃあさすがのオレも骨が折れるから正体をかくし
ひとりひとり順番に始末してやろーと思ったがばれちまってはしょうがねぇーなぁ
5対1でやらざるをえまい

この小娘が手に入ったのはこのオレに運が向いている証拠……
今からこの小娘といっしょにサメの海に飛び込むぞ
当然てめーらは海中へ追って来ざるをえまい！…
おれのホームグラウンド　水中なら5対1でもおれは相手できるぜ
ククク…　やれるかな？」

「人質なんかとってなめんじゃあねーぞ　この空条　承太郎が　ビビリ上ると思うなよ」

「なめる…
これは予言だよ！

とくにあんたのスタンド　『星の白金』…　素早い動きするんだってなぁ
自慢じゃあないがおれの『暗青の月』も水中じゃあ素早いぜ
情報はきいているぜ
ひとつ　比べっこしてみないか？……
どんな魚よりも華麗に舞い泳げる
フフフフ」

言いながらスタンドを手摺に立たせ、飛び込む準備をするテニール船長（偽）。
その時、

「『キラージャック』は既に手摺に触っている……」

という声が何処からか聞こえ、暗青の月が乗っていた手摺が爆発と共に砕け散った。

「なにィーッ!?」
そして偽船長はバランスを崩して落ちかけ、スタープラチナのラッシュを喰らい、海に叩き落とされた。
少女も落ちるが、スタープラチナが掴まえた為に入水することはなかった。

「アヴドゥルなにか言ってやれ」
「占い師のわたしをさしおいて予言するなど「１０年早いぜ」」

ポルナレフに台詞を取られたアヴドゥルであった。

「『キラージャック』…本家本元のキラークイーン程の威力じゃあないから　一段下がった名前なんだよなァー
　わかるかねェ?トランプだよ」

そう言いながら一行の前に現れたのは、さっき少女を連れてきた船員だった。

「なにッ!?」
「きさまもスタンド使いかッ!」

「ストップ!ストーップ!だよ!皆の衆
　おれのことは、わっかりませんかねェー?」

警戒心も露(あらわ)に船員を睨む一行に対し、船員は軽口を叩きながら、片手を顔の横にやり、

顔を剥ぎ取った。

「どーもぉー、エンでーっす
わたしの完璧な変装、どうですかー？」

「「エン！」」

「ふふんー、これもわたしの能力のひとつ！
スタンド使いの気配がひとつ多かったですから、ちょっと船員さんに変身して様子を窺ってましたー」

言いながら元の姿格好に戻ったエン、どこか「やりきった」みたいな表情をしている。

そして一行からいろいろと言われているが適当に流していた。

さて、実況解説はこの辺でいいか？遠音。
おれはもう退場するからな、あとはおまえがやれよ。

はい、代行ありがとうございました。また今度、宜しくお願いしま

すね？

テニール船長（偽）は流され、波間に消えて行きました。
フリってのはわかってますけどね、わたしは。

「『暗青の月』……
自分のスタンドの能力自慢をさんざんしていたわりには大ボケかましたヤツだったな」

「承太郎どうした？
さっさと女の子をひっぱりあげてやらんかい！」

そんなこと言っても、無理なものは無理ですよねぇ。
ちょっぴりつらそう、承太郎君。
「ど……どうした承太郎！？」

「ち　ちくしょう　ひきずり込まれる」

「え！？」
「なんだって！」

フジツボがびっしり、進行形で増えてますよ？

「う…あああああッ！」
「こ…これはッ！」
「フジツボだッ
あの甲殻海生動物のフジツボ虫だ」
「『星の白金』の腕にッ！腕から船腹につながってビッシリとッ！」

「やつは…まだ闘う気だ……
やつを殴った時くっつけやがった
どんどん増えてやがる……
おれのスタンドから力が抜けていく……
パワーを吸い出して海中にひきずり込もうとしている……」

「い…いつのまにかいない！
船長がどこにもいない！」

「承太郎　スタンドをひっこめろッ！！」

「それができねーから…ヌウウ
かきたくもねー汗をかいているんだぜ」

そしてついに承太郎君の体が海に投げ出されました。
法皇の緑が助けようと手を伸ばしましたが、少女を掴むだけにとどまりました。

「ＪＯＪＯ！」
「し…しまったァ」
「ま…まずい」

まったく、追いかけようとは思わないんですかねぇ、
「仕方ないですね、どれ、わたしも…ッ」
わたしは、飛び込んで追いかけることにしますよ。

行ってみたら偽船長と承太郎君、対話中です。

これができるかちょっと不安だったんですけどちゃんと聞こえたからよかったです。

〔この俺をなめとったらいかんぜよ…おにいちゃん
海中とはいえ「スタンド」同士の会話が可能だからよって…
もう一ペンさっきのような生意気なセリフをたれてみィ！
おにいちゃんよオ　ああ～～～！？〕

〔てめー　なににになりてぇんだ？〕

〔……？〕

〔なりてえ「魚料理」を言いな
刺身になりてえのか？
カマボコか？
それともスリ身とかよ
てめーの「スタンド」を料理してやるからよ……〕

〔このバカが……
強がった口きいとるがよ　おにいちゃん
おたくは今　心の中でこんなことを考えてたいる

『こいつは一体どれくらいの時間　水中にもぐっていられるのか？』

『自分の限界は2分てとこだが　自分より長くもぐっていられるのだろうか？……』とねェ――ッ〕

またもやなんだかスルー気味ー？

〔ククク！ヒヒヒ！答えてやろう

俺の肺活量は普通の人の3倍よ……
そして訓練されている……
潜水の自己ベストは6分12秒！
この数字をきいただけで意識が遠くなるだろう」

わたしの場合、潜水時間はほぼ無限なんですよー、今は水中仕様ですからー。

「そしてッ！

『暗青の月』の水かきはスクリューの回転よりシャープに動く水中カッター
その上なめた口をきく前にてめーのスタンドをよお――くみてみろッ！」

そろそろ体全体にフジツボが広がってきてますね。

「『暗青の月』のつけたフジツボが　どんどんおまえの力（パワー）を吸い取って繁殖しとるぜ
どんどん力がなくなっていくのが実感できるだろう…ククク」

承太郎君浮上開始。
そろそろわたしも気付かれたいですから…まぁ、このままでも大丈夫ですか。

「ククク……
泳いで水面にのがれるか？
周りをよく見ろ！

ワハハハハ！

さっきから『暗青の月』が　水中に渦の流れをつくっていることに…

気がつかねェーのか？おにいちゃん！」

あーれー、と、わたしはわたしはやっと舞台上っ。

とりあえず挨拶でもしときますかねー。

「どうもー、いい加減に認識して欲しかったわたしでーす」

「エン…？その姿は……？」

「ふふん、驚きですかぁ？半人半魚ですよー」

そう、わたしの今の姿は

えら付き（耳の裏辺りに）

鱗付き　水かき付き　ひれ付き　なのです！

「偽船長さーん、今からそっち行って貴方に一発ぶちかましてあげますねー」

とりあえず挑発…ですかね？一言いって泳いで向かいます。

「はッ！てめーも水中で自由に動けるからって　俺に勝てる気でいるようだが…

この俺の『暗青の月』のウロコが舞う渦の中で　俺に近づけるとでも思ってんのかァーッ！？」

「確かにこの渦のなかにはカッターのような鱗が舞っていますが、それがどうだというのでしょう？」

鱗がわたしのとこまで飛んで（舞って？）きましたが、

カカカカカッ！

と、およそ肉体に当たるようなのではない音をたて、全て弾かれました。

〔なッ！？〕

〔ふふーん、その程度効きませんよ～
そして！辿り着きましたよ？それでは…〕

と、驚いている隙に偽船長の首に手を当て、

〔あでゅ～〕

スパッと、刈らせていただきました。
もちろん、出血は否認させていただきました。
『美しい海』を、汚してしまいますからね。

〔さあＪＯＪＯ、船に戻りましょう？
フジツボも消えましたし、そこまで苦にはならないでしょう〕

第０６話：刺身か擂り身かっていうと、擂り身ですかね（後書き）

失敗です！

失敗なのです！

暗青の月を擂り身にできませんでした！

それどころか料理さえできませんでしたし…

というか、最後あっさり終わらしてしまいましたけどよかったでしょうか？

さて次は、エテ公ことフォーエバー操る『力（ストレングス）』ですね。
人間の女好きということですが、わたしにも反応するんでしょうか？
なんとなく嗅覚とかで……やめときましょ。

では次回！
【エンの奇妙な冒険】
第七話：船の『力』と飛翔するわたし
反発力って、しってますか…？

第０７話：変質した『船』も、干渉圏内ですかね？（前書き）

パラメータ・ステータスを修正、わかりやすくなったかも？

今更ですが、文中で半角”！”を使うのは原作で無くて、私が必要と感じたところにいれた場合だけでしたり。
原文ままのは全角”！”

第07話：変質した『船』も、干渉圏内ですかね？

「や…　やはりあの船長　爆薬を仕掛けてやがったッ！」
「ちくしょう！」
「ちんな早くボートに乗りうつれッ！」
「近くの船に救助信号を出せッ！！」

こちらエンです。
わかってたことですけど船が爆発、使い物にならなくなり脱出中です。

わかってたんなら最初っから海に居りゃあどうとかいうツッコミは無しですよ。
ちょっと素材の再取を必要としたんですよ、さっき幾らか費(つか)っちゃったんで。
ナニを、とは言わないですけどね。

まぁ、そんなこんなでボート上な訳ですよ。
たしか船員十人って聞いたよーな気がしたんですけどそれより明らか多いのは些事ですか？

「水を飲むといい…
救助信号はうってあるから　もうじき助けは来るだろう…」

「なにがなんだかわからないけど
あんたたち　いったい何者なの……？」

「君と同じに　旅をいそぐ者だよ
もっとも　君は父さんに会いに…
わしは娘のためにだがね」

とか話してたら家出少女が飲んでた水を吹き出しました。

「こらこら　大切な水じゃぞ
はき出すやつがあるか？」

「ち…ちがう」
いや、なにも違うことないでしょうよ。
言わんとすることは判らんでもないですがね。
「み　み…　み…　みん　みんみんみん
みんなあれを！見て！」

「え！？」

少女の指す方向には
うわぁー、でっかいですねー。
とにかく貨物船（ストレングス）が在りました。
というか、ここまで近づいてて皆さん気付かなかった…ですと？わたしもですけど。
もしやして途中まで小さかったとか？

「おおおおーッ」
「か…貨物船だッ！」
「気がつかなかった！！」
「いつの間にこんな近くまで来ていたんだっ！」
「た…助かったッ！」
「タラップがおりているぞ
救助信号を受けてくれたんだッ！」
「ラッキーだ！」

「承太郎…　何を案じておる？
まさかこの貨物船にもスタンド使いが乗っているかもしれんと考えているのか？」

「いいや……
…タラップがおりているのに　なぜ誰も顔をのぞかせないのかと考えていたのさ」

「！」

シィーンとしてますね、はい。
正体を知ってるわたしとしては当然のことですけどね。

「ここまで救助に来てくれたんだ！
誰も乗ってねえわけねえだろーがァッ！
たとえ全員がスタンド使いとしても　おれはこの船にのるぜッ！」

と、いうわけでみんなして上に上がった訳ですが、

案の定　中に…？というか、船上に、だーれも居ませんよ？

それでも計器やら機械類は正常に作動しているというのはまぁ、確かにおかしいですよね。

『正常に作動している』というところに、あのおさるさん(フォーエバー)が船についてよく理解しているってのがわかるんじゃあないでしょーか。

「おいッ！！　だれかいないのかッ！」

「みんな来てみて
こっちよ！　こっちの船室

猿よ　オリの中に猿がいるわ」

はい、本体とエンカウントです。

とっととここで始末するってのが一番楽で被害も少ない、というより無い方法な訳ですが…

他の原作知識持ちの方ならそうするかもしれませんけど、生憎わたしには博愛精神…っていうんですかね？そういったものの持ち合わせはあまり無くて。

正直、貧弱一般船員なんて必要ないから間引いてもらおうとすら思ってるんですよね。

そりゃあ、わたしにだって人助けをしようと思ったり、実際にしたりすることもありますよ？

でも邪魔じゃあないですか、今は。

とかなんとかいろいろとつらつらと流れ思考に没していたらいつの間にか一人目が殺られてたようで、皆さん二組に別れて居ない敵の捜索に乗り出したようです。

家出少女とアレ(フォーエバー)しか居なくなった部屋に意識を戻すと、アレが錠を指してます。
だけどわたしら鍵なんかないってんですけどねぇー。

とりあえずアレのことは家出少女に任せてきとーに散策ですかねぇ
あとよろしくーとばかりに少女の肩に触れて。

猿人…もとい、エンジンルームに来てみたり。
なんとなーくで浮游しながら動き回ってたらメロンこと法皇の緑と遭遇。
なんで法皇より早く降りれてるかは企業秘密ってやつですよ。

とかいってたら法皇に話しかけられました。

「エン　スタンド使いの気配とやらは感じるか？」

「んー、いえー？わたしはいつでも知覚できるって訳じゃあないんですよ。
強いて言うなら、どこかとても漠然とした感覚なら今はありますけどね
お役に立てず申し訳って感じです」
まぁ、嘘ですけど。

ちょっとずつ誤魔化してあやふやにしていかないと後々困りそうだから、いろいろと虚言を重ねないとですからねえ。
具体的には『女帝』とか。
これを人は自業自得っていうんですかね？

そんな感じで法皇と別れてわたしはさらにふよふよと移動、シャワールームを目指します。

あまりゆっくりも出来ないよね

ちょっと速度あげよ

別れ際に家出少女に付けた発信器的なブツを目指してふぃーんと移動。

さあ着いたーと船員だったものを横目にシャワールームにきてみれば既にアレが居て。

ついでに承太郎君が壁に囚われてて。

さぁて、猿狩でも…「始めようかァ」。

アレの持ってき、開いている辞書に記されているもの

【Ｓｔｒｅｎｇｔｈ（ストレングス）

？Ｆｏｒｃｅ（力）
？Ｅｎｅｒｇｙ（元気）
？Ｐｏｗｅｒ（勢い）
？Ａｉｄ（助け）

……

？　タロットで　８番目のカード。
挑戦、強い意思、秘められた
本能を暗示する。】

…そんなこたぁどーでもいいんです。
まだアレは承太郎君に気をとられてるんですし、ちょいと試してみましょかね。

壁に触れて意識を向けてみる

どうやらいけそうだと解る

しかしできて数瞬、すぐに制御を取り戻されるに違いなく

故にあまり優先しない

取っててよかった船からの素材

まずは牽制、壁には触れたままで

できるだけ囚われないよう床に足はつけず

この室の、アレの足元より、アレへの突き上げる攻撃ができないなどというのは

「”嘘”ッ！！」

床から棒状に突き出させ、アレの腕を強かに打ちすえてやります。

一瞬ひるんだアレは、すぐにこちらに向き、どうやら怒っている様子。

瞬間とはいえ、自分のスタンドに干渉されたからでしょうか？

まぁ、関係ないですけど。

まだわたしの攻撃段階は終了した訳じゃあないですから。

片手に自動小銃、ずんぐりとした太めの大口径銃を出現させます。
そしてそれをアレに向けて、

ぎゅぼっ

という独特な鈍い銃声を二度響かせ、アレの片腕と片足を撃ち抜きます。

もちろん、撃ち抜かれた部位は既に炭化してます。

「ふぅ、流石は炭化銃。いい仕事してくれますねー」

などと言いながら、もう片手に１m程の槍を出してアレに近づいていきます、浮いたまま。

アレはどうやら恐怖しているようで、腹を見せ降伏の姿勢。
だからといって、わたしは何をも止めたりはしませんけど。

拘束が解けたらしいし承太郎君にとりあえず、

「ＪＯＪＯ、その娘をつれて外に行っててくださいな。　少々、精神衛生的によろしくないことをするんで」

アレが隙をみて攻撃してこないよう（物理的に飛ばして）釘を刺し

ながら言っておきます。

さて、行きましたね。

「それでは、調理を開始しますね?フォーエバー」

自画自賛したくなるほどのいい笑顔をアレに向けて、わたしは槍をソレの腹に突き刺します。

すこし悲鳴が五月蝿いですから、とりあえず顎を殴って綴じて（誤字じゃあないですよ?）やります。

んで、突き刺した槍の刺さっている部分から全方に棘を出してナカミをズタボロにしてやります。

「まだ終わらせませんよ?
この槍が発熱しないなんて”嘘”」

といって、コイツを中から焼いてあげます。
臭いなんて無視ですよ。

炭化銃を戻して、代わりに金属塊を取り出します。
これを使ってコイツを包んでやります。

中でジリジリジリーッと焼けているんでしょうかね、それほど興味ないですが。

もうどーでもいいですし、とっとと皆のところに行くとしましょ。

歩いて行きながら、だいぶ離れたところで指パッチン。

アレの末路の音など、聞こえません。

アレが死んでしまい、『力（ストレングス）』の効果も消えたので、皆乗ってきたボートで脱出しました。

「し…　信じられないわ…
船の形がかわっていく…

あんなにボロでちっちゃな船が今まで乗ってた船?」

「なんということだ…
あの猿は　自分のスタンドで海を渡って来たのか…
恐るべきパワーだった　はじめて出会うエネルギーだった…」

「我々は完全に圧倒されていた
承太郎が気づかなければまちがいなく…
やられていただろう」

「……」

「ガムかむかい?」

「あ、わたしはいいです。焼鳥があるんで」

「何故!?」

あははっ

「……これでまた漂流か？」

「やれやれ　モクがしけちまったぜ」

「かわかす太陽と時間は十分あるぜ　ＪＯＪＯ」

「無事救助されて　シンガポールに着けるよう祈るしかないな」

「日本を出て４日か……」

まぁ、わたしがいれば食糧難にはならないことを保証します。

しかしながら、何故にフォーエバーで遊んじゃったんでしょう、わたし？

第07話：変質した『船』も、干渉圏内ですかね？（後書き）

……どうしてこうなりましたか@対フォーエバーちょっぴりはっちゃけ遠音ちゃん

第０８話：人形が可愛らしかったら、むしろ気持ち悪いですかね（前書き）

つなぎ回の如き

超短いです

第０８話：人形が可愛らしかったら、むしろ気持ち悪いですかね

さぁ、やって来ましたシンガポール！
地図帳で何度やっても場所を覚えられないという仕様の国って記憶があります。

だからどうだって話ですけどね。

ポルポル君が荷物をゴミと間違えられるというちょっとしたこともあったり、未だに家出少女がついてきてたり（承太郎君が気になっちゃってる様子？）と、まぁそんな感じですね。

それはともかく、今日はホテルに泊まる事になってますし、普通なら散策とかするかもですけど

わたしは今、９１２号室ーポルポルームに向かっています。
そろそろ頃合いかと思ったんで、『悪魔（エボニーデビル）』戦にね。

着いたら中から声が。多分デーボでしょうかね。
どーやらベランダから飛び下りて、ついでにポルポル君を切ってったみたいです。

さぁいってみよー

「たしかにやつの「スタンド」はチラリと見えた！
しかし攻撃された形跡がないのに足をえぐられたんだ

とにかくだ…　5分後そっちへ行くぜ
1212号室12階だな……
花京院と承太郎　エンにも連絡をしてくれ！」

ノックしてもしもォ～し
電話を済ませた頃を見計らって入ってみます。

「やーやーポルナレフ、ちょっと騒がしいような気がしたから来てみたらスタンド使いに襲われたみたいじゃあないですか。
こんなこともあろうかと消毒薬と包帯持ってんですけど使います？」

「エンか…　悪いな
だがなんでそんなもん持ってんだ？
常備してるってわけでもなしに」

「こんなものくらいならわたしは瞬間に用意できるんですよ。
それよりポルポル君、その人形はどうしたんですか？」

ポルポル君の疑問は適当に流しつつ『悪魔』の依り代の人形を指して問うてみます。

「ん？こいつは最初っから部屋にあったぜ
インテリアのひとつなんじゃあないか？」

「そうですか
わたしの部屋にはこんなもの、無かったんですけど…」

言いながら人形に近づき、それの足に触れて

ボッ

と、破壊しました。

「ゲェーッ！」

いきなりの行動にポルポル君は驚いていますが、人形が叫び声をあげたのを見て驚きが割増されたみたいです。

「『疑わしきは罰せよ』でしたっけ？名言ですね。
そうそう、今は人形の体は動かないようにしてます。
だから…あー…えーっと……
やっぱりいいや、めんどくなりました、さよならバイビー呪いのデーボ
喋る間すら与えません」

とりあえず何かしようと思ったけど、途中でどうでもよくなったんで即殺処分といきましょう。
実際喋られたら汚い言葉が大発生とかなったりしそう、ってかするに違いないんで喋らせもしません。

「『エボニーデビル』、存在、否認。切り刻まれろ、”嘘”にはしない」

原作換算にして約３２ページ程の工程省略ですよ。

まぁ、そんなことはどうでもいいとして、ジョースター一行に集合の必要がなくなったことを伝えないとだめですね。

第０８話：人形が可愛らしかったら、むしろ気持ち悪いですかね（後書き）

前回のあとがき辺りに書いとけばよかったなーってこと

オランウータンとは「森の人」という意味
現地の言葉ではその猿を「マワス」という

たしかこんな感じだったよーな

第０９話：どんな肉料理をご希望ですかね？（前書き）

ちゃんとよそ見せんとしっかりやりゃあこんな時間になりゃあせんのにねェ…

第09話：どんな肉料理をご希望ですかね？

『きさま！見ているなッ！』

のイベント見たかったなーって、ちょっと思ったり。

でも『節制』の方を優先するから無理でしたけど。

とりあえず、インドへ向かうバスか列車の手配をしに行きましょ。

と思いきや寄り道で甘味屋…？みたいな店に来てます。

「アイスクリームちょーだい」

「らっしゃっい

おじょうちゃん

アイスクリームもいいが　こいつはうまいよン

ひんやり冷えたヤシの実の果汁だ　どうだい？」

「4シンガポールドルもするじゃん　観光客用にぼってる値段かよ

２ドルならのんでやるぜ」

「あのねー
ナチュラル・ピュアテイスト１００％なのよン
さっき木からとってきたばかりのやつに」

ガン

「…と穴をあける
するとアーラビックリ！こんなにきれいな果汁がタップンタップンなんだよぉ～～ん　トロピカルゥ！
とっても甘むぁ～くて　しかもさわやかァ～～～
果肉もおいしいよ　スプーンでどうぞ」

「飲んでみるか　４つくれ」

「へイどーも　１６ドルっす」

「おい８ドルにしろ８ドル」

屋台のお兄さんがなんとしてでも売ろうという意気込みできてるような気がします。

んで、花京院が払おうと財布を出したら、スリが財布奪っていきました。が、

花京院が法皇を出してスリをこかし、

「てめー　おれのサイフを盗めると思ったのかッ
このビチグソがァ～～～～～～っ！」

「え？」

「……

どうした？花京院」

「ヘドぶち吐きなッ！」

「花京院！」

「この　こえだめで生まれたゴキブリのチンボコ野郎のくせに
おれのサイフを！
そのシリの穴フイた指でぎろうなんてよぉ～～～～～っ！！
こいつはメチャゆるさんよなあああああ！」
「うげァあああああ
あがっ　あがっ　うげっ　おげっ
ゲボーッ！！」

顔に膝蹴りかました後、バックブリーカーをかけだしました。

バックブリーカーがわからない方の為に説明させていただきますと、「自分の肩の上に相手を仰向けに乗せ、あごと腿をつかむ。自分の首を支点として、背中を弓なりに反らせることによって背骨を痛めつける技」です。
厳密にはこの技は、アルゼンチン・バックブリーカー。別名アルゼンチン式背骨折り、人間マフラー　と呼ばれているそうです。

こういう情報説明は兄さんの役ですけどねぇ。居ませんけど。

「おい！なにをしているんだ花京院　死んじまうぜ
やめろ　血をはいてる」

「す…すごい！バックブリーカーなんて荒業を！
それにあんな下品なセリフをあの人がはくなんて…」

「ほら　ほーら　ほーら」
「ゲボ　ゲボ　ゲボ」
「花京院！！
やめろといってるのがッ！わからねェのかッ！」

いい加減スリがやばいことになってきてるんで承太郎君が花京院を突き飛ばして止めました。
「てめー花京院
どうかしてるぜ　興奮しているのか？」
「ガボガボ！」
「（……）

痛いなあ…
なにも　ぼくを突き飛ばすことはないでしょォ
こいつは　ぼくのサイフを盗ろうとした　とっても悪いやつなんですよ
こらしめて当然でしょ！
ちがいますかねェ？承太郎くん！」

「（……こいつ）」

「なににらんでるんだよ
ずいぶんガンたれてくれるじゃあないか承太郎くん
まさか　あんたァ――
こんな盗っ人をちょいと痛めつけたってだけで

このぼくと仲間われしようっていうんじゃあないでしょうねぇ――」

どうみても”ちょいと”ってレベルじゃあないですよねぇ。なんか常に顔…というか、表情?がおかしいですし。ラバーソールだから仕方ない。
近くの木にカブト虫がいるのをチラリと見たり。

「フフフ

ＪＯＪＯ　そう大げさに考えないでくれよ
今日はちょっとばかりイラついていたんだ…旅につかれ始めてね
機げんが悪いって日さ…
君だってそういう時があるだろう…
たしかに　ちょっとばかりやりすぎて　痛めつけてしまったな」

「『機げんが悪い?』……
良さそうにみえたがな

じじいとアヴドゥルは列車でインドへ向かった方がいいと計画している
明日出発だ
シンガポール駅へチケットを予約に行くぜ」

言って承太郎君は歩いていきます。

しかし花京院はその場でバリバリジュルジュルカリコリバリバルコリコリジュルンズルズバ言わせながら食べ続けてます。

「花京院さん　ＪＯＪＯがどんどん歩いていっちゃうよ」

家出少女が言うとピタリと止め、

「あ…ああ　すぐに　おいつく…」

と言ったり。

「花京院さん　ずいぶんココナッツジュースが大好きみたいね」

と言った家出少女に反応して振り向いた花京院の口元に、カブト虫の脚が見えます。

（い…今のは…カブト…い…いえ！

見まちがいだわ！きっとココナッツのスジかなにかよ……）

「うん　すごく好きなんだ　……ココナッツ」

そんな花京院が怖くなった家出少女、承太郎君に駆け寄り腕にしがみつきます。

「どうかしたか？」

「な…なんでもないわ」

ここらでひとつ、わたしの能力の”嘘設定”を少し調整しましょうかね。

「ＪＯＪＯ、花京院君、以前わたしはスタンド使いの気配がわかるって言いましたよね？

実はあれって、わたしが怪しいって思ったり、既に認識してるっ

て時にしかわからないんです。
あとどういうスタンド使いか、っていうのはまず解らず、ただ居るということだけ、解ります。
例えば今でいうと、知覚できる範囲…１０メートルですが、その中には二人だけ居る。ということだけ解ります。
つまりＪＯＪＯと花京院君ですね」

これで、少しくらいはマシになりましたかねぇ？
あーあ、こんな無駄な”嘘”、ホント邪魔で仕方ないですよ。
言わにゃきゃよかったなぁ。

ケーブルカー乗り場に来ました。

「あのケーブルカーで丘の上まで行くのかい？
よお承太郎　そのチェリー食うのかい？
食わないならくれよ　腹がすいてしょーがねーぜ！」

承太郎君は下を見ながら花京院にチェリーを取るようアイスを向けます。すると、

「おおっとー　あぶないッ！承太郎くん！」
「ううっ！」
「きゃあーっ！　ＪＯＪＯ！」

花京院が承太郎君を突き落としました。
ま、すぐに戻りましたけど。

「じょうだんッ！ハハハハ？
じょうだんですよぉ～～～～っ　承太郎くん

レロレロレロレ

ケーブルカーが来たぜ　乗れといってるんだ
このおれの切符（チケット）でな

なにかにとりつかれているてめーは　この拳でブッ飛んでのりなということだ」

「！」

「オラッ」

承太郎君が花京院を殴ると、花京院の顔が顎から裂け、ケーブルカーの中まで吹っ飛んできました。

見ようによっては……というか、どうみてもホラー風味ですね。

「！なにッ！？！？」

「きゃあああ～～～ッ！！」

「ヒヒヒ　ちがうなあ
とりつかれているのとはちょっと　ちがうなあ～
レロレロレロレ

「おれは食らった肉と同化しているから一般の人間の目にも見えるしさわれもする『スタンド』だ
「節制」のカード　イエローテンパランス！
これがおれの本体のハンサム顔だ」
バババァンと弾けて顔露出、自称ハンサムラバーソール。それがなにか？
「ほーれほーれ承太郎先輩ィ～～～手を見なさあい！
君の手にも今　殴ったとこに一部が喰らいついているぜ」
小指の外側に、ね。

「いっておく！それにさわると　左手の指にも喰らいつくぜ　左手の指はハナでもほじっていな！
じわじわ食うスタンド！食えば食うほど大きくなるんだ　ぜったいにとれん！」

「や　やろー……
オラアッ！」

「なにがオラだッ！
消化するとき　その口の中に　てめーのクソをつめこんでやるぜッ！」

…下品。
殴りかかったスタプラの右手を肉で捉えて「や…焼ける！」ケーブルカーの窓に叩きつけて窓ガラスを割りました。
「ヒヒヒヒヒヒ」
「て　てめ～」

家出少女は置いてけぼりでケーブルカー内で戦闘開始ですよ。
脳内ＢＧＭは「真っ向勝負！」で。

今頃少女はジョセフさんに電話してんでしょーね。

「まず教えといてやる…
耳クソをストローでスコスコ吸い取ってよおーく聞きな…
おれのスタンド「黄の節制」に
弱　点　は　な　い　！

おれのスタンドはいうなれば！『力を吸い取るよろい』！『攻撃する防御壁』！
エネルギーは分散され吸収されちまうのだッ！
てめーらのスピードがいくら早かろーが　力がいくら強かろーがこの「スタンド」――『黄の節制』の前には無駄だッ！
おれを倒す事はできねーし　その右手は切断するしか逃れる方法はないィィ！
ドゥー　ユー　アンダスタンンンドゥ！」

「（ＪＯＪＯ、わたしがなんとかしてアレのスタンドのガードを開いてみるので、その隙に一発ぶちかましてやってください）」

「（ああ　わかったが…できるのか？）」

「（できるかどうかじゃなく、やるんですよ）」

さて…

「やれやれ、確かにこれは弱点の無さそうなスタンドですね。

わたしの『キラージャック』で爆破しても飛び散るだけで駄目でしょうし、他のでも効くとは思えません。」

ま、炭化銃ならいけるでしょうが、今回は使いません。

「ですが…効くのが無いというのなら、『創ればいい』じゃあないですか？ソラァッ！」

言いながら、ラバーソールの顔面に殴りかかりますが、

「弱点は　ねーといっとるだろーが　人の話きいてんのかァ　この田ゴ作がァ――！」

と、『節制』でガードされます。

しかし、わたしの拳が触れた所が、『石化』しました

「なんだとッ！？」

「『バジリスク』…殴った場所を石にする能力です。ＪＯＪＯ！」

「オラァッ！」

そして石化した部分ごと、ラバーソールの顔面をスタプラで殴りました。

「ゲブァ！

あはひィィ　はひィ～～　はひィ～～

や…やめちくれェ～～っ

もう戦えない……

もう殴るのはやてめくれーっ

もう再起不能だよォ～～～～～～～

鼻の骨（ハガのフニ）が折れちまったァ

歯も何本かブッ飛んだよォ……

下アゴの骨も　針金でつながなくちゃあならねーよ　きっとォ…
はひィーはひィー

治療をうけさせてくれ～～～
おとなしく2か月は入院するよォ
おれはＤＩＯに金でやとわれたんだ…
ブゲゲ…命をはってまであんたらを狙うつもりはもうねぇ！」

なんていうか…よく喋る…。

「しゃべってもらおうか…
これから襲ってくる「スタンド使い」の情報だ…」

「そ　それだけは口が裂けても言えねえ…ぜ
「誇り」がある…
殺されたって…仲間のことはチクルわけには…いかねえ…ぜ」

「なるほど　ごりっぱだな」
「思い出した　「死神」「女帝」「吊られた男」「皇帝」の４人がおまえらを追ってるんだった！」

承太郎君が殴ろうとする動作をしただけでこの掌返し。いっそ清々しいですね、ある意味。

「ふーん　で！どんな能力だ？」

「し…知らねえ
いや！こ　これは本当に知らねえ！
スタンド使いは能力を他人には見せない…
たとえ味方でも見せることは弱点を教えることにほかならねえか

らだ
た　ただ…
ＤＩＯに「スタンド」を教えた魔女がいるが　その息子が４人の中にいる…
名前はＪ・ガイル　目印は両手とも右手の男！
カードの暗示は「吊られた男」……
ポルナレフの妹のかたきだろ？
そいつの能力は少しだけうわさで聞いたぜ…

「鏡」だ　「鏡」を使うらしい
実際見てねーがポルナレフは勝てねーだろう　死ぬぜ」

かれらが話している間、わたしは隙だらけのように振る舞っています。ラバーソールが思い上がって攻撃してくるように。

「承太郎……ヒヒヒ…
幸運の女神はまだおれについていたようだぜ」

かかりましたね。
ラバーソールの近くにいたわたしに、『節制』の肉が覆い被さりました。

「ぐわはははは！　こいつを人質にさしてもらったァッ！！
おまえは殴れなきゃ石にはできないんだろう？
これでもうオレを攻撃できまいッ！
今　おれが話した「両手とも右手の男」のことは無駄になってしまったな
おれのすぐ近くにこいつが立っているとは　まったく幸運よのうォー　おれってさあ――っ

おめーを殺せばＤＩＯに一億ドルもらうことになってる……ヒヒたった数分の戦いでそれだけかせげるなんてよ　マイク・タイソン以上におれって幸運（ラッキー）だと思わんかい～～～～！？　このタマナシヘナチンがァ――――――っ！」

また下品な…。

しかし、誰が『殴れなきゃできない』なんて言いましたかねぇ？

「やれやれ、自分のこととというのは自分ではなかなか見えにくい……

気がつかないんですか、本当にあなたが幸運（ラッキー）だったのは「いままでだ」ということに……

鼻を折られた程度で済んでいたのが……

真の幸運（ラッキー）だったということにッ！

『メデューサ』ッ！」

言ってわたしの周りの節制の肉をだんだんと石にしていき、爆破も使い破壊していきます。

「ゲェ！バカなッ！」

「『メデューサ』…選択した対象を石にします。『バジリスク』の上位互換ですね。

ほれほれほれーっ」

「プゲェーッ！」

そして石にしたモノをラバーソールにぶつけたりしてやります。

んで、承太郎君がラバーソールの髪をひっ掴んで頭を引きました。

「ハハッ　じょ…じょうだん！
じょうだんだってばさあ　承太郎さんッ！ハハハハハ
ちょ…ちょっとしたチャメッ気だよォ～～ん！
たわいのないイタズラさあ！
やだなあ！　もう～！
本気にした？
ま…まさか…もうこれ以上殴ったりしないよね……？
重症患者だよ　鼻も折れてるし　アゴ骨も針金でつながなくちゃあ
ハハハハハ　ハハハハハ」

「……
もう　てめーにはなにもいうことはねえ…
……とてもアワれすぎて」
何も言えねえ
「オラオラァ！」
「ドベェーッ！」

はい、『黄の節制』・ラバーソール戦、終了！

そしてインドへ向かう列車の中です。

「いよいよインドへ向かうか
ところであの女の子はどうした？」

「列車の出発間ぎわまでシンガポール駅にいたんだがな」

「きっと　おとうさんとの約束の時間が来たので　会いに行ったのでしょう」

「あのガキ　どうもお父さんに会いにきたってのがうそくせーんだよな　ただな浮浪児だぜ　ありぁ……
ま…いないとちょいとさびしい気もするが……なあＪＯＪＯ」

「……」

「しかし　シンガポールでのスタンドだが
まったくいやな気分だな　ぼくそのものに化けるスタンドなんて……」

「ホテルを出る時から　もうすでに　変身していたらしい」

「ＪＯＪＯ　そのチェリー食べないのか？ガッつくようだが　ぼくの好物なんだ……　くれないか？」

「ああ」

「サンキュー

レロレロレロレロレロレロレロレロレロ
レロレロレロレロレロレロレロレロレロ
レロレロレロレロレロレロレロレロレロ

…おっ　ＪＯＪＯ見ろ　フラミンゴが飛んだぞ！」

「やれやれ」

これは…ラバーソールが花京院のことを、しっかり調べてたって事

…なんですかねぇ…？

第０９話：どんな肉料理をご希望ですかね？（後書き）

「七人目のスタンド使い」と被らないようにしようとした結果がこれですよ！

第１０－Ａ話：ホル・ガイルって略すのは、だめですかね（前書き）

嘘みたいでしょう…？
９割方が原作なんですよ、これ…

第１０－Ａ話：ホル・ガイルって略すのは、だめですかね

「アヴドゥル…　いよいよインドを横断するわけじゃが
その……ちょいと心配なんじゃ……
いや…『敵スタンド使い』のことはもちろんだが
わしは実はインドという国は初めてなんだ
インドという国はこじきとか泥棒ばかりいてカレーばかり食べていて　熱病なんかにすぐにでもかかりそうなイメージがある」

「おれ　カルチャーギャップで体調をくずさねェか心配だな」

「フフフ
それはゆがんだ情報です
心配ないです　みんな…
素朴な国民のいい国です…
わたしが保証しますよ…
さあ！　カルカッタです　出発しましょう」

「ねえ……めぐんでくれよォ」
「バクシーシ」「バクシーシ」「バクシーシ」
「ねェ…　お金ちょうだいよォ――」　ドヤドヤ

「ドルチェンジ　レートいいね」
「イレズミほらない？きれいね」
「毒けしいらない？おなかこわさないよ」　　ワイワイ
「ハロー友だち　ハシシ・マリワナ安いよ
品質ベリーグッドね」
「ホテル紹介するよ」
「うた歌うからきいておくれ
♪アア～♪オ～～～ンン～～トォ～～♪」　ブーッ　ブーッ
「カメラ・ウオッチ・ボールペン・ライター売る気ない　高く買うね」
「ワーン　おかあちゃーん」　　パパーッ
「女の子紹介するよ　ベリィヤングね　ババアじゃないよ」
パパー　パパーッ
「ワン　ワン　ワン」
「どけどけェーッ
ほらァおれは卵を運んでいるんだよどいたどいたァ」「プカプカ」
ゲオ
「グーグー」
「アア～～♪オアア～～♪ソミカ～～～♪イ～ノォ～♪」
ワイワイ
ボドボド
「グーグー」
ワ～ン　ワ～ン
「バクシーシ　バクシーシ　恵んで！」
「恵んでくれないと天国へ行けないぞ　ニイチャン」
「恵みなよ　コラッ！」
「うえぇ～～～～！
牛のウンコをふんづけちまったチクショー」
「ぼくはもうサイフをすられてしまった」
「わたしも持ち物が二つほど無くなってしまいました」

「歌　うまいだろ　ダ賃くれ」
「た…たまらん雑踏だ！
　おお！タクシーだ　あれに乗ろう」
「おれだ！おれがドアをあけてチップをもらうんだ」「おれだおれだ」「おれが先だ！わ――――っ」
「ダ賃くれ」「ダ賃」
「だんなダメダメ
　この牛が昼寝からさめ　どくまで出発できませんぜ
　戒律で牛は神聖な生き物なんす」「モオオオ～～」
「ねェねェ　もっとダ賃くれよォ　ダチィィ～ン」くれーっ
「こら！ハナをつけるなハナを！」
「ア　アヴドゥル　これがインドか？」　ワイワイ
「ね　いい国でしょう
　これだからいいんですよ　これが！」

あー、あ～、ぇ～。
はい、エンです。
あんなに人が多いとこに居たのは確かわりと初めての経験でした。
ただ人が多いってのは無い訳じゃあなかったですけど、あれほどまで…というか、囲まれてしまうということはなかったですねぇ。
んでもって、今はレストランっぽいとこで休憩中であります。
「要は　なれですよ　なれればこの国のふところの深さがわかります」

「なかなか気にいった　いい所だぜ」
「マジか承太郎！　マジに言ってんの？お前」

「フ～～
インドか…驚くべきカルチャー・ショック
なれれば好きになる…か
ま…人間は環境になれるっていうからな」
ポルポル君はトイレに行きました。
ここで「トイレでの災難」の記念すべき（する必要はまっっっっっっっっっっっっったく無い）第一回目がある訳ですが、描写はわたし的にいらないので割愛とさせていただきます。
でも『吊られた男』との初遭遇（ふぁーすとこんたくと）くらいは観測してもらいましょーか、それじゃあよろしゅうに。

「トイレでの災難」を済ませたポルナレフ、手洗いをしていると鏡に妙なモノが写った。
「はッ！」
しかし、振り向いても　その方向には　ダレモイナイ。
「い…いない！
き……気のせいか……
今…その窓の下になにか異様なものがいたような気がした……
……が…
つー　ムリもねーか…

便器の中にブタがいたんだからな
そりゃあ窓の外に怪物の幻でもみるな
インド・カルチャーショックってやつか…」

と言いつつまた鏡に向き直ると、やはり奇妙なモノが居、窓を空け室内に這入り込んでくる。
「なにィ――――！　えっ　え？」
しかし実際に振り向き見ればナニカも居ないし窓も空いていない。

鏡を見る、ナニカが居る。
窓を見る、ダレモイナイ。
「な！？
なんだこいつは！？
鏡の中だけにッ！見えるッ！」

ナニカは右手首に刃を出し、ポルナレフに突き立てんとしてくる。

「な…なにかやばいッ！『シルバーッ　チャリオッツ！』」

危険を感じたポルナレフがチャリオッツで鏡を突くが、ただ鏡を割るだけという結果にしかならない。

「なっ　なんだァ～～こいつはッ！？
ちっ　ちくしょうッ！

『スタンド』！
ほ…本体は…どいつだ！？どの野郎だ！
この人の数…く…くっそぉ～！？」

外に出て周りを見回してみても、人が多すぎて誰がそうなのか、何

処に本体が居るのか全く判らない状態であった。
そこにジョースター一行全員が駆けつける。
「どうしたポルナレフ」「何事だ!?」

「いまのがッ!　今　のがスタンドとしたなら……ついに!
ついに!やつが　きたぜッ!　承太郎!エン!
おまえらが　きいたという　鏡を使うという「スタンド使い」が
来たッ!

おれの妹を殺したドブ野郎～～～ッ
ついに会えるぜ!」

割れた鏡のひとつに、ナニカが未だ写り込んでいた…。
「クク!……」

「ジョースターさん　おれはここで　あんたたちとは別行動をとら
せてもらうぜ

妹のかたきが　この近くにいるとわかった以上　もうあの野郎が
襲ってくるのを待ちはしねえぜ
敵の攻撃を受けるのは不利だしおれの性に合わねえ
こっちから探し出してブッ殺すッ!!」

「相手の顔もスタンドの正体もよくわからないのにか?」

「『両手とも右手』とわかっていれば十分！　それにヤツの方もオレが追っているのを知っている
　ヤツもオレに寝首をかかれねえか心配のはずだぜ」

ポルナレフはそのような事をのたまいつつ一人行動しようとする。
彼の科白（セリフ）について、エンは「（無駄に自信があるようで……というよりは、思い上がりですね）」などと思っていたりするが口には出さずただ見ているだけでいる。
「こいつはミイラとりがミイラになるな！

　ポルナレフ　別行動はゆるさんぞッ！」

「なんだと
　おめー　おれが負けるとでも！」

「ああ！
　敵は今！おまえをひとりにするためにわざと攻撃してきたのがわからんのか！」

「いいか　ここではっきりさせておく
　おれはもともとＤＩＯなんてどうでもいいのさ
　ホンコンでおれは復讐のために行動をともにするとことわったはずだぜ
　ジョースターさんだって承太郎だって承知のはずだぜ
　おれは最初からひとりさ　ひとりで戦っていたのさ」

「かってな男だ！
　ＤＩＯに洗脳されたのを忘れたのか！

ＤＩＯが全ての元凶だということを忘れたのかッ！」
「てめーに妹を殺されたオレの気持ちがわかってたまるかッッ！！
以前ＤＩＯに出会った時　恐ろしくて逃げ出したそうだなッ！
そんなこしぬけにおれの気持ちはわからねーだろーからよォ！」

「なんだと？」

「おれにさわるな
ホンコンで運よくおれに勝ったってだけでオレに説教はやめな」

「きさま！」

「ほお～～～
プッツンくるかい！
だがな　オレは今のてめー以上にもっと怒ってることを忘れるな
あんたはいつものように大人ぶって　ドンと　かまえとれや！アヴドゥル」

アヴドゥルがポルナレフの軽率とも無謀ともとれる行動を諫めようとするが、ポルナレフは聞く耳を持たない。

「……こいつ」

いい加減腹がたったアヴドゥルが殴りかかろうとするがジョセフに止められる。

「ジョースターさん」
「もういい　やめろ　行かせてやろう
こうなってはだれにも彼をとめることはできん」

「……」「……」
「いえ…
彼に対して幻滅しただけです
あんな男だったとは思わなかった」
彼等は立ち去るポルナレフをただ見ているしかなかった。

一方その頃のJ・ガイルとホル・ホース
「「シルバーチャリオッツ」のポルナレフだが　単独行動でおまえを探し回ってるぜ
どうするね……？
おめーがわざとおびき出しているのにひっかかりやがったな
殺るのは　ヤツからか？」

話していると一匹のヘビがJ・ガイルに咬みつこうと近づいてきた。それを見たホル・ホースは右手に銃を出現させ、ヘビの首を撃ち抜く。それでもJ・ガイルに飛んでいくヘビの頭部に、彼の側に置いてある酒瓶に写り込んでいるナニカが、同じく写り込んだヘビを切り裂くような動きをすると、実際にヘビの頭部がバラバラに切り裂かれた。

「行くか
『吊られた男（ハングドマン）』のおまえと
『皇帝（エンペラー）』のこのホル・ホースがいれば　やつらはみな殺しだぜ」

街に向かう二人だった。
ときに、ホル・ホースの乗っていた象は放置なのだろうか？

「なにッ！　見ただと？両手とも右手の男をたしかに見たのか？」
コクリ
「どこでだッ？」
スッ

ポルナレフは聞き込みをしていたが、ついに手掛かりを見つけた。
乞食の一人が知っていたらしく、見たという方向を指差した。

「どいつだッ！？　どの野郎だッ！？」
「あれぇ？
おかしいな……ひ…ひとり見失っただ
今　そこにいたのに……」
「なにッ！」

しかし、片方を見失ってしまったらしい。
そこに居たのはホル・ホースだけだった。

「「銃は剣よりも強し」
ンッッン～　名言だな　これは」

「あ？あァ～？　なんだ？てめ～わ？」

「ホル・ホース
おれの名前だぜ……
「皇帝」のカードを暗示するスタンド使いってわけよォ
あんたらを始末してこいと　ＤＩＯ様に金でやとわれたってことさあ」

「おいイナカもん
てめーの自己紹介は必要ないぜ
両右手の男を知っているのか？」

「かってなヤローだ　あんたがきいたから答えたんだ……　まあいい
やつとはいっしょに来た…　近くにいるぜ」

「なに……どいつだ!?」

「それこそいう必要のねーことだぜ
このホル・ホースがあんさんを始末するからな」

「おめーのようなカスはみんなそういうぜ!そしていつも逆におれにやられる…」
「フッ」

「ホォ～　おかしいか」

「フフフ　ＤＩＯ様がいってたぜ
ポルナレフって野郎は人を甘くみる性格してっからオレになら簡単にたおせるってな
そのとおりなんでおもわず笑っちまったぜ　ヒヒ」

「きさまを先に倒さなきゃ「ヤツ」に会えねえってならそうしてやる…かかって来い」

「軍人将棋ってあるよな
「戦車」は「兵隊」よりも強いし「戦車」は「地雷」に弱いんだま…戦いの原則ってヤツよ
このホル・ホースの「皇帝」はあんさんより強いからおれのスタンドの能力を戦う前におしえといてやるぜ…『銃は剣よりも強し』
名言だな　これは」

「さっきからなにがいいてえんだ」

「おれの「スタンド」は拳銃(ハジキ)だ
拳銃(ハジキ)に剣では勝てねえ」

「なに?おハジキだあ〜〜?」

「ワッハハハハハハハハハハハ――ッ!」
「イヒヒヒ

それに対しポルナレフは解放モードで対抗しようとするが、

「なっ　なにィィ!?イゥ!?　（バ…バカな　軌道が曲がった!
し…しまったッ!!）」

剣が触れる寸前に銃弾の軌道がそれを避ける動きをした。

「（弾丸だってスタンドなんだぜ〜〜っ
オレをナメきってそこんとこを予想しなかったあんさんの命とりなのさぁ――）」

そして銃弾がポルナレフに当たろうという瞬間、

「ポルナレフ!」

アヴドゥルがポルナレフを押し倒し、銃弾はあらぬ方向に飛んでいった。

「ア…アヴドゥル」

「心配して来てみりゃ　いったことじゃあない!　うぬぼれが強すぎるぞポルナレフ
相手はおまえを知りつくしているんだぞ!
おまえはひとりで生きてきたといったが　これからはおまえひとりでは勝てんぞ」

「し　心配だと?この野郎〜〜　まだ説教にやって来たのかッ!」

「とんだところでじゃまがはいったが…」

「どけッ！ポルナレフ　弾丸がもどってくるッ！」
アヴドゥルはポルナレフを押しやり、
「焼きつくしてやるっ！『魔法使いの赤（マジシャンズレッド）』！」
スタンドを出現させた。

そして、花京院とエンが追いつき、道の角から姿をあらわした時、
かれらが見たのは

水溜まりに写り込んだナニカ―『吊られた男』と、それに背中を刺
されたアヴドゥル

そして『皇帝』の弾丸がアヴドゥルの額を貫いた、という結果だっ
た。

「ほう～～
こいつぁついてるぜ！
おれの「銃」とJ・ガイルの「鏡」はアヴドゥルの「炎」が苦手
でよぉ
一番の強敵はアヴドゥルと思ってたから……ラッキー！
この「軍人将棋」は　もうこわいコマはねぇぜッ！」

「アヴドゥルさんッ！
バ…バカなッ！」

「ちぃ！
説教好きだからこーなるんだぜ
なんてザマだ」

「な…なんだと?ポルナレフ」

「だれが助けてくれとたのんだ
おせっかい好きのシャシャリ出のくせにウスノロだからやられるんだ…
こういうヤツが足手まといになるから　おれはひとりでやるのがいいといったんだぜ」

「た…助けてもらってなんてヤツだ」

花京院はポルナレフの態度に憤るが、彼の足元に雫が落ちていくのに気づく。

「迷惑なんだよ
自分の周りで死なれるのはスゲー迷惑だぜッ！このオレはッ！」

振り向いたポルナレフは、滂沱と涙を流していた…。

（け…けがをしているだけに決まっている…かるいけがさ…

ほら…しゃべり出すぞ…　今にきっと目をあける…
アヴドゥルさん…　そうでしょ?…　起きてくれるんでしょう?
お…起きてくれ!　たのむ…アヴドゥルさん!!

バ…バカな…　か…簡単すぎる…　あっけなさすぎる……

ハッ)

花京院がこの現状に愕然としている一方、エンは何を考えているか判らない表情でただ立っていた。
そしてポルナレフはホル・ホースに向かっていこうとしている。

「ま!人生の終わりってのはたいてーの場合　あっけない幕切れよのォー
さよならの一言もなく死んでいくのが普通なんだろーねえー
ヒヒ…悟ったよーなことをゆーよーだがよォ〜〜〜〜〜」

「ポルナレフッ!
相手の挑発にはのらないでください
まだわからないのですか　アヴドゥルさんは言った…『ひとりで闘うのは危険だ』と
しかし　あなたはそれを無視した……
あなたは相討ちしてでもかたきを討つと考えているなッ」

「おれに…どうしろというのだ……」

「アヴドゥルさんはそれを心配して　あなたを追って来てこうなった
勝てるみこみが見えないうちは戦うな!

こいつらのスタンドの性質がよくわからないから　ここは一時ひくのですッ！」

「アヴドゥルは背中を卑劣にも刺された…　妹は…無抵抗で殺されたこの「無念」を！おさえて逃げろというのか！？」

「自分も死ぬような戦いはやめるんだッ！アヴドゥルさんはそれをいっているのだッ！」

「カモォ～～ン　ポルポルくぅ～～ん」

「ポルナレフ！ゆっくりぼくの所までもどってくるんだ！あのトラックで逃げる」

「野郎～～ォ」

「ポルナレフ！」

「ハア　ハア　ハア　ハア…
お…おさえろというのか
ち…ちくしょう　わ…わかっ……」

「クク…おい…ポル…ナレフ…」

ポルナレフが無理矢理に気を抑えて下がろうとした時、彼の横の窓ガラスから声がし、見るとガラスに写った水溜まりから『吊られた男』が出てくるところだった。

「！　ポルナレフ！」

「アヴドゥルは　おまえのために死んだ
アヴドゥルにかりができたってことかなあ～
おまえが　いなけりゃ死ななかったかもなぁ　ククク」

振り向き現像の水溜まりを見る、ダレモイナイ。
鏡を見る、『吊られた男』がズルリズルリと近づいてくる。

「や　野郎～
本体は　どこにいやがるッ！」
「ヒヒ…」
「ポルナレフおちつけッ！」

ついに手が届くところまで近づいた『吊られた男』が右手に刃を出す
「でも悲しむ必要はないな
喜ぶべきだと思うぞ……　すぐに面会できるじゃあないか…
おまえも死んで　あの世で…　マヌケなふたりといっしょになぁ…
……クク
おまえの妹はカワイかったなぁ　ポルナレフ……
妹にあの世で再会したのなら聞かせてもらうといい……
どーやってオレに殺してもらったかをなぁあああ～～～ッ」
「！」
「ポルナレフ挑発にのるなァーッ！！
さそっているんだーッ！！」

「ウオオオオ　野郎ォッ！」

いい加減キレたポルナレフが窓ガラスを突き割る。
しかし『吊られた男』にダメージは無く、割れたガラスの破片のひとつに写っている。
「！」

「ククク　おまえのチャリオッツに　わが『吊られた男』は切れない…
　おれは鏡の中にいる……
　おまえのスタンドは鏡の中に入れない…だからだッ！
　ククク　くやしいかぁ～　くやしいだろーなあ～
　おい…ホル・ホース撃て…
　このアホをとどめるとしよう！」

「アイ！アイ！サー」

ホル・ホースが撃ち、

「死ねッ！」

『吊られた男』が刺し貫こうとした時、

「エメラルドスプラッシュ！」

「！」「なに！」「！！」

「うぐあッ！」

花京院がエメラルドスプラッシュでポルナレフを吹き飛ばし、『皇帝』の弾丸は制御を失って壁に突っ込んだ。

「なんとッ！ポルナレフを……」

「うちやがったッ！」

そして花京院はトラックを走らせ、ポルナレフを回収していく。

「ポルナレフの命を助けるためかッ！！
花京院とやらやりおるぜッ！」

ホル・ホースが追い撃ちをしようとするが、

「ちィ！　スタンド射程距離外だ
あんなにはなれちゃあ命中しても弾丸の威力もなくなる」

彼にとっては遠くなってしまった為、諦めた。

「J・ガイルのだんな　追ったか……
とことんポルナレフを始末する気だな　彼は！　ヒヒ」

そう言ってワラうホル・ホースの足元に突然ナニカが飛んできた。

見てみるとそれは銃弾であり、それは変化して一枚の紙になる。
それを拾い上げてみると、それには
【でもわたしの場合はこれだけ離れていてもうまいこと威力を残しておけるんですよ。
まぁ、だからどうだということもないんですけどね？
エン】
と、書かれていた。

「どーいうこった…　たしかヤツの射程距離は十数メートルって聞いたぜ？」

それを見たホル・ホースには幾分かの疑問が残った。

ポルナレフと花京院の乗ったトラック、荷台にはエンが後ろ向きにうつ伏せていた。

「また、つまらぬことをしてしまった…とか言ってみたりして、です」

などと呟いていたりするが、それは割りとどうでもいいことであった。

「す　すまねえ花京院

……

お…おれは…

おれは　妹のかたきをとるなら死んでもいいと思っていた

でも…わかったよ　アヴドゥルの気持ちがわかったよ…

奴の気持ちを無駄にはしない

生きるために闘う……！」

「ほんとにわかったのですか」

「ああ」

とポルナレフが答えた時、花京院は彼に肘鉄を喰らわした。

「それは仲なおりの「握手」のかわりだ　ポルナレフ」

「ああ　サ　サンキュー　花京院　ブ」

「今度やつらがおそってきたら！
ぼくたちふたりが倒すッ！」

どうやらまたしてもエンは花京院に無視されているようである。

―――――

―――――

―――――

いや、別にいいんですけどね？無視されてようとも。
実は限定的な「気配遮断」が憑いてるのかって思ったりしますけど。

第１０－Ａ話：ホル・ガイルって略すのは、だめですかね（後書き）

しかも時間がおしてヤりきれなかったんですよ

後編は次回に持ち越しですよ

結局あまりエンに出番は無い訳ですよ

第１０－Ｂ話：今回、出番無しですかね？（前書き）

前回同様って感じです、きっと。

もしかしたら８割くらいかもです、きっと。

第１０－Ｂ話：今回、出番無しですかね？

とりあえず今はトラックの荷台、「鏡」に写りにくいとこに居ます。
ある程度は彼等の話が聞こえるから状況も解ります。

「くっそお――――ッ」
あ、ミラーが捨てられました。
今は花京院がイルーゾォに喧嘩売るようなセリフを吐いてる訳ですね。

『吊られた男』、鏡面の表面に張り付いて鏡像となって虚像に攻撃することで実像に同様のダメージを与えるただし窓は開かない、ですか。
あの基準ってなんなんでしょうね？割るのは実現するのに。

「ヤツは追いついているッ！」
「なにッ！」

あ、今でした。

後部窓ガラスが割れてトラックが横転、する前にわたしはふわりと飛び降りときます。
わざわざ事故に巻き込まれることもないですし。……はじめ的に説得力無いですけど。

着地に衝撃もありませんし、動いてるモノから飛び降りた時の慣性で着地時に転げるなんてこともありません。浮遊スキル嘗めちゃあダメです。

「うげげ
だ…　だいじょうぶか！花京院」

「う　う
ム…胸を打ったがだいじょうぶだ」

はは、ごしゅーしょーなんですよ。

んでポルポル君、移動する『吊られた男』に気付いた模様、バンパーに映ったソレに攻撃される前に切り刻みます。

「ちっ　ちくしょうッ！
花京院ッ！エンッ！映るものから逃げるんだッ！」

の号令で岩の陰に。

「わ…わかった……
い…いま…見えたんだ……

やつは鏡から鏡へ！映るものから映るものへ！飛びうつって移動しているッ
反射を繰り返してここまで追ってきたんだ……！」

「反射？

つまりやつは「光」かッ！
やつの正体は「光」のスタンドということか！？」

「花京院！
やつは今　車のバンパーにいた！
バンパーからなにかに反射して移動するにちがいない！
映るもののそばへは行くなッ
体からも映るようなものははずせぃ！　制服のボタンもとれッ！」

言いながらポルポル君は耳飾りを外します。

わたしは別に光り物とか無い……ですね、うん。
あったとしても『無かった事に』すればよかっただけですけどねぇ。

とか思ってたら子供参上。
「おにいちゃんたち　車の事故はだいじょうぶ？
お薬もってこよーか？」

「おい小僧！向こうへ行けッ」

「は！」

「ねえ　車めちゃめちゃだけど
ねえ　血が出てるけど」

「え！？」

「けがは…　だいじょうぶ？」

「ククク」

「や…野郎ッ！」
「……子供の目の中に……」

はい、『吊られた男』の再来であります。

「おい小僧　おれたちを見るなッ！」

「え」

「見るなと　いってるだろーがあッ！　目でおうなこらァ！」

「えっ
けがしてるよ」
「だいじょうぶだよ！ほら！　ピンピンしてるよ　だからあっち見ろ！」

「えっ
血でてるよ」

「向こう向けッ！ガキャア！」
「えっ」

「大丈夫ですって、ほら！
クスリもホータイも持ってますから！ほらッ！」

「えっ」

ぐ……この餓鬼ッ…

ごほん、わざわざわたしがノって追い払おうとするフリしてるのになんですかこのガ…子供は。

ずんぼなんじゃあなーんか……でなく、少々聴力が低いんじゃあないんですか？この子供は…。

そもそも面構えが腹立ってしまうのでつい言葉遣いも崩れてしまうってなもんですよ　うぐぐ…。

えっ　自分勝手？今更じゃあないですか？

「ククク　どうするね！
まさか…このカワイイ子供の目をその剣でつぶすというのかね？
ポルナレフ
ククククククククク」

「うぐぐ」

ポルポル君の首に跡ができて苦しがってるんでつまりはそういう状態ですね。子供の目を見ない位置に居るんで『吊られた男』の状態がわからないわたしです。
しかし「カワイイ」……？このガ…いや、比喩ですか？

「なんて卑劣な男だ……
アヴドゥルをひきょうにもうしろから刺し
そして今！子供を攻撃できないのを知って利用する……
ゆるさん！」

「ククククク　ひきょう　ケッコウ！」

「おい花京院……
この場合！そういうセリフをいうんじゃあねえ」

「？」

「いいか…こういう場合！　かたきを討つ時というのは
いまからいうようなセリフをはいて　たたかうんだ……

『我が名はＪ・Ｐ・ポルナレフ』
『我が妹の魂の名誉のために！』『我が友アヴドゥルの心のやすらぎのために』……
『この俺が貴様を絶望の淵へブチ込んでやる』Ｊ・ガイル……
こう言って　決めるんだぜ」
子供に…子供の目の中の『吊られた男』にチャリオッツの剣を向けながら啖呵を切るポルポル君。

「ゆるせ小僧！あとでキャラメル買ってやるからな！」

「うああ――ッ　目に砂が――ッ！」

言うことはカッコいくても、ヤることは子供に目潰し（砂）…
ま、気にしちゃあ負けですかね、ナニにかは知りませんけど。
んで、チャリオッツの一閃。
ポルポル君の瞳に『吊られた男』が映ってます。

「原理はよくわからんが　こいつは光なみの速さで動く
普通ならとても剣では見切れねえスピードさ…
だが子供の目がとじたなら　こいつが次に移動するのは　おれの瞳だろうということはわかっていたのさ

だから　こいつがおれの目に飛び込んでくる軌道はわかっていた……
その軌道がよめれば　剣で切るのは　……たやすい！」

言い終わると同時に『吊られた男』の背中？から血が噴き出し、
〈ギィャアア！〉
近くの建造物―遺跡ですかね？―がある場所から悲鳴が響きます。

「あそこにいるな！　本体！　Ｊ・ガイルの野郎　なぶり殺してくれるぜ」

それじゃあまぁ、レッツらゴーってんですかね？

「野郎！ついに！　ついに！
ついに会えたな　Ｊ・ガイル」
「グ…ううっ…うぐぐ
ハア　ハア　ハア　ハァ～～　ハァ～～　ハァ～～　ハァ～～」

「おれの名は…Ｊ・Ｐ　ポルナレフ」

「ハァ～～　ハア　ハア　ハア　ハア　ハア」

この人の正体を知ってる身としてはツッコミたいと思うとこですが、
んな無粋なことはしません。

「きさまの鏡のスタンドの秘密は見切った！
鏡から鏡へ……　映るものから映るものへと移動ができ……
それは「光のスタンド」といってもよくてよ　ものスゲー速さだからとてもおれの剣なんかでとらえることはできない！
しかし……移動中は無防備で　その直線軌道上にいるしかないどこに移動するかわかれば　その瞬間　軌道をたてに裂けばおめーも裂ける
ここにいる花京院とエン　それにアヴドゥルが来てくれなければそれがわからずてめーに殺られていただろーがよ」

今回何もしてないのに数に入れていただいて恐縮ってやつなんですけど、偽物相手にご高説ぶっこいてる事に対して笑いを堪えてるわたしとしてはぷふっ

やっとこ気付いた花京院、
「ポルナレフ！それは両右手の男じゃあないぞ！Ｊ・ガイルじゃあない！」
と叫びます。

直後に飛んできたナイフはとりあえず防いだので、わたしの手首に突き刺さり、わたしは演技でも開始っと。

「っぐ……」

「エン！」

「筋が、やられたみたいです…手が動きませんよ、これ……」
これは本当です、全然痛み苦しみは無いですけど。

「ククク　ここだ…」

「うう…」
「うっ　これは！」
「っ……」

「バァカめー
おれがＪ・ガイルだ

ハァ～～　ハァ～～　ハァ　ァ　ハァ　ハァ　ハァ　ハァ　ハァ
ハァー　ハァー　ククククク
グァ…　ククク　ハァハァ　そいつは…ただのその村にいたこじきだよ！
俺のキズと同じところにちょいとナイフで切れ目をいれておいたのさ　まんまとひっかかったな！！
おれの顔を知らねーのに　不用心に信じこんで近づいたのが大チョンボォ！」
「く…うう
きさまッ！くらえ！ぼくのエメラルド…！」
「へ――っ待ちな！まわりをよくみろ！

おおーい！集まれーっ
このお方たちがみんなに　お金を恵んでくださるとよォー」
「なに」
「なにッ！」

「そしてまたまた！」

「！？」「！」「…」

「これがどーいうことか理解したか」

J・ガイル　の　おおごえでさけぶ！
なんと　こじきAが　あらわれた！
なんと　こじきBが　あらわれた！
～中略～
なんと　こじきIが　あらわれた！

……ギラでも勝てますよ、これ。
いや、やりませんけどね。

「おお」
「ありがてえ！」
「バクシーシ　バクシーシ」
「バクシーシ」
「恵んでくだせーっ」
「ありがてえ！」
「ありがてえ！」
「バクシーシ」
「バクシーシ」
「どうも！おにいさん方！」

「ハ！」

乞食の目の中にやはり『吊られた男』が。

「おれのスタンドを見切っただとォ？
軌道を移動中に攻撃すればいいだとォ！
バカめッ！おれは自分のスタンドの弱点はとっくに知っていたわッ！
映るものを多くし軌道がわからなくなれば！　もはや弱点はない

ッ！」

「みるな！みつめるなッ！
お…おれたちをみつめるな！」

「ククク　もうのがれられんッ！
一度に全員を爆破でもするかい？」

えっ　いいんですか？やっても

「ククククク　ポルナレフ……
青春を犠牲にしておれを追い続けたのに…ああ～～あ
途中で挫折するとは　なんとつまらない……さびしい人生よ
そして　このＪ・ガイル様は　おめえの妹のようにカワイイ女の
子をはべらせて楽しくくらしましたとさ……ククク
泣きわめくのが　うまかったな　おまえの妹はよ……へへへ」
…ちっとはお前、鏡を見ろっつうの。
なんだったら顔面殴り飛ばして整形でもしてやろうか？
ま、やったとしても中身が腐ってんだからアレだろーがな。

……げふん、なんか最近荒れてるよーな…？
今界は誰かを憑れて来た筈は無いですけど…
ま、いいや。

「や……野郎ォ～～～～」

「ククク　死にな…」

「ポルナレフ　そのセリフはちがうぞ

あだを討つ時というのは「野郎」なんてセリフを吐くもんじゃあない　こう言うんだ

『我が名は花京院　典明』
『我が友人アヴドゥルの無念のために　左にいる友人ポルナレフの妹の魂のやすらぎのために』」
コインを取り出す花京院
「『死をもってつぐなわせてやる』
拾った者にこの金貨をやるぞッ！
顔が映るほどピカピカの金貨だ！」

「え！？」

それを上に弾き飛ばします。
「おおおお――ッ！！」

「なあぁ～～るほど花京院」

「ヒ！」

「ポルナレフ！これでみんなの目が一点に集まったようですよ…
やつのスタンド「吊られた男」が移動しなくてはならない軌道はわかった！」

「ありがとよ花京院（メルシー）…
こいつの目にいるな！映ってる目に砂をかけて目をとじさせるッと…！」

砂を蹴り上げ、

「ラギャア！」
目潰し2号。『吊られた男』はコインへと

「瞬間！」

チャリオッツが『吊られた男』を真っ二つに。

「ぎにゃあああぁぁぁぁ！」

「泣きわめくのがうまいのはてめーの方だな　J・ガイル！
これからてめーは泣きわめきながら地獄へ落ちるわけだが
ひとつだけ　地獄の番人にゃまかせられんことがある……それは！
「針　串　刺　し」の　刑　だ　ッ！
この瞬間（とき）を長年待ったぜッ！」

ボゴゴンン　バァ～ッ　と、顔中身体中穴ボコになり、近くの門に逆さに引っかかりました。

「あとは　閻魔様にまかせたぜ」

「これが本当の『吊られた男』か…真底クズ野郎だったな」

「さ、戻りましょっか。ＪＯＪＯ達と合流しましょ？」

とりあえず幾らか造った金貨をばら蒔いときます、乞食の向こうへ飛んでけー。

第１０－Ｂ話：今回、出番無しですかね？（後書き）

ほんとにほんとにどーしてこうなった、ですよ。

小僧のくだりが

第１０．５話：エンヤ（前書き）

その頃のエンヤ婆

原文で

第１０．５話：エンヤ

「今！　わしの息子が死んだ
ヒウヒウ　ヒウ　……ウウウ～～～」

「ンナアア～ゴ」

ＤＩＯの屋敷　エンヤ婆。
近くに猫が居るが気にすることでも無い。

（今…わしの息子　Ｊ・ガイルに起こった不幸が　親子のきずなの直感でわかる……！
承太郎やジョセフのジョースター家の血統が感じ合うのと同じように……！）

突如、Ｊ・ガイルが「針串刺し」を喰らったのと同じ場所で、エンヤ婆に穴が空いていく。
近くの猫が驚いているが気にすることでもない。

「ウォルェェエエエエエエエ～～～ッ
エォォォォヒィィィィ
かわいい息子よォ～　体中にこんな傷を負って死んでいったのだねえ～～～～～～っ

おまえと同じ苦しみは！

おまえと同じ　この聖痕の痛みで感じるよぉぉぉぉぉ！！

さぞつらかったろうねえ――――――！！」

叫びだすエンヤ婆。
近くの猫が威嚇しだすが気にすることでもない。

「ヒィィィィッ――――――ッ
ＤＩＯ様のために闘ったおまえはりっぱじゃったぞ　Ｊ・ガイル
～～～～！！
しかし　心の清い誠実なおまえが死ぬなんて　きっとやつらに卑怯なことをされたんだろうねえ」

体を丸め、尚も嘆き叫ぶエンヤ婆。
しかしどこをどう見ればＪ・ガイルが清いのだろうかと。

さらに丸めた背中からも血が幾らか噴き出す。
近くの猫が更に威嚇するが気にすることでもない。

「ちくしょう――――――！！
きゃつらめッ！
恐るべき代価を必ずや支払わせてやるッ！「女帝」のカードよッ！
間髪入れず行動にうつるんじゃッ！

じわじわ殺す　「女帝」おとくいのスタンドでのおおおおおお――――ッ」

いきなり起き飛び走り出すエンヤ婆。
近くの猫が「のけっ」と頭を杖で殴られるが気にすることでもない。

「ルウエエエエエエエ～～～！！

アウッ　アウッ　アウッ
悲しいよぉおおおおお～！！
ブチ殺すッ！　ヒヒヒヒヒ　ケケケ――ッ」
そのまま奥へと走り去り、大きな鉄扉は閉まった。

第１０．５話：エンヤ（後書き）

猫さんにとっちゃあいい迷惑ですよねえ

第１１話：人面疽は間黒男さんへ！ですかね（前書き）

タイトルに関係するモノを知ってる人挙手ー

……なんて

第１１話：人面疽は間黒男さんへ！ですかね

「待ちな」
「「！」」「…」

「追ってきたぜ」

ジョースターズのとこに戻ろうとしたら、ホル・ホースさんが追いついたようで　後ろから声をかけてこられました。

そして無駄に無意味なパフォーマンスな『皇帝』によるジャグリング的な遊びを入れつつ銃口を向けてきます。

「なに　トロトロのんきに歩いてんだ？おまえら！
いいか！　おまえらはおれの敵ではないことはさっき証明された！
逃げるんなら必死に逃げんかい！　必死によ！
なあ　Ｊ・ガイルのだんな」

言い終えると同時、発砲して近くの硝子製の水入れを割りました。

「だが　追いついちまったものはしょうがねえな　今度は観念しな……
てめーらの人生の最後だ！　最後らしくオレたちにかかってこいよ！　すわった根性みせてみろよ！　コラ！
なあ！　Ｊ・ガイルのだんな！」

と言い、今度は近くの窓ガラスを。

…ところで、この方はガンマンスタイルなのはいいですけど、『皇帝』が一般人に見えないんですから、せめて使わなくても一挺は実物持ってた方がいいんじゃあないかと思うんですよねえ。
格好だけ＋見えない銃構えて遊んでるイタい人にしか見えないでしょ。
実銃＋憑依型なら、そーいうアレも無いでしょうけどね。

「聞いているのかい……！？　Ｊ・ガイルのだんなよォ！」

「いいや！　野郎ならもう聞いてねーと思うぜ…　ヤツは　とってもいそがしい！
地獄で刑罰を受けてるからなあ！」

「おいおいおいおいおいおいおいおい
デマいうんじゃねえぜ……　このオレにハッタリは通じねーよてめーに　やつの恐ろしい「鏡のスタンド」が倒せるわけねーだろーがッ！　このオレだってヤツの無敵の「吊られた男」にはいち目おいてんだぜ
ポルナレフ　じょーだんきついぜ　ヒヒ」

「２～３００ｍ向こうに
あのクズ野郎（Ｊ・ガイル）の死体がある……　見てくるか？」
「……
よし　見てこよう！」
「アッ！
野郎！逃げる気かッ！」

（こ…こいつはかなわんぜッ！　おれひとりじゃ完璧不利！　ここは逃げて次の機会を待つぜ

おれは誰かとコンビを組んではじめて実力を発揮するタイプだからな……

「一番よりＮｏ．２！」これがホル・ホースの人生哲学　モンクあっか！）

などと言いつつエスケープシフトなホル・ホースさん。

「なにッ！」

しかし　正面から拳がとんできて、

「グピィーッ」

殴り飛ばされます。

「ああ！　ジョースターさん！　承太郎！」

「ひィィィィィィ」

ジョースター家も合流したことで、一見大ピンチなホル・ホースさん。

「アヴドゥルのことはすでに知っている
彼の遺体は　簡素ではあるが　埋葬して来たよ」

「ひきょうにもアヴドゥルさんをうしろから刺したのは両右手の男だが
直接の死因は　このホル・ホースの「弾丸」だ
もっともアヴドゥルさんの「火炎」なら簡単にかわせただろうがね…

この男をどうする？」

「おれが判決をいうぜ
「死刑」！」

ポルポル君がチャリオッツを出してホル・ホースさんに攻撃しようとした時、

「なっ！」

「！」

「お逃げください！　ホル・ホース様」

「な！なんだあーッ！　この女はッ！」

「ホル・ホース様！　わたくしには　事情はよくわかりませぬがあなたの身をいつも案じております！
それがわたくしの生きがい！　お逃げください！　早く！」

女性がポルポル君の脚に飛び付いて動きを止めました。

「こ…このアマあ！　はなせ！　なに考えてんだあ！
承太郎！　花京院なにやってんだよッ！
ホル・ホースを逃がすなよ！」
「もう遅い」

「あっ！」

「よく言ってくれたベイビー！

おめーの気持ち！　ありがたくうけ取って生きのびるぜ！
逃げるのはおめーを愛しているからだぜ　ベイビー　永遠（フォーエバー）にな！」

そしてその隙にホル・ホースさんエスケープ。
乗馬姿がサマになってますねえ。
「野郎！　待ちやがれッ！」

「ああ……　うう」

しがみつかれたままでなおホル・ホースさんを追おうとするポルポル君、ひこずられて血が出る女性。

「「ああ」じゃねぇッ！　こ…このアマあッ！」

「ポルナレフ、その女性も利用されているひとりにすぎません。
それにあの人はもう闘う意志はありませんでした。
攻撃してこないのにわたし達に追うことは、今はできません。
あの人にかまっているヒマはない、そうでしょう?ジョセフさん」

言いながら片袖を裂き、女性に近づきます。

「ああ　そうだな
アヴドゥルはもういない…　しかし　先をいそがねばならんのだ
……
もうすでに　日本を出て１５日がすぎている」

とか言ってるジョセフさんを横目に、女性が怪我をした辺りに裂いた布切れを巻き、縛ります。
その時に、傷口から飛んだ血がわたしの腕に付きますが、そこは無視。

「っと、わざわざ袖を裂かなくてもコレがあるんでした」

後から気が付いた風に消毒液と包帯を出して、布切れを取り、処置をします。

人面疽（にくのかたまり）にやってなんなのかって話ですけど…気分、とでもしておきます。

「さあ！　エジプトへの旅を再開しようぜ
いいか！　ＤＩＯを倒すにはよ　みんなの心をひとつにするんだぜ
ひとりでもかってなことをするとよ　やつは　そこにつけこんでくるからよ
いいなッ！」

（おまえが言うな）とでもいうようなわたしたちの微妙な表情は気にせず―まさか気がつかないと言うことはないでしょうが―
「先をいそごうぜッ！」

先頭立ってくポルポル君でした。

「チュミミン」

「ん、ポルナレフ、何か言いました？」

「ン　別に　なにも言ってないぜ…ハエの羽音じゃねーか！　ハエが多いぜ　この辺はよ」

「たしかに」

ワーンワーンいってるハエが一匹、わたしの腕にとまると、そこにあったデキモノに一部を食われ、落ちていきました。

「多いのはハエだけじゃないみたいですよ。
いつの間にか虫に腕をくわれたようです」

「かかないほうがいいですよ」

「チュミミ～～ン」
女性の舌にある、同じようなデキモノから聞こえた音…鳴き声？
に気付いた人は居ませんでした。

次の日の早朝、ポルポル君以外のメンバーで集まっています。
アヴドゥルの怪我は、命に別状が無いということを聞かされました。
―知ってましたけどねー。

そして花京院が、

「ポルナレフは口が軽いから敵に知られるとまずい
彼にはずっと内緒にしていよう」

という旨の提案をしました。

それにわたし達は賛成、その方向でいくことに。

カルカッタから聖地ベナレス（ヴァラナスィ）へ向かうバスの中―

「いいか　おれはね　普通は説教なんてしない
頭悪いヤツってのは言ってもわからねーから頭の悪いヤツなんだからよ
いるよなあ　何ベンいってもわからねータコ
でもな……　え　えーと　名前きいてなかったな」

「ネーナ」

「ネーナ　君はこれから通る聖地ベナレスの良家の娘なんだろ……
……？
美人だし
すごく頭のいい子とみた……　おれは人を見る目があるしよ
だから説教するぜ
ホル・ホースはとっても悪いウソつき野郎なんだよ
君はだまされてる
親が悲しむよ」

しかしネーナは無反応

「あのね　こ――――なっちゃあ――――いけねーぜ！
恋をするとなりやすいけどよ」

顔の両側に手を添え、視界が狭まっているジェスチャーをしながら説教を続けるポルポル君。
「こお～～～～～いうふーに物事見ちゃいけないぜ！
冷静に広く見ることが大切だな」

「おい…こいつはおどろいたな……」

花京院のぼやきに外を見てみると

首を地中に埋めている者

大きな剣山ともいうべきモノに首、肩を乗せ、逆向(さか)きに直立している者

首の後ろで足を組み、腰の向こうで指を組んだ者

首から下を地中に埋め、頭部のツボに鍼をさしている者

火の上にフライパンのような鉄板を乗せ、その上で瞑想している者

等が居ます。

「修行者(カトゥー)の荒行のようですね
話にはきいていたがほんとにやっているんだな」

「客寄せのトリックじゃねーの？」

「あそこで　なにか燃えてるようだが……？」

承太郎君の言に少し遠くを見てみると、キャンプファイアみたいなことをやってます。
そしてそこをよく見ると、

「人だ…
……火葬にしてるんだ」

人が焼かれてました。

「ちょっと見てくださいよみなさん。
虫に刺されたと思ったところがなんか変な感じになってますよ」

ベナレスに着いた辺りで、そろそろヤろうかと切り出してみます。

「腫れているな
それ以上悪化しないうちに医者にみせたほうがいい」

「これ　なんか人の顔に見えないか？へへへ……」

「はは、ポルナレフ、そーいうのって日本だと『人面疽』っていうんですよ。
妖怪・奇病の一種で、体の一部などに付いた傷が化膿し、人の顔のようなものができ、話をしたり、物を食べたりするとされます。
これも、その『人面疽』の一種なんじゃあないですかねぇ？

もうちょっとしたら、ちゃんとした顔になって話しかけてくれるんじゃあないか、って期待をしたくなりますね」

実際、そうなりますしね。

「げッ　それって大丈夫なのか？」

「まぁ、このままだと少々良くないことになるかと思いますけど…」

と言いつつ人面疽に手をかけ、

「この『人面疽』が

わたしに引き剥がせないなんて

”嘘”に決まってます」

掴み剥がしました。

するとネーナが嘔吐しだし、

「なんだ！　な　な　なんだッ！　ど…どうしたネーナ！」

腹からかなーり醜い小女が血を噴き散らしながら出て来ました。

「なッ　なんだ――ッ　こいつは！」

「おやおや、この『人面疽』はスタンドで、そこの人が本体だったみたいですね。」

「オ　オッ　オエ～ッ」

「こんな人に、人面疽がくっついて肉人形になり、美人にカムフラージュしていたってとこですか。
よかったですね、ポルナレフ。
このまま口説き続けてたらどうなってたことやら」

はっはっは　と笑いながら、ついでに剥がした所の腕の損傷を『無かった事に』しておきました。
ついでに袖もね。

第１１話：人面疽は間黒男さんへ！ですかね（後書き）

……ん？

特にあとがさとして言うこと思い浮かんでない　や

第１２話：とある少女の改造計画…ですかね？（前書き）

二重意味…になるんですかね？　タイトル

第１２話：とある少女の改造計画…ですかね？

「インドも北部へくるとヒマラヤも近いせいかさすがに肌寒いな」
「パキスタンへの国境も近いな」

ベナレスからデリーを抜けて北西…というかほぼ北上しているところです、車で。
そしたら『運命』の車とエンカウント。

「それに　道はばの狭い山道も多くなるぜ
前の車　チンタラ走ってんじゃねーぜ　じゃまだ　コホッ　コホッ
ヨッ　追い抜くぜ！」

「おいポルナレフッ！　運転が荒っぽいぞッ！」

道が狭いってのに脇を無理矢理、小石を飛ばしつつ抜けます。

「へへへへ！　さすが四輪駆動よのォーっ　荒地でもへっちゃらさっ！」
「ポルナレフ　今の車へ小石はね飛ばしてブツけたんじゃあないのか！？
事故やトラブルは困るぞ」

「しかし……　インドともうお別れですね」

「……」

「うむ　インドに着いた時は
「なんじゃーっ　このガラクタぶちまけたよーな国は！」と思ったんじゃが　国境が近づいてくると　あのカルカッタの雑踏やガンガーの水の流れが早くもなつかしいのォ」

「おれはもう一度インドへ戻ってくるゼ
……
アヴドゥルの墓をきちっと作りにな」

まぁ、嘘ですけど。
生きてる上にアレを確保してもらう予定ですし。
進捗率はどーなんでしょ？

「ゲッ！
うおおおおっ――っ！」

「どうした！　ポルナレフッ
なっ　なんだ？　いきなり急ブレーキを！？」
「ううっ……いったばかりじゃろッ！　事故は困るってッ！
よそ見してたのかッ！？」

「ち…ちがうぜ……
み…見ろよ　あそこに立ってやがるッ！
し…信じらんねえッ！」

「……
……
やれやれだぜ」

わたしたちの乗った車の前でヒッチハイクしてたのは

「よっ！
また会っちゃったねッ（はぁと）
乗っけてってくれる――――ッ！」

シンガポールに置いてきた筈の家出少女でした。
……なぜ先回りできているのでしょーか。

「あっ！　たしかシンガポールで別れたはずのッ！
君はシンガポールでおとうさんに合うはずじゃあなかったのか？」
「ウソにきまってんじゃねーのそんなもん…！　ただの家出少女よあたしは！」

「おい！　待て　誰が乗せるといった!?
なぜインドにいる…？
どうやって入国してここまで来た？」

「まあー　いいじゃあないの！　気にしないで
いっしょに旅行させてよ　楽しいんだもん！」

「だめだ　ほおり出せ
足手まといだし　この娘にとっても危険だ」

「ねえ！　ポルノみる？　インドのポルノ！
みやげ物屋からカッパらったエロ写真よ　好きでしょ？」
「こっ　コラッ！　子供がそんなもん持ってんじゃあねえぜッ！」

「おねがいよぉ　つれてってーッ　いっしょにつれてってェエェ――ッ　つれてって！」
「だめじゃ！　だめじゃ！　だめじゃ！　だめじゃ！」

「しかし　よくひとりで…　すごい生活力のある子だな」

「ただのカッパライだよ
こいつひょっとしたらスタンド使いじゃあねーか？　カッパライのスタンドかよォー
のせるなよ
エロ写真は没収しとけよ」

／
ダメッ　ダメッ
おねがいよォ　つれてってェエ　つれてってェエエエ　つれてって！　つれてって！　つれてって！
ダメ　ダメッ　ダメ　ダメ　ダメ　ダメ　ダメじゃ！
＼

「やかましいッ！　うっおとしいぜッ！！　おまえらッ！」

勝手に乗ってきた家出少女とジョセフさんが言い合ってうるさいから承太郎が一喝、静かになりました。

（カッコイイ……（はぁと）
しびれる～ウ）

「国境までだ
そこで飛行機代渡してその子の国までのせてやればいいだろうホンコンだったな」

「でしたね。ところで、写真は没収させていただきますよ」

と、少女が持ってた写真を全部取り上げます。

「そうだ、ちょいと面白いものを見せてあげましょう」

言って、写真全てを一纏めにして適度な……とりあえず金属塊に変えてやりました。

「わっ！　スゴイッ！　どうやったの!?」

「ふふんー、これはわたしが持つ不思議能力でしてね。
実はここにいる全員が、いろいろと違いますけど、不思議能力を持ってるんですよ。そして」

驚いてる少女に適度な解説しつつ、ポケットからフラーちゃんの断片（第1．5話、もしくは第2話あとがき参照）を取り出します。
これにわたしを少し混ぜて、控えめな装飾の妙金属製な腕輪を造り、少女に装備させます。
ちなみにこの腕輪、「錬金術」という意味の言葉を刻んであります。

「この腕輪をプレゼントしましょう。それがあればわたしの真似ができると思いますよ?」

「ホント!?」

「ええ。とりあえず、この金属塊を渡しますから、そうですね……これが石ころになるイメージをしてみてください」

言いつつ金属塊を手渡すと、少女はそれを両手で持ち、目を瞑ってブツブツ言ってます。
十秒程して目を開けると、手の中にあった光沢を持つ金属塊だった

ものは、そこらにある石ころになっていました。

「できたようですね。
　ふむ…しかしタイムラグがありますか…。まぁそこんとこは仕方ないでしょうね、そこは慣れれば大丈夫でしょう。
　ちなみに慣れると金とか、武器とか、食べ物…果物辺りでしょーけど、そんなモノも造れるようになると思いますよ？　もちろん、不用意に人前で使うことと乱用は厳禁ですけどねー」

わたしの言葉に目を輝かせていた少女ですが、わたしの最後の言葉に疑問を感じたようで、何故かと聞いてきました。

「えーっ　なんで人前で使っちゃダメなの？」

「当たり前でしょう？　人は訳の分からないモノを恐れます。
　しかもそれは錬金術のようなモノ。下手したら一昔前の魔女裁判みたいなことに……なんてことも」

少し言い過ぎかもですが。

スタンドもどきですから『惹かれ合う』なんてこともないでしょうし、そもそもスタンドが見えるかどうかさえわかりません。
そっち方面なら多分なんとでもなるでしょう。

「まぁ、最終手段的に自分自身に使って整形とか変装とかできるようになると思いますから？　別に気張ることも多分恐らくもしくはきっと無いと思うかもしれませんよ？」

そんな感じに話を強制終了っと。

「だってあたし女の子よ
もう少したてばブラジャーだってするしさ　男の子のために爪だってみがくわ！
そんな年ごろになって世界を放浪するなんてみっともないでしょ
今しかないのよ　今しか！
家出して世界中を見て回るのは…！」

「そうですねぇ、ただの世界旅行であるなら”そんな年ごろ”になっても可能かもですけど、『放浪』というならそうもいかないでしょうね」

「でしょう？」

適度に合わせながら会話していると、さっきの車が後ろにくっついてクラクション鳴らしてきました。
５０→６０→７０ｋｍ／ｈ

「さっき追い越した車だ　いそいでるよーだな」
「ボロ車め！　トロトロ走りやがったくせに　ピッタリ追いすがりやがって　何考えてんだ？」

「ポルナレフ　片側によって　先　行かせてやりなさい」
「ああ……」

窓を開けて合図をすると、ライトを二度光らせて追い抜きました。

が、すぐにまた速度を落としてきます。
６０→５０→４０ｋｍ／ｈ

「！　おいおい　どういうつもりだ？　またトロトロ走り始めたぞ
ゆずってやったんだからどんどん先　行けよッ！」

「ポルナレフ　君がさっき荒っぽいことやったから起こったんじゃあないですか？」

「運転していたヤツの顔は見たか？」

「いや…窓がホコリまみれのせいか見えなかったぜ」

「おまえもか……
まさか追手のスタンド使いじゃあないだろうな」

「気をつけろポルナレフ」

スタンド使いで正解ですけどねー。
どこから張ってたのかは知りませんが。

「……
運転席の窓があいたぞ」

空いた窓から手が出て、合図をしてきました。

「プッ！　先に行けだとよ

どーやらてめーの車の性能がボロくてスピードが長続きしねーのを思い出したらしいな
初めっからおとなしくこのランドクルーザーのうしろ走っていろや　イカレポンチがッ！」
「ポルナレフ　おまえが悪いんじゃぞ　挑発するからじゃ」
ポルポル君がまた追い抜こうとしますが、そうはさせません。
「ポルナレフ、抜くのはもう少し待ちなさい！」
「えっ」
そう言ってすぐに、向こうからトラックが来て、横を走り抜けて行きました。
「うあッ！　トラック！」
少し右に寄りかけていたので、思わず急ブレーキかけて止まったポルポル君。
「あっ　あぶねえッ！」
いや、ていうか、前ちゃんと見てたら多分わかったと思うんですよねぇ。
「フ～ッ
エンが言ってくれなかったらおれたち……事故ってグシャグシャだったぜ」

「もし言わずに衝突しそうになっても、『星の白金』のパワーがあればギリギリなんとかなったかもですけどね。
それ以外のわたしたちのスタンドだとトラックとの正面衝突はとめられなかったでしょう」

「どこじゃ！？　あの車はどこにいるッ！」

「どうやらあのまま走り去ったらしいな…
どう思う？　今の車の野郎　『追手のスタンド使い』だと思うか？
それともただの精神のねじまがった悪質な　なんくせ野郎だと思うか？」
「追手に決まってるだろーがよォ――――ッ
おれたちは殺される所だったんだぜッ！」

「だが　しかし…今のところ…「スタンド」らしい攻撃はぜんぜんありませんでしたよ」

「……」

「まぁ、事故らなかっただけいいでしょう。どうします？」

「とにかく　用心深く国境へ向かうしかないじゃろう…
もう一度　あの車が何か仕掛けて来たら　そいつが追手だろうと異常者だろうとブチのめそう」

ちなみに、エンゲージした時点で爆殺することもわたしには可能でしたけど、『キラージャック』的な意味で。でもそれじゃあいくらなんでも早すぎるでしょう？

それからまたしばらく走って

「街道の茶屋か…　少し休んでいくか
ゆっくりいけばあの車にも会わんで済むかもしれん」

短い短い休憩タイムなのですよ。

「それなんだい？」

「砂糖きびジュースね　グリグリやって　レモン汁しぼって入れて飲むのね
ためしに飲んでみる？」

「うむ　そうだな」

ジョセフさんが受け取ったコップに、例の車が映っていたようです。

「なにッ！」

「やっ　やつだッ！　あの車がいるぞッ！」

駆け寄って中を見るも、ダレモいません。

「おやじッ！　ひとつきくッ！
あそこに止まっている古ぼけた車のドライバーはどいつだ！？」

「さ……さあ
いつから止まっているのか気がつきませんでしたが」

「どうします？　ジョースターさん　とぼけて名のり出てきそうもないですね」
「フザケやがってッ！」

「しょうがない　どいつが　あの車のドライバーか　そして　そいつが追手かどうかはっきりとせんことには安心して国境を越えられんこの場合　やることはひとつしかないな？　承太郎…？」

「ああ　ひとつしかない……
無関係の者はとばっちりだが
全　員　ブ　チ　の　め　す　ッ！」

「えっ？　お…おいッ！　無茶なっ
承太郎！　やめろ！
ジョースターさん　あなたまでッ！　やりすぎです！！」

わたしの「スタンド使いを感知云々」って設定は無かった事になったんですかね？　それだといいんですけど。
「追手かどうか」で、スタンド使いかどうかもはっきりしてないからどうどうってことなんでしょうかね。

「てめーのよーなつらが一番　怪しいなあ～」
「えっ　なに！？　そ　そんなッ」

今にも殴られそうだと言うときに、

「えっ！」

例の車は発進、走り去って行きました。

「お…おれたち　ひょっとして　おちょくられたのか！？」
「誰かやつの顔を見たか！？」

「い…いや　またもや腕だけしか見えなかった
…やつはいったいどういうつもりだ！？
奇襲してくるでもなく…戦いをいどんでくるわけでもない…
頭のおかしいドライバーのようでもあり　追手のようでもある…
……」

「追っかけてとっつかまえてはっきりさせんことにはイラついてしょうがねーぜッ！」

わたしたちもすぐに車に乗り込み、追っかけます。

「くそォ…あのボロ車　山道でデコボコなのに　やけにスピードがでるじゃねーか」

Y字路を右に曲がって行った車を追いかけるわたしたちの車。
『危険　行き止まり』と書かれた標識があったけれど、外れて落ちていたので、誰の目にも入らず。

「おかしいな　地図によると　この辺のパキスタンへの道はトンネルがあって　鉄道と平行して走るはずなんだが……」

「どうでもいいぜ　すぐつかまえるからよッ！」

まぁ、ただ登山してるだけの道な訳ですし。
そんなこと言ってると、前の車がカーブを曲がり一旦見えなくなります。

「野郎ッ！
あそこの…次のカーブでぜったいとらえてやるぜッ！」

そして追いかけて曲がると、

「あっ！！
ば…ばかなッ！　行き止まりだッ！」

崖っぷち。ギリギリでなんとか止まります。

「やつがいないッ
や…やつはどこだ!?
カーブをまがったとたん消えやがった？　車じゃ吊り橋は渡れないし……」

「まさか墜落していったんじゃあねーだろーなー」

と、みんな前に注意を向けているところに背後からあの車が追突してきました。

「なにィィ〜〜ィーッ！」

「や…やつだッ！
やつがうしろからブツかって来たッ！」

「し…信じられん
一本道だぞ　どいやって我々のうしろに回り込んだんだッ！
もっ…ものすげー馬力でおして来やがる！！」

えー、皆さん、前や後ろだけでなく、右手の壁をご覧くださ～い、タイヤ痕が見えますよ～。
「つ…突き落とされるぞッ！
おっ…押し返せねえッ！
せ…戦車かッ！　その車のパワーはッ！」

だんだんと、だんだんと崖っぷちから外れていく我らがランクルさん。

「バカなッ！　四輪駆動の車輪があっけなく空回りするだけだッ！
承太郎ッ！　『スタープラチナ』でそのクソッたれをブッこわしてくれッ！」

「無理だ……　殴れば反動がある
おれたちのクルーザーもフッ飛ぶぜ…」

「うおおっ
そ…それじゃあもうだめだ！！
みんなッ！　車をすめめ脱出しろッ」
「あッ！」
「ポルナレフッ！　ドライバーがみんなより先に運転席をはなれるか普通は……！？
誰がこのランクルをふんばるんだ？」
「えっ
……ごっ……ごっご

ごめ――ん　ワアーッ」

ポルポル君のせいでついに崖落ちですよ。

「うわあああぁあああぁっ！！」

「『法皇の緑』！」

んで、花京院が法皇を出して上の車まで飛ばしていきます。

「花京院ッ！　やめろッ
おまえの「法皇」は遠くまで行けるが　ランクルの重量をささえきるパワーはないッ！
体がちぎれ飛ぶぞ！」

「ジョースターさん　お言葉ですが　ぼくは自分を知っている…バカではありません」

ポルポル君と違って、ね。

法皇がワイヤーのフックを上の車に引っ掛けました。

「おおッ！　この車のワイヤーウインチをつかんで飛んでいたのか！」

「フン！　やるな…花京院
ところでおまえ　相撲好きか？
とくに土俵際のかけひきを！　……」

そしてスタプラがそのワイヤーを思い切り引っ張って、

「手に汗にぎるよなあッ！」

飛び上がり、

「オラアッ！」

相手の車を殴り飛ばしました。

「ガオーッ！」

向こうは崖に飛んで、

「着地！」

こちらは反動で元の崖上に戻りました。

「ええ…相撲　大好きですぬ
だけど　承太郎　相撲じゃあ拳で殴るのは反則ですね」

「しかし「スタンド」らしき攻撃はぜんぜんなかったところをみると　やはり頭のおかしい変質者だったらしいな」

「ああ…　どっちにしろこの高さ…　もう助かりっこねーぜま…自業自得というヤツだが」

「……でも　どうしてかしら？
この一本道をあたしたちの先に走ってたのに　なぜか　いつの間にか後に回っていたわ
不思議なのォ……」

いやいや、後ろ上方の壁を見ましょうよ！　タイヤ痕ありますから！

ちっともふしぎじ「少しも…不思議じゃあ……ないな……」

「え？」

「なんでおれを見るんだよ
おれがしゃべったんじゃあねえぜ！　信用ねーなあ～～っ
ラジオだ！　ランクルのラジオから声が出たように聞こえたぜッ
！」

「ヒューッ　ヒューッ　ガーッ　ガーッ
「車輪（ホウィール・オブ）」…
『運命の車輪（ホウィール・オブ・フォーチュン）』
「スタンド」！！
だからできたのだッ！　ジョースター」

「なにィ――――ッ！！
わしの名を言ったぞ
わしの名を知っているということは！
『スタンド使いの追手』！」
「どこから電波を流しているんだ
まさか　今　落ちていった車じゃあないだろうな」
「バカな　メチャクチャのはずだぜ」

「いや　車自体が「スタンド」の可能性があるぜ
ベトナム沖で　オランウータンがあやつる船それ自体のスタンド
「力」と出会ったが

その同類ということは大いにありうる」

「『運命の車輪』
これが……我が……スタンドの…暗示」

「「運命の車輪」！！」

とかやってると地鳴りが聞こえて来ました。ゴゴゴゴゴ

「なんだ…一体　この地鳴りは？」
「なんかやばいぞ…」

「みんな車に乗れ！」

「いや！　乗るなッ！　車から離れろッ！」

「まさかッ！」
「地面だッ！」

ランクルの下から、ランクルをぶっ飛ばしながら、『運命の車輪』が復帰しました。

「うおおおああっ
バカな　地面を掘ってきたァーッ！」

見た目は結構ボゴボゴですけどねー。

「じょっ　承太郎の言うとおり　これで完全に車自体がスタンドということが十分わかったぜッ！」

「本体のスタンド使いは中にいるようだッ！」

「ここからは…我々をひとりひとり順番に殺すつもりだぞ…
こいつが我々を今までトラックにぶつけようとしたり　ガケから突き落としたのは　全員一挙に殺すためとみたほうがいいッ！」

と、ここで『運命の車輪』に変化が。

「メッ…メチャクチャの車体がッ！　しだいに！」

「なんだァ～～～っ　こいつは一体ッーっ」

「なおっていくぞ！　まるで生物だ！」

直るというより、これは

「変形したッ！　攻撃してくるぞッ！！」

とまあ、そういうことですよね。

「ＪＯＪＯ、力比べとかはいいですから、まずはわたしに様子見をさせてもらいますよ」

承太郎君が前に出る邪魔をするように、わたしがまえに出ます。

『運命の車輪』からシュキィィンと、ナニかが…まぁ、何かは知ってますけど…飛んで、わたしの身体に幾つか着弾しました。

「ふむ…、普通の人間相手ならそこそこの威力ですかね」

「ば…ばかなッ！　今　なにを飛ばしてんだこ…攻撃が見えないッ！」

「エンッ！」

承太郎君は分析しようとしてるんですかね。

「み…見えなかった…
いったい　なんだ今の攻撃は……！？
何をどうやって撃ちこんできやがったのだ！？」

「ヒャホハハハッー　今の攻撃が見えないだと？！」

『運命の車輪』が此方に突っ込んできます。

「おれの攻撃の謎はすぐみえるさ！　今にわかるよッ！
きさまらがくたばる寸前にだけどなァァ！」シュキィィ―Ｚ―ン

「エンッ！」

若人達がわたしを庇おうと？　突っ込んで来ますが、

「近寄るなッ！」

とりあえず地面からちょっとした壁を造り、こっちに来させないようにします。

そして、わたしと壁にまた着弾。わたしの身体は幾つかえぐられ、

壁は簡単な造りにしていたので破壊されました。

「大丈夫か　エン！？」

「わたしの心配はしなくていいですよ。
それより、相手はなかなかコントロールのあるワザを持ってますね」

ちょっと向こうに行き過ぎた『運命の車輪』が方向転換して、

「きさまらのッ！
脚を狙って走れなくしてひき殺してくれるぞッ！」

追っかけてきました。

「岩と岩のスキ間に逃げ込めッ！」

逃げ込みますが、

「なにィ！」

車体を変形させ、無理矢理に入ってきます。

「コソコソ逃げまわるんじゃねーよ！　ゴキブリかてめーらはよー！」

「オォ～ノォ～　無理矢理入ってくるぞッ！」

「こいつは手がつけられん」

「たとえるなら！　知恵の輪ができなくてカンシャクをおこしたバカな怪力男という感じだぜ」

シュキィィーン

「また飛ばしてくるぞッ　見えんッ！」

「奥へ逃げろッ！！」

今度は承太郎君も少し被弾しましたか。

で、みんな岩をのぼって逃げますが、家出少女は転けたせいで皆を見失ったようです。

「あうっ
あっ！
だっ！誰もあたしを連れてってくれないッ！
ひィイイイーッ

どーせ　あたしは家出少女よッ！　ミソッカ「御託はいーですからさっさと逃げなさいな」スよ…あっ！」

どんな時でも元気な家出少女を回収、抱えて翔びます。

「フヒャホハッ！　フン！　のぼるがいいさァ
おまえらには文字どおり　もう「道」はない
逃げ「道」も　助かる「道」も　エジプトへの「道」も　輝ける未来への「道」もない
なぜなら！
この「運命の車輪」でひき肉にして　この岩場にブチまけるから

だァ！」

タイヤにスパイクを生やして、岩場に突き刺しながらのぼってくる
『運命の車輪』、まさになんでもあり。

「オ～ノォ～」

「タイヤにスパイクが出て」
「岩カベをのぼってくるぞ～～～！！」
「なんでもありか～っ　この車ァ！」

「やれやれだ　やり合うしかなさそうだな　みんなさがってろ
やつはここに登り上がる時…車のハラをみせる
そこでひとつ　やつとパワー比べをしてやるぜ」

「なるほど…
ヤツがなにを飛ばしているか正体不明だが　ハラをみせたときな
らこっちから攻撃できるかもしれん」

一応わたし知ってますけ「来たッ！」…

「おおおおおぉ！」
「フヒャホハッ！　元気がいいねえ承太郎くん
ン～～～　実に元気だ！
だがシブくないねえ～
冷静じゃあないんじゃないのか…？　まだ自分たちの体がなにか
臭っているのに気づかないのかッ！！」

「そうですよほんとに。
少なくともわたしとＪＯＪＯの体からはガソリンの臭いがします」

『運命の車輪』が、一行にも視認できる程度にまた弾を発射しました。

「ああッ！」
「飛ばしていたのはッ」
「ガソリンだッ！　ガソリンを超高圧で少量ずつ　弾丸のように発射し攻撃していたのだッ！」
「ま…まさか…ヤツの攻撃は我々にダメージやキズを負わせるためでなく
　ガソリンを体中にしみ込ませるためかーッ！」

「気づいたか　しかし　もうおそいッ！
　電気系統でスパーク！（火花）」

火花が飛んで、

「ううっ
　なにィ！」

承太郎君に着火、『運命の車輪』はわたしたちのいる岩場に着地。

「ああッ！　承太郎が炎につつまれたーッ！！」
「きゃあああああ　承太郎――ッ！！」

「あうおああ」

承太郎君、炎上★
とりあえず皆を近づけさせないようにしてます。

「ヒャホハァハハハハハハ――ッ！！」

んで、倒れました。

「承太郎ーッ！！」

「勝ったッ！　第3部完！」

「ほーお

それでだれがこの空条承太郎のかわりをつとめるんだ？」

「あッ！」

「まさかてめーのわけはねーよな！」

地面からマドハ…腕が突き出し、承太郎君が出て来ました。

「承太郎ッ！」

「地面にもぐってたのかッ！　スタープラチナでトンネルを掘ったな！　燃えたのは上着だけかッ！」

「フン！　ところで　おめえさっき「道」がないとかなんとかいってたよなあ

ちがうね……

『道』といいものは自分で切り開くものだ

……ということでひとつ　この空条承太郎が…実際に　手本をみせてやるぜ

道を切り開くところのな」

「ひ」

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラ――――ッ！！」

「つ　つぶれる
　ゲピィ！」

「反対側から飛び出したッ！」
ズザーッてな勢いで地面擦ってったんで道っぽくなりました、跡が。

「…とこうやるんだぜ
　これで　貴様がすっとんだ後に文字どおり「道」ができたようで…
　よかった　よかった」

そしてズィーズィーとご対面～

「おやおや　こいつが『運命の車輪』の本体のスタンド使いか」

「ひっ　ひぃえぇえぇエエエエ～～～～～～っ！！」

「ずいぶんヘンテコなヤツだな
　モリモリでりっぱなのは　車から出ている腕だけで　あとはずいぶん　貧弱な体格をしているぞ　ハッタリだなァ」

シャカシャカ這いつくばって逃げようとするズィーズィー。しかし、

「おい！　逃げるんじゃあ……」
「アッ」
「ねーっ」「ギニャアアアアッ」
ポルポル君に背中踏まれて失敗。

「こっ　殺さないでッ！　金でやとわれただけなんですーっ」

ギャハハハハハハ！！
と、みんなに笑われる情けなさ。
そして車も、

「オ～～～ゴーッド
そしてその体格どおり「スタンド」も消えてみれば……
こんなちっちゃい車をカムフラージュしていたとはな
たとえるなら　毛をむしりとられた綿羊というところか　なさけないのォ～～」

どわはははは
と、しょっぱい見た目に笑われる始末。

で、岩に仰向けにされ、わたしが用意した二本の鎖で、ひとつは足首に巻き、腹を通って反対側の足も同じようにして端を杭に。
もうひとつは腕の付け根に巻き、口に掛けて反対側の腕も同じようにして端を杭に。
そして手首から先は地面に埋めて。
看板に『わたしは修行僧です。
　神聖なる荒行（カトウー）をじゃまして　ほどいたりしないでください。』
と書いて仕上げ。
「うぐ　うぐぐぐぐぐ――――っ」

…確実に死ぬんじゃあないんですか？
別にどーでもいいですけど

「エウフ！（ＨＥＬＰ）
　エウファー！（ＨＥＬＰ）」

「ま…もう　こいつがおそって来てもこわくはないが…
　こいつの旅行パスポートをいただいておけばしばらくはインドを出ることはできまいて
　それと　ぶっこわされたランクルのかわりに　この車にのって国境を越えよう…」

「あ、じゃあわたしがチューンアップしておきますよ、この車」

「ところで　それと…おめーは飛行機でホンコンに帰すからな」
「ええ!?承太郎どおしてェ～　やだ！　やだ！　いっしょに行きた～い」
「やかましいッ！足でまといになっとんのがまだわからんのかァおのれはッ！
　飛行機代めぐんでもらえるだけありがたいと思えよッ！！」

「ですねぇ。
　ま、わたしたちに関わらないなら、何処行ってもいいですけどね。
　その腕輪があれば、路銀にも食にもあまり不自由しないで済みますし」

チューンアップ完了！　ハイブリッド車ってんですかね？　そんな感じになりました！
…オーバーテクノロジーになりますかね？

では出発しましょーか。

／
エ～ウゥ～フ
＼

第１２話：とある少女の改造計画…ですかね？（後書き）

家出少女、アレをあげたからって、彼女の今後なんて知ったこっちゃないです。

こーいうの『投げっぱなしジャーマン』って言うんですかね？

違う？

えっ

第１３話：正直…（作者が）無茶しちゃったと思いますがね（前書き）

展開の話ですけどね（タイトル）

それはもう色んな意味で。

第13話：正直…（作者が）無茶しちゃったと思いますがね

「ヒュ～～　また一段と　美しさにみがきがかかったのかねぇ」

「ホル・ホース」

ここはとある町のとある場所。
ホル・ホースはその女性と合流した。

「まさか　あんたがねぇ
じきじきに出向いてくるたぁ　思ってもみなかったぜ？
おいおい　そんな目でみるなよ　あんたとおれが組めば　最強コンビの誕生だ　ま　よろしく頼むわ」

バーのカウンターのような席に座っている女性の隣に来、握手を求めて手を差し出すホル・ホースだが、女性からは特に反応はない。

「チェッ　冷てぇなァ」

だからそのままカウンターに手を置く。

その時、女性がニヤリと笑い

「んン！？」

咄嗟に手を引こうとしたホル・ホースの手首に錐を突き刺した。

「なッ　なにしやがるッ！？」

「おまえがなんでここに呼ばれたと思っているんだい…？
ＤＩＯ様がＪ・ガイルの仇を討つチャンスを　わたしに与えてくださったのさ」

「か…仇だと…？」

「ッ！　Ｊ・ガイルを見捨ててよくもノコノコ戻ってこられたものだな…！」

「まッ　待ってくれッ！　そりゃ誤解だぜッ！　おれがかけつけた時はもう　Ｊ・ガイルはやられていたんだッ！　グァァァァッ！」

「言いわけはおよしッ！」

弁解するホル・ホースだが、女性は問答無用とばかりに突き刺した錐に力を込める。

「Ｊ・ガイルを見捨てた罪ッ！　おまえの死をもって償ってもらうよッ！」

「ウグッ　グァアァッ！」

「おまえもうわさだけで見たことはないだろう　わたしのスタンドを…」

「なッ！　まッ　まさかッ！　あれをッ！」

言って席を立ちつつ錐を抜く女性、それに対し後退りするホル・ホース。

「そう　見せてやるよホル・ホース…
わたしのスタンド…「ジャスティス」をッ！」

「……ジャ……「ジャスティス」！」

ホル・ホースが言うと同時、女性から霧が出て、周りを満たしていく。

「なッ　なんだ？　きッ　霧かッ！？」

「そう　死の霧…」

「死！？」

そうすると突如、ホル・ホースの手首の傷から血が吹き出しはじめた。

「うぁぁッ！　な…なんだいこりゃぁッ！？　」

そして傷口がはじけ、十円玉くらいの穴が空いた。

「きれいに穴が空いたようねェ…
そう　わたしのスタンド「ジャスティス」は霧のスタンド…　この霧に触れた傷口はすべてそんな風に穴が空くのさ
「ジャスティス」とダンスしなッ！」

「ふざけやがって…ッ！　ギャアアアッ！」

その穴が空いた腕が、ホル・ホースの意思とは無関係に、妙な方向にねじまがろうとする。

「ちくしょうッ　いい気になってんじゃねえッ！」

それを振り切り？　『皇帝』を右手に出して女性に向けるが、

「あけた穴に霧がはいって　あやつり人形に…」

「な…なんだァッ！？」

その右手を操られ、銃口が自身に向き、

「自らの　スタンドで死にな！　ホル・ホース！」

口に銃口をくわえた状態になる。

「『正義』は勝つ！」

そして、銃声が聞こえた。

こちら北側の国境からパキスタンに入ったわたしたちジョースター一行です。
承太郎君の学生服は、わたしが仕立てさせてもらいました。
普通のモノより勿論丈夫な造りにしてます。
「ポルナレフ　運転は大丈夫か？　霧が相当深くなってきたようだが…」

「ああ　ちょっち危ねーかなァ……
なにしろすぐ横は崖だし　ガードレールはねーからな」

「うむ……　向こうからどんどん霧がくるな…
まだ3時前だが…しょうがない…
今日はあの町で宿をとることにしよう」

「いいホテルがあるかなァ　いいトイレがついてるホテルよ！
おれ　いまいちインド・西アジア方面のフィンガー・ウォシュレットはなじめんでよォ～～」

などなど、雑談しながら霧(げんえいち)の町へ

「なかなかきれいな町じゃないか
人口は数千人という所か　ホテルもありそうだな」

「あのレストランで　ホテルはどこかききましょう」
「うむ」

きれいな……まぁ、確かにそうなんでしょうね。わざわざ無駄なモノを表してないってことでしょうし。
ただし住人は除く。

「しかし　妙に物静かな町だなァ　今までのたいていの町はドワァァァ～～～って感じの雑踏だったのによ
こじきたちの「バクシーシ（お恵み）攻撃」も　物売りの「安いよフレンド」攻撃もねーぜ」

「霧がでてるせいじゃろう」

あながち間違いじゃあないという。

「いいかみんな！　パキスタンより西のイスラム世界じゃ　あいさつはこういうんじゃ　まずスマイルで
アッサラーム　アレイクム！」

レストラン前にいたおっさんに挨拶するも、全く動かないまま、手だけで［ＯＰＥＮ］を［ＣＬＯＳＥＤ］に返し、そのまんま立ちっぱなしで無視状態。

「あ…　あのじゃな　ハハハ
いきなり閉店にすることもないじゃろう
ちょいと物をたずねるだけじゃよ　この町にホテルはあるかな？
どこかききたいだけじゃよ」

無視状態。

「もしも〜〜〜し」
「知らないね」
「え？」

やっとしゃべったと思ったらとっとと中に戻ろうとする始末。
「おい　ちょいと待て
知らないとはどういうことなんだ？　この町の者なんだろう　ホテルはあるのか？　ないのか？　それをききたいんじゃ

はっ！」

ナニかを見つけたらしいジョセフさん。わたしはミテナイデスヨ？
ハイ。

「な…なんじゃあ？　あのおやじは！」

「あんたの発音が悪いから　きっと　よく聞きとれねーのさ
あそこにすわってる男にきいてみよう」

ジョセフさんだけに見えてたのは、エンヤ婆のちょっかいなんですかね？

「おっさん！　すまねーがホテルを探してるんだがよ
トイレのきれいなホテルがいいんだがよぉ……おしえて…　！？
おい！　おまえッ！　どうした！？」

聞いてみようと近づいた男性の様子が変だと思ったポルポル君が肩

を掴み引くと、そのまま倒れて口の中からトカゲが二匹ほど出ていきました。

「「「「なにィ～～！！」」」」

「死んでいる！！　恐怖の顔のまま死んでいるッ！」

この人も災難ですよねぇ。

今日…前後一日、ここを通らなければ死ぬことは無かったでしょうから。

「なんだこいつッ！　なんで道端で死んでいるんだッ！

死因はなんだ!?　心臓マヒか？　脳卒中かッ！」

「かもしれん…　だが…ただの心臓マヒじゃあないようだな」

「？　あっ！

け…拳銃だ…　この男　拳銃をにぎっているぞ！」

「今　気づいたのか？」

「煙が出ている　発泡したんだ…

つい今　撃ったばかりだ　2分前か？　5分前か　オレたちがこの町につくほんのちょっと前だ…」

「じ　自殺か？　ピストル自殺!?」

「いや　ちがう

ざっと見たところ　死体にキズはないし　血もぜんぜん出ていない…」

「じゃあ　なんで　こいつは死んでいるんだ……？

こいつの顔みろよ　すげー恐怖で叫びをあげる様なこのゆがんだ

顔をッ！」

「わからん…この男　いったい　この銃でなにを撃ったのかッ！
なにが起こったんじゃ！」

「だれも気づかないのか　町の人は……？
そこの人すまない！　人が死んでいる　警察を呼んできてくれッ
！」

花京院に呼ばれ振り返った子連れの女性の顔には酷いブツができてます。

「失礼…しました…ちょいとにきびが膿んでしまっておりましてェ
～～
ところでェ～～～　あたくしに何か用でございましょうかァ～～
～」

「警察に通報をたのむといったのだ」

「警察？　なぜゆえにィ～～～～？」
「見ろッ！　人が死んでいるんだぞッ！」

ポリ　ポリ　ウジュ　ウジュリ　ウジュリ
「おやまあ　ひとが死んでおるのですか！！」
ポリ　ポリ　ポリ　ポリ　ポリ　ポリ
「それで　わたくしになにかできることは…？」
「警察を呼んできてくれといったろーがッ！」

「はい　はい　警察を呼ぶんですね……わかりました

にきびが膿んでもてかゆーてかゆーてのォ」

静かです。
数千人？　ハハッ　てくらい静かです。
まぁ、当然ですけど。

「なんだ…？　この町の人間は…
人が死んだというのに　ヤジ馬が集まるどころかだれも見向きしない
銃が発砲されているというのに誰も気づかないのか……
ニューヨークや東京などの大都会以上に無関心の人々だ……」

そりゃあ、犯人自分らですしね。

「どうする？　じじい…
なぜ死んでいるのか…死因をハッキリ知りたいぜ
まさか　新手のスタンド使いの仕業じゃあねーだろーな」

「うむ…考えられん…動機がない
『追手』が無関係の男を　我々が町に着くより前に殺すじゃろーか
殺すとしたなら…いったいなぜじゃ？」

二つほど、考えられますね。
一つめは、エンヤ婆のフィールド内に生きた人間は必要ないから。
邪魔でしかないですからね。
二つ目は、一つでも死人（こま）を増やすため。

まぁ、言いませんけど。

「だが万が一ということもあるぜ　死に方が異常だ…
警察が来る前になるべくさわらんように死体を調べてみようぜ」
「うむ」

「なんかますます霧が濃くなって来たぜ
町は霧ですっぽりという感じだな
うす気味わるいな　なんかあの部分　ドクロの形にみえないか」

いつ考えても、エンヤ婆の『正義』って規格外ですよねぇ。
町一つ分の範囲と、人を持ち上げるパワーを兼ね備えてんですから。

死体のポケットからペンを取り出して、死体の検分をします。
「こいつ我々と同じ旅行者のようじゃな　バスとか列車のチケットを持っておるぞ
それにインド人のようだ　インドの紙幣をもっている　この町の人間じゃないぞ」

そしてペンで服をずらした時、心臓の辺りに穴が空いているのを見つけました。

「アッ　傷だッ！　のどの下に１０円玉くらいの傷穴があるぞッ！
これか死因はッ！」

「しかし　なぜ血が流れ出てないんだ？
こんな深くでけー穴があいてるんなら大量に血は出るぜ　普通ならよ

どうやらこいつはもう　普通の殺人事件じゃあねーようだ

おれたちには知っとく必要がある　かまうことはねー　服を脱がせようぜ」

上半身の服を脱がせると、

「なっ　なんだ　この死体はッ！！」

「穴がボコボコにあけられているぞッ！　トムとジェリーのマンガに出てくるチーズみてーに！」

「それにどの穴からも一滴も血が出ておらん！」

「どういう殺され方なんだ！？　どんな意味があるのだ！？」

そこには針串刺しの如くボッコボコにされた身体が！

…少なくともこの人は生身なんですよねぇ。

今のうちに処理しと……っても大差ないですね、はい。

ジョセフおじーさんがひとり漫才やってるのを横目にこの後どーしよーかと考えてたりしてたらエンヤ婆登場。

「ここですかねぇ？　死人とは…　警察のかたをお連れしましたぞ…」

「おお～～っ　やっとまともな人間が現れたぜ！」

「ふぅ…　そのようです　ね」

「旅のおかたのようじゃな…

この霧ですじゃ　もう町を車で出るのは危険ですじゃよ　ガケが多いよってのォ…

わたしゃホテルをやっておりますが…今夜はよかったら　わたしの宿にお泊まりになりませんかのォ…安くしときますよって」

「いやァ～～　わたりに船だぜェ！　おれたちも探してたんだ　婆さん助かるぜェ～　ねぇみなさん　ここにしましょうッ　ここにッ！」

「うむ…そうだな　どうじゃ　三人は？」

別に異存は無いことを伝えます。

「この町のどこかにスタンド使いが潜んでいる可能性が強い…
このこすぎるほどの霧も　ヤツらにとっては絶好のチャンス…
今夜はもう　ずっと油断は禁物ですね」

んにゃ花京院、スタンド使いは「潜んで」はいませんよ。

「しかし…だれが襲ってくるわけでもねーが　不気味な町だぜ
あの警官どもも　あんな変奇な死体の殺人事件だというのに大さわぎもしてねーぜ」

「さあさ　お客人方　我々も参りましょうぞ　霧が深うございますゆえ　迷わぬようついてきてくだされ」

「あァ婆さん　待ってくれよッ」

「荷物など忘れぬよう　出発しますよ準備はいいですか…？」

「いいぜ　どうせおれたち一泊だけだからさ　たいした荷物はないんだ　へへへ　ささっみなさ～ん！」

さ、ホテルにいきましょか。

「さぁさ着きましたよ　ここがわたしのホテルです　どうぞどうぞォ～」

「ヒェ～～　あんな婆さんのやってるとこだから心配してたけどこりゃあ　けっこうめっけもんですよォ？」

「うむ　そのようじゃな」

「ここにサインをお願いしますよジョースターさん」

「婆さん　あんた…今　ジョースターという名を呼んだがなぜその名がわかった？」

そうですよねぇおかしいですよねぇ～
この町に入ってから誰もお互いの名前を口に出してませんからねぇ。
「いやですねェお客さん　今さっきそちらの方がジョースターさんて呼んだじゃありませんか」

「え！　おれ！？　そういやあ呼んだような…」

「言いましたよォ
客商売を長年やってるから　人様の名前はパッとおぼえてしまうんですからねェ！　たしかですよォ～～～～」

とかいう会話を横に宿帳に記入しようとしたジョセフさん、なにやら気になる名前を見つけた模様。

「エンヤ？　…女！？」

「昨日からお泊まりいただいておりますが　その方がなにか？」

「いやァ　女性の一人旅とは　珍しいと思ってな」

「綺麗な女性ですよ　この辺りでは珍しいぐらいの」

「ほォ～～　そんな美人なのかい　是非ともお近づきになりたいもんだぜ！」

「無理じゃろ」

自画自賛してんじゃあないですよばーさん
そりゃあ無理でしょうけど。

「おかみさんよ　ところでその「左手」はどうしたんだい？」

「あ…これ？
　これはヤケドですじゃ……　としのせいですかのォー　ウッカリ湯をこぼしてしまってのォ　ヒャッヒャッヒャッ」

「とし？　何をおっしゃる！　こーしてみると４０くらいに見えるよォ　デート申しこんじゃおーかなぁ　へへ！」

「ヒャヒャ！　からかわないでくだしゃれよお客さん♪ンンンン！」

ハハハハハ　ヒャヒャヒャヒャ
この後の婆さんの顔は見ようとは思いませんよ。

――――

――――

――――

「（どうにもあの左手が気になっていけねーぜ
……酒でも呑むか）」

「ポルナレフ　どうかしたか？」

「いや…　ちょいと下いってくるぜ
ロビーにいるからよ　なにかあったらよんでくれ」

ポルナレフのみが別行動、ロビーの奥の酒場に来、

「いやァ　ついてるぜ　婆さんの言ってた女だぜェ」
カウンター席に女性を発見、隣に座る。

「オンザロック頼む　おれポルナレフっていうんだ　一人かい？
名前は？　観光かい？　奢らせてくれよ　何飲む？　独身かい？
いやァ～　今日はなんていい日なんだァ！」
「名前は……エンヤ」

それにしてもこのポルナレフ、ナンパである。

「わたしは……　人を探して旅をしています…」

「人を？　よければ話してくれないか？」

「仇を……」

「……仇？

うあぁ～ッ　なんて偶然だァ！　おれたちゃ同じ境遇にあるッこんなことってェ…」

「そいつはわたしの大事な肉親を　むごたらしく殺したのよ…」

「ッ　……わかる　わかるぜ　おれも　妹を殺されたんだ…力になるぜエンヤ！」

と、意気込んだ時、カウンター後ろの扉が開き、中からホル・ホースが飛び出し倒れて込んできた。

「なッ　なんだッ！」

「チッ」

「て…てめえッ　ホル・ホースッ！　こんなところまでッ！」

ホル・ホースが何かを伝えようとするがはっきりした言葉にならず、聞きとれない。

その時、バーテンが錐でポルナレフを背後から突こうとするが、チャリオッツが止める。しかし、突き続ける。

「チッ　なんてしつこさだッ　てめーに恨みはないが…　ッ」

チャリオッツで錐を持った手指を切り落とし、胸を突いて倒す。

「なんなんだこいつはいったい？　どうにも普通の人間ってわけでもなさそうだが　なぜおれを狙う！？」

「ッフフフフフ」

「どうしたんだエンヤさん？」

「フフフッ　話がまだ途中だったねェ…　じつは仇は既に見つけているのさ…」

ポルナレフが振り向くと、あちこちの席に座っていたモノ達が立ち上がってきた。
そのうちの一体は、彼が一度見たモノだった。

「お……おめーは！？　さ…さっき死んでた…　町についたばかりの時に死んでいた　インドの旅人！
ゲエエー　死人が動いてるのかッ！」

「お前だよポルナレフ…　ＤＩＯ様の邪魔者であり　我が息子　Ｊ・ガイルの仇は」

「息子…？　おまえが母親だと？　すると　てめーもスタンド使い

かッ！」

「スタンドは一人に一体　でもね　わたしのスタンド「正義（ジャスティス）」は死体をあやつる「霧のスタンド」　百人だろうと千人だろうと無制限　しかも死体だから倒すことはできない……」

死体達にだんだんと囲まれてくる。

「町中に……殺される……ぞ　そ…それに　け…負傷（けが）をすると…こうなるぜ…ポルナレフ」

ホル・ホースが、自身の手首に空けられた穴を見せながら警告をする。

「さ…逆うらみもはなはだしいぜ!!　こんな性格のねじまがった「スタンド」使いの追手だったとはッ!」

「まだ生きてたのかい…？　しぶとい男だねェ…」

「自分の「スタンド」でやられる…間抜けは…いねえッ　うぐぉあッ！」

ホル・ホースが起き上がろうとするが、右手を操られて自分の顔を殴る羽目に。

「ほんのちょっと体に傷をつけるだけでいいんだよ…　あとは　わたしのスタンドが殺してやるから

どうする？　ポルナレフ…」

「逃げる」

「！

わああ――　ポルナレフ！　おれを放っとかないでくれーっ！」

「やかましいッ！　ホル・ホース！　てめーアヴドゥルのこと忘れてんじゃねーのかッ！　おれが助ける義理は　ねーッ　そこで死ねッ　てめーわ！」

室の奥の扉へと走り逃げるポルナレフ。

後ろから死体のひとつが錐を投げてきた。

それは結局当たらずに、扉に刺さる。

ポルナレフは扉に椅子を引っ掛けて開きにくくし、さらに奥へ。

「なんてこったッ！　これは地下室へおりていく通路じゃねえか

ジョースターさんたちを呼ぼうにも　ますます声がとどかない所へ来ちまった

ひとりで戦っても負ける気は　しねーが　ちょいとでも体に傷をつけられたらやばいぜ！

ホル・ホースのように穴があいてあやつられてしまう

く…くそっ！　外への出口はねえのか！　窓には鉄格子がはまっているぜ

くそぉ～　この部屋に隠れるかッ！！」

ポルナレフが開いていた部屋に入り、扉を閉めた時、椅子をつっかいにした扉が壊れる音が聞こえた。

「き…来たッ！」
（ドアを破った音だ
こ…こうなったら戦うしかねーようだな
ただし　カスリ傷ひとつ負うことはできねーぜ）

部屋の外からはガサゴソゴソと音が聞こえる。

（通路を歩いている音だ　ほかのドアを調べてやがるな……くっそぉ～　ここへだんだん近づいてくるぞ…
なんてこった…　よく見たらこの部屋　便所かよォ…　なんかおれ　いつも便所みたいな所で襲われるな　ちくしょう　きたねー便器だぜ！！
さぁ！　死にぞこないどもめ！　来るなら来いッ！　このドアをぶちやぶって入って来なッ！
だが　入ってきたとたん　おれのチャリオッツは一呼吸のうちに４人は　ブッタ切ってやるからなッ！！）

と、覚悟を決めたポルナレフだが、ドアの向こうからは音がしなくなった。

「な　なんだ？　もの音ひとつしなくなったぞ
やつら！　いったい　なにしてやがるんだ？　ドアを　ぶち破ってこないのか！

なにしてやがるッ！　なんか反応しやがれッ！」

外が余りにも気になってしまったのか、鍵穴から外を覗く。

そうして見えたのは、ひとつの目玉。

「ケケケケケケケーッ！」レロレロレロレロレロレロ
「ひえええ　向こうからものぞいていたあーッ！！」

外にいた死体の舌が鍵穴からポルナレフを襲う。

「なにィ――ッ！
しっ…しまったッ！
舌を刺されたッ！
うぁあ　うぁあ　うひぁあああああ」

「フッ　おちたね」

それに舌を刺され、そこに穴が空く。
そしてトイレから引きずり出された。

「笑え！」
「「ギャハハハ」」

エンヤの命令で、ただ「笑うという動作をする」死体達。

その時、上からナニかが落ちてきた。

それは右の袖が肩から無くなり、代わりに露出する部分が全て鎧のようなもので覆われていて、左腕には敵の装甲を打ち抜く近接戦闘

装備らしきものがついている……

要するに武装したエンであった。

「はろーじゃなくてぐっいぶにん？　というよりぐっない？　まあ、どっちでもいいですけど。
あ、ポルナレフ、刺されちゃってましたか」

ちょっと遅かったみたいでしたねー。などといいながら立ち上がり、エンヤに向き直る。

「エ…エン！　なぜここに!?　それにその腕のは？」

「んー、天井抜いて上の部屋から来ました。えっ、聞いてない？　それはともかく、右のは天井ぶち抜くのに使ったもので機械鎧（オートメイル）といいます。左のこれは爆式†第七聖典といいまして……」

そこで言葉を切ると、一番近くにいた死体に左腕の武装を突き刺し

「セブン！　カルヴァリアデスピアー！」

起爆。

死体は四散、消滅した。

「―と、このように死者をぶち殺しちゃえる武装（ツぼい）です」

ボソッとなにか言ったが気にしない。

「まあ、それはさておき…
ちょっと見ない間に随分若返ったじゃあないですか？　エンヤ婆…さん
ええ何も言わなくていいですよ、わたしを誰だと思ってんです？
『スタンド使いの気配が分かる』と評判のわたしですよ？
貴女とあのお婆さんから、全く同じ『霧の気配』がしたんです。
（まぁ、嘘ですけど。）
それ以前の問題でもありますけどね。
『エンヤ・ガイル　J・ガイルの母親で「正義」の名を持つ霧のスタンドを持ち、DIOにスタンドを教えた存在である』
…という情報をわたしは持ってますからね。　なんで知ってるかーなんて、訊くだけ無駄ってなもんですよ
（あァ～～ッ！　なんでこーもいらんことばっかし喋っちゃいますかねこの口はぁッ！）」

内心バタバタしながら表面上はむしろ相手を小馬鹿にするように話すエン。

既に変装している理由が無くなったのか、元の姿に戻り、とても表現しづらい程すごい形相のエンヤ婆。

トイレの入口で這いつくばっていて、正直展開についていけてないように見えるポルナレフ。

動いたのはエンヤ婆だった。

「なぜ　それを知っているのか　どうやって知ったのかはこの際どうでもいいッ！
やはり貴様は生かしてはおけんッ！
ＤＩＯ様の為にも　ここで今ブチ殺さでおくべきかァ～～っ！
とびかかれイイイイイイーッ！」

死体達に命令し、エンを襲う。

「やれやれ、わたしに全体攻撃技なんてありましたっけねぇ？」

などとのたまう余裕を見せながら左腕のパイルバンカーを消し、両手をパンッと合わせ、左手を右腕を撫でるように移動させる。

するとスパークと共に青い光が発生し、右腕の鎧が少し大きめの剣になる。

そして左手に炭化銃をだして、襲い掛かってくる死体達を迎え撃つ。

あるモノは突き刺され爆散・消滅し、あるモノは撃ち抜かれ上半身と下半身がお別れする。

『銃は剣よりも強し』と言われたが、この場においてはそうでもないようだ。

しかしやはり銃と剣では完全に防ぐことができる筈もなく、エンは左手の甲に攻撃を受け、穴を空けられてしまう。

「＊おおっと＊」

「クケケケケケケーッ！
ついに我がスタンド「ジャスティス」の術中におちたなッ！　このくされガキャーッ！！」

しかし、「正義」に捕らわれたというのに、相変わらず余裕を持っているように見えるエン。

「あらまぁ、これじゃあ自由がきかなくなりますねぇ。
でもエンヤ婆、こんなところで油売っててていいんですか？　そろそろＪＯＪＯが来るんじゃあないかと思うんですけど」

とエンが言うと、入口の向こうから扉を思い切り蹴飛ばすような音が聞こえ、エンヤ婆は急いでそちらに行った。

「まったく、やれやれです」

ため息をつくエン、穴が空いた左手を掲げ、

「この左手の――――」

最初にポルナレフがエンヤと遭遇した元酒場―なぜか普通の部屋になっている―、ここに承太郎が入ってくる。

そしてすぐにエンヤ婆が奥の部屋から出て来、奥へと続く扉を閉める。

「な…なんですじゃ……いきなりノックもせんと入ってきて
なんの用ですじゃ?びっくりしますじゃ…」

「……
今…ノックといったのか?
ノックはしたぜ　なにかに夢中になりすぎてきこえなかったのと
ちがうか…ばあさんよ

ポルナレフのやつを探しているんだがな　知らねーかな」

(ぐぐぐっ　どうする?　とぼけて知らんと言うか?
いや待てよ～～～
この承太郎…ポルナレフと違って抜け目ないヤツだから　探りを
入れて質問しているにちがいない
とぼけたとたん　このわしのことを怪しいと思うかもしれん!
ええーい面倒くせえわ!　ここは本当の事を言ってやるッ!
そして　わしに背を向けた瞬間　このハサミで刺してやるわッ!
あとは「スタンド」でなぶり殺しじゃ!)
方針を決めたエンヤ婆、ニコォと笑顔を見せて近づく。
「ええ　知ってますとも
ポルナレフさんなら　どこにいるかよーく知っていますよ　承太
郎さん」

その頃、ポルナレフは

(うぐっ!　うぐう
じょ…承太郎だ!
まずいッ!　承太郎のヤツ　ちょいとでも傷をつけられたらおし

まいということを知らね――ッ
く…くるなッ！　ジョースターさんと花京院に知らせろッ！　そのババアがスタンド使いだ――ッ）

結構焦っていた。
しかしエンは、

「大丈夫ですよポルナレフ。ＪＯＪＯは少なくともエンヤ婆が怪しいことには気づいてます」

特に変化はみられない。

「トイレでしゅよォ
今　あいました　トイレにいましゅよ　承太郎さん」

「……
……なんだトイレか　トイレはこのドアの奥か」

「ええ！　そうですともじゃ……
トイレはそのドアを入って　ろーかの一番奥ですじゃよォオオオオ」

承太郎はポルナレフ達のいるところへのドアへ向かい、エンヤ婆は懐からハサミを取り出す。

（このヌケ作がァ～～
やはりまだガキよのォ～～～
ポルナレフを殺せば　あの世で息子が喜ぶ！　そして　この承太郎を殺せば　ＤＩＯ様が　エジプトで喜んで下さるッ！）

そして油断している（とエンヤ婆には見える）承太郎の背に向かい
ハサミを突き刺そうとするが、

「そうだ　思い出した　ひとつ聞き忘れたが　バアさんよ」

承太郎が振り向きざまに足払いをかけたのですっ転んでしまう。

「ん？
おやおや　どうしたバアさん　急にころんだりして……
なにかにつまづいたかい！？」

「あっあっ！　危ねえッ！」
「おお～～　ほんとに危ねえなあ　ハサミなんか持ってころぶとは
大事故にならなくてよかったぜ　よかったよかった

ころんだままですまねーが　質問を続けさせてくれ
今　どうしてオレの名を「承太郎」と呼んだ？　一度も名のって
ないし　誰もおれの名をあんたの前で呼んでいないのによ　それを
けてえんだ」

エンヤ婆は　自分の　うっかりを　指摘され　焦っている！

「なあ答えてくれ
子供の頃『刑事コロンボ』が好きだったせいか　こまかいことが
気になると夜もねむれねえ」

「な…なにを疑ってるんですかァ

宿帳ですよぉ～～っ
宿帳にさっき　ひとりずつ自分の名をお書きになったじゃああり
ませぬか　ゴホッゴホッむせるなあ～～
ジョセフ・ジョースターさん
花京院典明さん
Ｊ・Ｐ・ポルナレフさん
エン・カームリィさん
そして空条承太郎ってねえええ～～～っ」

「ほう　宿帳ってもしかすると　これのことか」
「あっ！！」

焦りすぎてだんだん挙動不審になるも必死に言い繕っていくエンヤ婆だが、承太郎が懐から宿帳を取り出すことで無意味になる。
その宿帳には

Ｊｏｓｅｆ　Ｊｏｅｓｔａｒ.
Ｊａｎ，Ｐ，Ｐｏｌｎａｒｅｆ.
Ｅｎｎｅ　Ａｌｔｏｒａｉｎ.（エンネ・アルトレイン）
Ｔｅｎｍｅｉ　Ｋａｋｙｏｉｎ（花京院テンメイ）
Ｑｔａｒｏ　Ｋｕｊｏ（空条Ｑ太郎）

…と、書かれていた。

「どこにも「承太郎」なんてかいてねーぜ
最初に会った時　ジョースターと呼んだときからあやしいと思ってたのさ　みんなにもおれの名は呼ぶなと言っておいた
…だのにおれの名を知ってるってことは…
とぼけてんじゃねえ　もうスタンド使いの追手ということがバレ

てんだよ　ババア」

宿帳を放りながらとどめの言葉を言う承太郎。
エンヤ婆には既に動揺は無くなっている。

「さあ　どうした　あんたの「スタンド」を見せてこないのか」

「もう　すでに見せてるよ――――ッ！！」

エンヤ婆が叫ぶと同時、承太郎が背にしていたポルナレフ達のいる扉から大量の死体達が飛び出し、承太郎を襲う。

「フン！
おらおらおらおらおらおらおらおらあっ！」

襲ってきた死体達は殴り飛ばすが、

「ケケケケケケクケケケケケケケケ！」

「！　ぬううっ」「ケケケケ」

赤ん坊の死体が承太郎の膝に取りつき傷つけていた。

「ぎゃはははははははは――――っ！！
わしのスタンド「正義（ジャスティス）」は勝つ！　ほんの一か所でいいのさっ
ほんのちょっぴりでいいのさッ　術中にはまったんだよ！　承太郎ッ！」

「うぐっ　うぐぐっ」

「ポルナレフ！！」

承太郎、ポルナレフを発見。
同時、その扉の横の壁が霧散した。
そしてそこからエンが出てくる。

「ね？　こうなっちゃうんですよ、この街に『鋼の錬金術（フルメタル・アルケミー）』を使うと」

「承太郎！　おれだ　ホル・ホースだ！　そのエンヤ婆のスタンドは「霧」のスタンド！
刺された　その傷は　おれのように穴があいて　霧にあやつられるぞッ！　死体でさえも自由に動かせるんだ…」

いつの間にかポルナレフのところに来ていたホル・ホースが承太郎に忠告するが、

「おだまりホル・ホースッ！」
「うぐァ！」
右手を操られ、自分を殴る羽目に（二回目）。

「おらあっ！」
現れた「正義」の像にスタープラチナのラッシュで攻撃するが、当然全く効かない。

「ケケケ――ッ
拳で霧がはったおせるかッ！
剣で霧が切れるかッ！
銃で霧を破壊できるかッ！

爆破で霧を消し飛ばせるかッ！
無駄じゃ無駄じゃ　きゃきゃケケーッ！
てめーらにゃあなぁ～んもできんよォ～」

「さっ　最強最大のスタンドだ…　とてもおれたちのちっぽけなスタンドじゃあかなわない…
こ…この「スタンド」にかなうものはない…」

「ほいほいもっと言え
もっと言ええ～　そういうセリフは　もっといいなさいじゃケケケケ
さあ承太郎　てめーもあやつってくれる」

「に…逃げろ承太郎！　足に穴があくぞッ！」

「まぁ、ＪＯＪＯなら大丈夫でしょう」

「や～れやれだぜ
逃げる必要はないな…　そのバアさんがあと一回呼吸するうちにその「スタンド」は倒す」

「なあにィ　あと一回なにをするだって～～～　息子を殺したカスどもが～～～！！
一回呼吸する間だとォ～　すぐしてや…
……
一回…ぐっ　ただの一回……」

承太郎の宣言に対し呼吸をしようとするエンヤ婆だが、だんだん顔

色が悪くなっていく。

「くっ　こっ　き　う　が　んぱ　んぱっ　はっ　なにぃ～」

「あっ！
承太郎の「スタープラチナ」が霧の「正義」の頭を――」

「や……や……やめて…く…くる」

「すいこんでおさえつけているッ！
これでは呼吸ができないぜッ！」

「あはひぃ――――ィ」

そしてついに泡を吹いて倒れてしまった。

「ハヒ　はひっ　はひっ」

「ふむ　どれ　これでこのバアさんの頭の中にも大好きな霧がかかったようだな」

（ぐやじい～　クププ）

これにて一軒落着、である。

（その〆方はどーかと思うんですのー）

気にすんな、エン。

第１３話：正直…（作者が）無茶しちゃったと思いますがね（後書き）

十円玉？　いいえ、五百円玉です。そう見えましたけどねぇ。

……正直、一月以上更新しないとは思っ

第13．5話：エスケープ（前書き）

「前半だけでよかったんじゃあ？」

ちょっと物足りないよーな気がして…無茶しちゃったと思います

第１３．５話：エスケープ

「トイレの災難」第二弾はわたしが介入したので『無かった事に』なりました。

だからポルポル君はからかわれる事なく手当てを受けています。

「みんな　外に出てみろ」

承太郎君に言われて皆が外を見てみると

「なんてこった」

「ホテルの外に出てみりゃあ　こ…ここは」

「やれやれ」

「ここは墓場か　ここは荒野の墓場だったのか　こりゃあ～～～」

「この旅行はおどろきの連続なので　こんどは町全体が「スタンド」だったのかという感じだが」

「いや　おれはけっこうたまげてるぜえ～」

外に町は無く、あるのは幾つもの墓石だけ。ホテルも廃虚となっています。

とりあえずわたしは皆さんが驚いたりしてる間に車の後部に乗り込んで寝っ転がっときます。
こっからでも話は聞こえますしね。

「スタンドの霧全体で墓場を街やホテルに仕立てあげ　墓下の死体どもと我々は　お話していたんだ
　このバアさん　とんでもない執念のスタンドパワーの持ち主じゃ」

「どうしますか？　意識を失っていますが　このままここへおいていくのは我々にとって危険です　再び復讐して来ますよ」

「それだよ　それ　おれの心配は！」

「うむ……承太郎とも相談したが　このバアさんなら一緒に連れていく」

「つっ…連れていくのかァ～」

「このババァにはしゃべってもらわなきゃならんことが山とある
　たとえば　これから襲ってくるスタンド使いは何人いてどんな能力なのか
　エジプトのどこにＤＩＯのやつは隠れているのか
　そしてＤＩＯのスタンド能力は」
「どんな正体なのか？　このバアさんからそれを聞き出せれば我々は圧倒的に有利になる」

わたしに訊いてくれりゃあ全部答えてあげれるんですけどねぇ～
ふふっ

「そう簡単に口をわるとは思いませんが」

「ご…拷問でもするのかあ　ババァだから楽しそうじゃねーが！」

「わしの「隠者の紫」を忘れるなよ
ＴＶにこのバアさんの考えを映し出せばいい」

「なるほど！　ちくしょう墓場にゃＴＶはねーから次の町でか～～」

ん、ホル・ホースさんがこっそり来たみたいですね、エンジンが始動しました。

んで直ぐに発車、ホル・ホースさんは飛び乗りっぽい感じで。

「あっ！　ホル・ホースッ！」
「あの野郎ッ　我々の車をッ！」

「おれは　やっぱりＤＩＯの方につくぜッ！
また会おうぜ　もっとも　おたくら死んでなけりゃあな」
「てめ――ッ　戻ってこい　車をかえせこの野郎ッ！」

「ひとつ忠告しておく　そのバアさんはすぐに殺した方がいいッ！
さもないとそのババァを通じて　ＤＩＯの恐ろしさを改めて思い知るぜきっと！　じゃあーなーっ！」

わたし、搬送。

んでもってそれなりに走ったあたりでぶったらぐったらぶちぶちぐちぐち言ってるっぽいホル・ホースさんに話しかけます。

「おはようございましょう！　ホル・ホースさんっ！」
「うおッ！　てめー　いつの間にッ！」

「そりゃあ貴方が乗り込む前からですよ。
まぁ、んなこたーどーでもいいんです。今日はちょいと貴方に渡したいモノがありましてね。」

とか言って車を停めてもらいます。

「ではでは、取り出したるはソル・ルナ・フレイム・フロストのレンズと、ジャグラー・ファランクスのフレーム、それにクォード・クイントのバッテリーですね。
　これは太陽銃と呼ばれるモノのパーツです」

全て懐から出しました。
黄色・青白・朱色・水色のレンズと、銃としてはちょっぴりおかしな形状のフレーム…本体と、マガジンを二本。

とりあえずジャグラーにソルとクォード、ファランクスにフロスト

とクイントを着けて使用可能状態にします。

「これは本来不死（アンデッド）なる者を浄化する為の武器です。
わたしの持つもう一つの銃「炭化銃」も似たような感じで、不死人を殺傷し、核を奪う為の武器です。
もちろん両方ともわたしが持っている時点で対スタンド武装になってんですよね。
つまりスタンドを傷つけることが可能です。まぁ、今はそんなことはどうでもいいんですけどね。　では、この太陽銃の性能説明をさせていただきます」

「まずは太陽銃の仕組みからですね。これは太陽エネルギーをバッテリー…マガジンに貯めて、そのエネルギーを撃ち出すモノです。
その際、着けているレンズによって効果が異なるんですよ。
まずソルですが、これは特に効果は無いデフォルトなやつです。
次にルナ、これは威力がゼロの代わりにエネルギーを消費しない、という効果のモノです。
次はフレイム、これは太陽エネルギーに火の属性を付与します。
最後にフロスト、これはフレイム同様冷気の属性を付与します」

「次にフレームの説明を。
こちらのジャグラー、これは跳弾を撃ち出すタイプのものです。
射程はだいたい直線で2～３０ｍくらいだと思います、多分。あ、威力はあんまり無いですよ？
こっちのファランクス、これは接射用フレームですね。威力が高い代わりに射程は３０ｃｍ無いです。標準な人間を１０ｍ殴り飛ばすくらいの威力は多分ありますよ」

「それで、エネルギーの補充方法は、銃口を太陽に向ける、これだけですね。
　その際に「たいよおぉぉぉぉ！！」と叫ぶと効率が上がる……訳はないです、きっと」

説明が終わったんで、ホルスターとかを造ってそれに太陽銃をなおしてホル・ホースさんに渡します。

「どうぞ。ではそろそろジョースター一行のとこに戻らしていただきますね」

と言って、身体中にある素材からX字の羽のようなもの―飛翔滑走翼―を背中に造り、翔ぼうとするとホル・ホースさんに待ったをかけられました。

「なんでおめーは　こいつをおれによこしたんだ？」

「決まってるでしょう？　…端から見たら、見えない銃でごっこ遊びしてる痛いヒトだからですよ。
　あぁ、あと、関係ないこと一応言っときますけど、わたし、一応女なんですよね」

とりあえず、とっとと戻りましょ。
また余計なことだった気もしますけど。

てな訳で高速で帰還しましたら、乗ってたならなんで車取り返さなかったのかと言われました。

いいじゃあないですか、新しい車をわたしが造ればいいんですから。

第１３．５話：エスケープ（後書き）

どうしてこうなっちゃうんです？　ほんと

使う予定の無い強化第２弾、ホル・ホースさん

『７人目』の世界なら大活躍だったんですが

太陽銃を知らない人向けにパラメータ（おおまかに）

ジャグラー
破壊力：Ｄ
スピード：Ｃ
射程距離：Ｂ
持続力：バッテリー『クォード（４）』＋低消費フレーム＝Ｂ
精密動作性：Ｄ
成長性：各レンズ、Ｃ

ファランクス
破壊力：Ｂ
スピード：Ｂ
射程距離：Ｅ
持続力：バッテリー『クイント（５）』＋高消費フレーム＝Ｃ

精密動作性：D
成長性：各レンズ、C

第１４話：『最弱』なんですよね？（前書き）

だんだんとチートじみてると思ったとしても、それは確実に気のせいですよね

第１４話：『最弱』なんですよね？

途中の町までやっと行けるかどうかっていうボロ車を造って、着いた町で馬車を仕立ててカラチまで来ました。

どうも、こっちで和名は期待してないエン・カームリィです。

そもそもそっちで名乗ってないから期待もなにもないという。

ドネル・ケバブなぞどーでもいいしとか思いながらジョセフさんの掛け合いをぼーっと見物。

「おいッ！　みんな　そのバアさん目を醒ましておるぞ！」
「えッ！」

ええ、わたしの隣でガタガタしてますね、エンヤ婆。

「わ…わしは！
わしは！　何もしゃべっておらぬぞッ！
な…なぜ　おまえがわしの前にくる
このエンヤが　ＤＩＯ様のスタンドの秘密をしゃべるとでも思っていたのかッ！」
「え！？」

ケバブ売りのダン、こっちみんなです。

「あ　あ　あ　あバババババァ――ッ」

エンヤ婆の顔のそこかしこからミミズみたいな触手がぶわぁっーって感じに飛び出してきました。

「なっ　なんだァ――ッ　この触手は――ッ！！」

「なぜきさまがこのわしを殺しにくる――ッ！！」

「ＤＩＯ様は決して何者にも心を許していないということだ　口を封じさせて…いただきます
　そしてそこの５人……お命ちょうだい　い　た　し　ま　す」

「ギギギィ！」
「ばあさんッ！」
「うぽわあ――ッ！！」
「ううあ――ッ」「なにィーッ」

なんかもう、血がぶしゃーって感じで。

「わたしの名はダン……鋼入り（スティーリー）のダン
　スタンドは「恋人（ラバーズ）」のカードの暗示　君たちにもこのエンヤ婆のようになっていただきます」

「なんてことを！　このバアさんはてめーらの仲間だろうッ！」

「ばあさんッ！」

「う　ううう　うそ　うそ……　う…うそじゃ　ＤＩＯ様がこのわしにこんなこと……するはずが……ない」

「ばあさんの体から出ているのは「スタンド」じゃあないぞッ！
実体だッ！　本物の動いている触手だ！！」

「あの方が　このわしに　このようかことをするはずが……「肉の芽」をうえるはずが
ＤＩＯ様はわしの生きがい……信頼し合っている……」

「「肉の芽」！？」

「ばあさん！」

ポルポル君がチャリオッツで出てる触手を切り飛ばし、それが全て消え去りました。

「こ…これは！　太陽の光で溶けたぞッ！　「肉の芽」！　ＤＩＯのヤツの細胞だッ！」

「いかにも！　よーく観察　できました
それはＤＩＯ様の細胞「肉の芽」が成長したものだ
今　このわたしがエンヤ婆の体内で成長させたのだ
エンヤ婆……あなたはＤＩＯ様にスタンドを教えたそうだが　ＤＩＯ様があなたのようなちっぽけな存在の女に心を許すわけがないのだ　それに気づいていなかったようだな」

「ばあさんッ！　ＤＩＯのスタンドの正体を教えてくれッ！」

顔面血塗れのエンヤ婆にジョセフさんが駆け寄り、叫んでます。
ついでにわたしもエンヤ婆の側に行っときましょ。

「言うんだッ！
ＤＩＯという男に期待し信頼を寄せたのだろうが　これでヤツが
あんたの考えていたような男ではないということがわかったろうッ！
わしはＤＩＯを倒さねばならんッ！　たのむ！　言ってくれッ！

教えるんだァ――――ッ！　ＤＩＯのスタンドの性質をおしえ
るんだァ――――ッ！」

「い……いちどしか……言わんぞ……
Ｄ…ＩＯ…様…の…スタンドに　聞いてみな
…ク……」

結局、なんの手掛かりも手に入らなかった訳ですよ。

「ＯＨ！　ＧｏＤ！」

「うくっ　くっくっ　くっくっくっ　くっ　くっくっ　くっくっ
くっ　くっくっくっ　悲しいな……くくっ
どこまでも悲しすぎるバアさんだ　くっくっくっくっくっ」

「恋人」のはテーブル席でお茶？　を飲んで余裕みたいな感じですね。
この後ジョセフさんの脳内探検でしたっけか。

「おれはエンヤ婆に対しては妹との因縁もあって複雑な気分だがてめーは殺す」

「5対1だがちゅうちょしない　覚悟してもらおう」

「立ちな」

態度を崩さない「恋人」の。

「おいタコ！　カッコつけて余裕こいたふりすんじゃねえ　てめーがかかってこなくてもやるぜ」

「どうぞ　だが君たちはこの「鋼入り（スティーリー）のダン」に指一本さわることはできない」

「おらあッ！」

調子こいてる「恋人」のをスタープラチナが殴り飛ばした「ガグッ！」

「なに！！？」

「！？」

「どっ…どうしたエン！　こいつと同じように飛んだぞ」

い…痛い…わたしが、痛い、痛いイタイイタイイタイ

落ち着いてわたし落ち着きなさいわたしなおして無くして痛みなくして傷は治して平静冷静冷却精神クールダウンしないとしないとわたしわタしくグククック……

…ふぅ。なんともはや、わたしに取り憑くとは。

何十年ぶりでしょう？　痛みを感じたのは。しかもスタープラチナのパワーを反映したせいでかなりのモノでしたし。

でもまっ、いるとわかっていれば対策は容易、わたしのナカに居る

というのですから、もう出しませんよ？

「このバカが……まだ説明は途中だ
もう少しできさまは自分の仲間を殺すところだった　いいか……
このわたしがエンヤ婆を殺すだけのために君らの前に　このわたしの顔を出すと思うのか……　ぺっ」

わたしを殺そうというのなら、それこと一撃で決めないとですよ、あなたの場合。

「「恋人」のスタンド…他人の体内、脳にもぐり込み、本体のダメージを数倍にして取り憑いた対象の同じ場所に返す能力ですね」

「やはりお前のその能力は危険だ…ゆえに！　きさまをいちばんに始末させてもらおうッ！
すでに「恋人」はＤＩＯ様の肉の芽をもって入っている！
脳内で育てているぞ！！　エンヤ婆のように内面からくいやぶられて死ぬのだ！」

「えぇ、でしょうね。わたしも脳内に異物を認識しています。
しかしわたしをこのような方法で殺せるっていうのなら、まずはその幻想を消し飛ばしてあげましょう。
わたしのナカに、肉の芽が存在するなんて、”嘘”
…とまぁ、存在を『無かった事に』さしていただきました。そしてもうひとつ」

と、「恋人」のに近づき

「たしか貴方、『指一本さわることはできない』って言ってましたよねぇ…」

構えます。

「そうだ　このわたしがもし交通事故にあったり　偶然にも野球のボールがぶつかって来たり　つまづいて転んだとしても　おまえの身には何倍ものダメージとなってふりかかる……

だというのにおまえはこのわたしを殴ろうとしている

自殺志願者か？　それとも被虐趣味でもあるのか」

「ふふ、どっちだっていいですよ」

せいしんとういつ

そして

「フッ！」

４回、もう一度４回、そして２回、人間よりは速い連撃をかましてやりました。

最初のは四肢首に。

二回目は付け根に。

最後のは胸と腹に。

またしても吹き飛ぶ「恋人」の。

一見リーチに無理があるでしょうが、こんなのはズームパンチの応用でなんとでもなります。

そして追い打ちに、殴った箇所（胸と腹は除きます）の表面だけを爆発させます。

多分骨折はしてないと思いますよ？

「これがわたしの、ばくれつけんです」

笑いかけながらいってやりました。

「な…なぜだッ！　なぜおまえにダメージが無いッ!?」

「ふふん、貴方自身ちゃ～んとわかってるんじゃあないですか？
「恋人」はとても力の弱いスタンド…つまりその力ではどうにもならない性質に、わたしのナカミを変化させたんですよ」

笑顔のまま、動けなくなってる「恋人」のに近づいて、喋れないように金属製のモノで顔の下半分を覆ってやり、

「ではでは、鋼入りのダンさんさようなら。二度と会うことも無いだろう、です」

手を突き込んで、体内から鋼の棘を幾つか突き出してやります、ゆっくりと。

ビクビクしちゃって、すっごくキツそうですね、これ。

……はい、動かなくなりましたっと。

「これで本当に「鋼入り」になった訳です。
でも残念ですけど、このままだと猟奇殺人云々って感じですから…
とりあえず、塵に還りなさいな」

パチン　ボグン　サァァァァ

てな感じで、存在自体が『無かった事に』なりましたとさ。

めでたくなし　めでたくなし♪

第１４話：『最弱』なんですよね？（後書き）

なんか船の二の舞のよーな

途中錯乱しかけたのはずーっと痛みの無い人生を送ってたのに急にでっかいのがキタからっていう感じで

７ネタ　かな

第１５話：これがわたしの『第２の爆弾』…ですかね（前書き）

前話時点で
▼小説文字数　／　読了時間
７５，０００文字　／　１５０分

キリ良すぎてなんとかかんとか

第１５話：これがわたしの『第２の爆弾』…ですかね

「しかしたまげたなこの国はァ～！　どの家も　この家も全部豪邸だらけじゃあねーか
　花が咲きみだれ　一軒としてみすぼらしい家はねーぜ」

「うむ　東京なら３０億４０億はしそうな家ばかりだ
　これが　この国の普通の人々のくらしぶりらしい……　ほんの２０年前までは砂漠だったのが　石油（オイル）ショックによる莫大な利益のせいで夢のような都市に成長したのだ」

はい、カラチからそれなりにトンでアラブ首長国連邦にやってまいりましたわたしエンと奇妙な仲間たちです。

しかし何故東京なのかジョセフさん。あなたニューヨーク住みでしょーに、そっちのが普通引き合いに出しそうなんですけどー。
まぁ、どうでもいいですけど。
そいで、花京院は後ろが気になる様子。
それにしてもでっかい町ですねぇ。

「どうした花京院　まだ誰かに尾けられているのか？」

「い…いや　こんなに見はらしのいい場所だ……　追手がついていればわかるのだが　つい……　誰かに見られているような気分がしてふり返ってしまう」

「ああ　無理もないぜ　おれだってそーさ　いろんなスタンド使いが次々といきなり襲ってくるもんでビクビクになっちまってる……」

「うむ　それでじゃ　考えたんだが　これからのルートだが　ここから北西へ１００ｋｍのところにヤプリーンという村がある
砂漠と岩山があるので　道路がぐるっとまわり込んでいる　車だと2日はかかってしまうらしい
だから村の住人はセスナ機で移動しているということだ
まずこの村へ行き　セスナを買ってサウジアラビアの砂漠を横断しようと思う
今まではスタンド使いによる攻撃のせいで墜落し　他の人々を犠牲にしたくなかったので飛行機にはのらなかったが　セスナならわしも操縦できるし　旅行日程の短縮にもなる」

「生涯に3度も飛行機で落ちた男といっしょにセスナなんかあまり乗りたかねーな」

もしかすると、ジョセフさん…あるいはジョースター家の人間が乗ったモノは悉く壊れたりする『運命』でもあるんでしょうか？
この世界は『運命』の概念の力が強いっぽいみたいですし。
この車は結局大丈夫みたいですけどね。

「……
さっ…　それでじゃ　その前にこの砂漠をラクダで横断してヤプリーンの村へ入ろうと思う　ラクダだと一日でつく」

「ラクダ！？　おい　セスナはいいがちょっと待ってくれ！　ラクダなんか乗ったことねーぞ」

「フッフッフッフッ
まかせろ　フッフッフッ　わしは　よく知ってる　教えてやるよ
リラックスした気分で安心しておれ」

「知ってる」だけ、ですよね？

んで、ジョセフさんの見栄っぽい…ってか見栄ですか。な感じの講釈とかもあったりして、皆さんなんとか乗れました。

わたし？　乗りませんよ。

サンドバギーがあればそれでいいと思うんですよ。
まぁ、無いですけど。

皆さんにも聞かれましたけど、無駄遣いは良くないですから。
わたしは浮いて往くことにしますよ、フロートシステムで。

「おかしい　やはりどうも　誰かに見られている気がしてならない
……

花京院　少し神経質すぎや　しないか？

ヤシの葉で足跡は消しているし　数十キロ先まで見わたせるんだぜ
誰か　いりゃあわかる……」

「いや…実はおれもさっきからその気配を感じてしょうがない……
……」

「承太郎　しらべてみてくれ」

承太郎君がスタープラチナと双眼鏡で周りを見渡しますが、なにも見つからないみたいです。

「どこかに不審なものでも……？」

「いや…見えない　何もない…
しかし…なにか妙だ　なにか……が」

でも違和感はあるみたい。

「おい　行こうぜ　陽がくれたらテントをはろう」

ポルポル君が水を飲みながら言います。

「それにしても暑いぜ　見ろよ気温が５０℃もあるぜ」

その気温計がコンパクトにしか見えないんですけどー。
ちなみにわたしは全然暑くないです。クーラー装備してますからね。
勿論、外見だとわかりませんよ？

「今の時間がいちばん暑い時間じゃ」

言いつつ時計チェックのジョセフさん。

「（８時……え？）
承太郎！　おまえの時計　いま何時だ？」

「８時１０……　！？」

「う…うっかりしていたが　ど……どういうことだ！　午後８時をすぎているというのに！　なぜ太陽が沈まないッ！」

皆さんやっとこ気付きましたか。

「ばっ　ばかなッ！　温度計がいきなり６０℃にあがったぞ！
し……沈まないどころか！！　太陽がッ　西からグングンのぼってきているぞッ！」
「ま…まさか　あの太陽がッ！」
「スタンド！！」

「な…なんてこったッ！　ここは砂漠のど真ん中だっつーのにッ！
あの「太陽」がスタンドだとォーッ！！」

無い岩陰に無理矢理体を入れるようにする一行。
そんな皆さんのためにわたしは強度が大して無い簡単な日よけを造ってあげます。
それでも暑いのには変わりませんけどね、熱は遮ってないですから。
皆さん汗だくで大変そうですねぇ～。

「このまま一日中……いや…一晩中だったな……

おれたちを蒸し照らしてゆでダコ殺しにする作戦か……あのスタンドはッ！」

「いや……そんなに時間はいらない
サウナ風呂でも３０分以上入るのは……　危険とされている」
ラクダ達もだいぶ辛そうですね。

「どうやって闘うッ！　くそったれの気温が７０℃に上がったぞッ！
それにあの太陽のスタンド　遠いのか近いのかもわからねーぜ
距離感がまったくねーッ」

「てっとり早いのは！　……本体をブチのめすことだな」

「うむ……本体か……
どこか近くにいるはずだ……探すのだ……敵は何らかの方法で我々に気づかれないように潜んで　尾行してきていたのだ……」

「ちょっと待て！！　パキスタンで出会った「恋人（ラバーズ）」のように　遠くから操作できるやつかもしれなかったらどーする！？」
「それは考えられん！　力の弱いスタンドなら遠隔操作できる……
……
しかしこの「太陽」のエネルギーは今…体験しているとおり！
本体は絶対ちかくにいるはずッ！」

ちょっ、サソリが風化？　バラバラに消えちゃいましたよ。
ラクダも限界きたっぽいですし。

「やばいぜ…　暑さでラクダが倒れ始めた……」
「じっとしていてもしょうがないッ！　ぼくの「法皇（ハイエロファント）」でさぐりを

入れてみるッ！」
「花京院ッ！」「敵「スタンド」の位置をみるだけです　どの程度の距離にいるのかわかれば……　本体がどこにいるかわかるかもしれないッ！」
法皇がいろいろ変な動きをしながら昇っていきます。
「２０ｍ！　４０ｍ！　６０ｍ！　８０ｍ！　１００…　！！」
とまでいったところで太陽の活動が活発化してきました。
「……！　なにかやばい！　花京院「法皇」を戻せ！」
「なにか仕かけてくるぞッ！」
「その前にエメラルド…　うげッ」
「うおお！」
「花京院ッ！」
「光線のエネルギーだッ！　レーザーのようなッ！」
太陽からマキシマム・レイ・スプラッシュが放たれて日よけやらラクダもろとも辺りを撃ち抜いてきます。
わたしは地面引っ張って強化して盾代わりにしましたし、ポルポル君も飛んで来たやつを「うおおおおお　野郎ッ！」とか言いながらチャリオッツで全部弾いてました。
「おらあ！
　スタープラチナが地面に穴をあけるから中へ逃げ込めッ！」
承太郎君がボッ　ゴォォォン　と地面をぶち抜いて洞穴を作ったの

でみんなして中に避難しました。
しかし砂漠の真ん中で丁度岩地でよかったですねぇ、いやホント。

「だいじょうぶか花京院……」

「ええ……エメラルドスプラッシュを半分出しかけていたので　それがガードになって軽傷ですみました　ハァハァ……
し…しかし…それより暑い…頭がどうにかなりそうだ」

んー、仕っ方ないですねぇー。
「そんなに暑いんならわたしがクーラー設置したげますよ」
って断り入れて一番奥に造ってあげます。「これで穴の中は涼しくなるでしょう」

「おお…　ありがたいな」

「おまえ　なんでもありだな　エン」

「褒め言葉として受け取っときます。伊達に『変幻能力（バリアブルズ）』やってませんよ」

「しかし今の攻撃　おそるばき命中度　やはり敵はどこからかこっちをみているぜ！　どこだ！　どこなんだ敵はッ！」

ここで暫くの膠着状態。この間にとりあえず壊された水筒の代わりを造ったり水を皆さんにあげたりしながらわたしは普通にしてます。
んでジョセフさんが双眼鏡で外を見ようとしますがレーザーで双眼

鏡を撃ち抜かれました。

「Ｓｏｎ　ｏＦ　Ａ　ＢＩＴＣＨ！　どこにいやがるッ！　どーやって　こっちを見てやがるんだッ！　透明人間かッ！　敵本体はッ！」

そしたらやっと気付いた花京院の狂ったような笑いが。

「ウッ　クックックックックッ　クックッ　フヒヒヒ　フッフッフッ　ホハハハフフフフヘハハハハフホホアハハハ」

「おい花京院…どうした」

「ハハハハフフフ　フハハッ　クックックッ　ヒヒヒヒヒケケケケケ　ノォホホノォホ　ヘラヘラヘラヘラ　アヘ　アヘ　アヘ」

「か……花京院　なにを笑ってるんだ　おい花京院　気をしっかりもて

だ…だいじょうぶか！　花京院！？」

「ウヒヒヒ　ウハハハハハハハハハ」

「じょ…承太郎！？　お…おまえもッ！」

「フハハハハハハハハハハ　クックックックッ」

「プッ　ウヒヒヒヒヒヒヒヒヒ！！　ハハハハハハハハハハーッ！！」

「ポ　ポルナレフッ　おまえまでッ！」

こっ…これはっ…端から見たらアレですがっ…ふふっ…知っている身としてはッ…わたしもっ…

「ひゅふッ

うふ、うふ、うふふふふ……ふふふ……
ヒュフフフフ　キヒシシフヒヒ　クフフフフ」

「エ　エン……」

もはやッ…ドン引きのっ、ジョセフさんには悪っ、いですが…可笑しくて可笑しくッて…クフフッ

「「「ワハハハヒヒヒヒウフフ」」」
「ゾォ～
ＯＨ　ＭＹ　ＧＯＤ！　つ…ついにみんな暑さのせいでおつむがやられちまったか…わ…わしだけか！　冷静なのはッ
おい！　承太郎冷静になるんじゃッ！！　気をしっかりもてッ！
こんな苦しい時こそ冷静に対処すれば　必ず勝機は　つかめるはずじゃッ！」

フフッ…ふぅ。
やっとこ落ち着きました。
さて、準備準備っと。

「ウクハハハハハ
勘ちがいしないでくださいジョースターさん　あそこの岩を見てください　人が　かくれるほど大きくありませんか？」
「……
？　なんのことだ？」

「こんどは反対側にあるあそこの岩をも見てください」

「？」

「まだ気が　つきませんか？
　反対側にあの岩とまったく同じ対称の形をした岩がある　影も逆についている　ということは……」

「ウヒヒヒヒヒハハハハ　アホらしい」

ネタばらしが終わったところでスタープラチナが石を掴み、投げようとしますがそうはさせません。

「ちょっとＪＯＪＯ！　ここはわたしにやらせてもらえませんかね？」

傍らに浮かべたモノを指しながら物申します。

「？　なんだそれは」

「これはわたしの能力のひとつ、『キラージャック』第２の爆弾、『シアーハートカミカゼばーじょん空中（エアロ）』です」「ギギギ…Ｈｘａｈｗ」

全体的に丸っこい砲身の無い戦車で前面にドクロな顔の付いたって感じの形状なシアーさん。
エアロｖｅｒ．はそのキャタピラが無く、代わりに長八角形でところどころが黄緑色に光る装置が付いています。
作り込んでないからろくすっぽ喋れないですけどね。

「それをどうするんじゃ？」

いろいろとやっと追い付いたジョセフさん。そんなもの決まってるでしょーに。

「勿論、こうします」

シアーさんを持って、外見年齢相応、普通の人間レベルの力で目標に向けて飛ばします。

シアーさんは普通に飛んでいき、途中から文字通り爆発的な推進力を得て「Ｈｙａァ！　ッｈａａａａａａａ！！」目標にまっすぐ突っ込んで逝き「ドギャス！」「あっ！？　空間に穴があいたぞッ」

「やれやれ　情けねーじじいだ　てめー暑さのせいで注意力がにぶったことにしてやるぜ
　とても血のつながりがある　おれの祖父とは思えねーな」

ドッ　グォォォォォン！　と　だいばくはつ　しちゃいました。

「なッ！？」

とは、誰が発した言葉でしたか。

「あはっ。　さっすがシアーさん、素晴らしい威力ですよっ。
あぁ、でもゼンブ　バラけちゃいましたねェ。
　っと、それはともかく、「太陽」のスタンド使いの始末完了ですよ。
　さ、次の目的地へ行きましょ。砂漠の夜は冷えますよ？　防寒対策はできますかー？」

わたしはもちろんクーラー消して軽い暖房器具に取っ替えてますけどねー。

第１６話：夢の世界に行かなくてもいいですよね？

あの「太陽」を片付けて、なんとか昨日のうちにヤプリーン村にたどり着き、宿をとりました。

寝る前にジョセフさんは飛行機を手配するために村の人にお金を渡してました。

そいで今は一夜明けて朝です。
まだポルポル君と花京院は出てきてないですね、「死神」のスタンド攻撃を受けてるんでしょう。

「ワーン　ぼくの犬が　ぼくの犬がッ！
なんでこんなことに～～～～！？　誰がこんなことを！
ぼくの犬が死んでしまっている――ッ！！」

あ、出てきたみたいですね。

あの犬は治してもいいんですが、この世界は死にきったら蘇生不可ですからねぇ。
きれいな死体にまでしかできないんです。
まぁ、どうでもいいですけど。

「おいおいおいおいおいおいおいおい
ちょいと待ってくれ！　おっさあああん
今さら飛行機を売れんとはどーいうことだ――――！？

きのうの夜は飛行機を売ってくれるとカネを受け取ったじゃあないか……！　いいか　カネを受け取ったということは売ってということだ
つまり！　我々のものになったという事だ！　これ世界の常識だぞッ」

「おカネは返すよ
実は赤んぼうが病気になったね　熱が39度もある
この村に医者がいないので　医者のいる町まで連れてかねばならなくなったね」

「え！」

あー、マニッシュ・ボーイ来ましたね。
マライアがどーとかいう説があったり、ファッツがここまで連れて来たんじゃあないかって説があったり。
別になんでもいいですけど。

「そ…それじゃあ　むこうの飛行機はだめなのか？」

「あれ故障中ね…　ほかに村には2機あるけど　今　出はらっていて2日しないと戻ってこないね
いいですかい？　この飛行機は医者のところに行って戻るのはあすの夕方だね　そのあとにしてもらうね」

「あすの夕方？　わしらにも人の命にかかわる理由（わけ）がある！　この村に2日も足止めをくらうわけにはいかんッ！」
「どんな理由（わけ）か知らんが　このオレにおたくたちに飛行機を売って

あの赤ちゃんを見殺しにしろというのかね？」
「う　うう……それは……」

「あの　こう「ちょいと待ってくれますか？　わたしがあっちの飛行機を直して使えばどっちも今日中に行けますよね」

マニッシュ・ボーイの入った籠持った新婚奥さんの言葉を遮って提案してみます。

「そりゃあ　あれも使えりゃ話は早いがね　あんたできるのかね？」

「ええ、大丈夫です、問題ありません。（まぁ最悪、魔改造すればいいんですしね。ってか魔改造します、四人乗りだといけませんし）」

持ち主さんが訊いてきたので返事して、故障してるほうに近づき、触れて解析してみます。

ついでにもう一つの方も診てだいたいどの辺が悪いか比較し、故障箇所を修復。
さらにところどころ弄って全体的にスペック上げてみました。
所要時間は五分くらいですかね？

「……さてと、これで大丈夫っと。終わりました！　わたしたちはこっちを使いましょう！」

ちっと離れてるから声を少し張って報告。

なんか花京院が赤んぼに泣かれてるみたいです。

そっちにかけって行って、ポケットから金属のようなモノを出し、

「そうだ、これをあげます。お守りみたいなモノですよ。どれ、わたしが着けてあげましょう。」

赤んぼの手首に着けます。

そして赤んぼに顔を近づけて

「どうも、「死神」のスタンド使いさん。一つお願いがありまして、わたしたちに関わることなくこのまま向こうの飛行機でサヨナラしてくれませんかね？

いやね、たった今手首に金属的なモノを着けたじゃあないですか。もしわたしたちにスタンド攻撃を仕掛けようものなら、これの仕掛けが発動して貴方の息の根を止めちゃうんですよね。

無論、無理矢理外そうとしてもダメですよ～？

その代わり、だいたい５０日くらいしたら多分かってに消滅すると思いますから安心してくださいな。ふふっ、では」

彼だけに聞こえるようにモノのホントの意味を教えてあげます。

「それじゃあ出発しましょうか皆さん。安心するがいいですよＪＯＪＯ、あれはわたしが改造しましたからちょっとやそっとじゃあ墜ちません」

「ああ　それはいいが…さっきは何をしていたんだ？」

「あや、気にすることは無いですよ～」

さて、ではでは、れっつら砂漠越えですよっ！

第１６話：夢の世界に行かなくてもいいですよね？（後書き）

初めての回避ですね。

執筆時間の大幅短縮に貢献しました。

ちなみに原作どおり連れてくパターンを当初考えてました。

そしたらエンはずっと起きてる√と初期の夢で仕留める（一応一体化型だから夢の世界でも普通に使える）√の二つが発生したり。

でも執筆時間が長くなるからボツにしました！　（ヤッホイ

たぶん１ネタ

第17話：そもそもやる気ないんですよね

あれから特に何も無く、普通に飛んでサウジアラビアの紅海端まで来て、そこでボートを調達して紅海横断ときてます。

…絶対墜とすと思ったから生体接続して操作できるようにまでしたのに無駄になったとか言いません。ええ言いませんとも。
勿論、手放す前にある程度元に戻しときました。

まぁそれはそれとして「おい　じじい……おかしいな　方角が違ってるぜ……
まっすぐ西へ──エジプトへ向かってるんじゃあないのか？
あの島へ向かっているようだがッ！」……とまあ、そんな感じですね。

「ああ…そのとおりだ
理由（ワケ）あって今まで黙っていたが　エジプトへ入る前にある人物に会うためにほんの少し寄り道をする……
この旅にとってものすごく大切な男なんだ…」

「「大切な男」　あのちっぽけな島に住んでいるのか？」

足の調達係として、ですかね？

上陸～

「ジョースターさん……　ほんとに人が住んでいるのですか…？」

なんか小さい島だし　無人島のように思えますが…」

「たったひとりで住んでいる
インドで「彼」はわたしにそう教えてくれた」

「え？　誰ですって！？　「彼」ってだれですか？」

「なに？　インドでカレー？」

ポルポル君……

そして今話では白々しい芝居が暫く続くんですよね。
わたしは空気に徹することにしてますけど。

「おいおい　そこの草陰から誰かがおれたちを見てるぜ」

「え？

あっ　逃げるぞッ！」

「はっ　あ…あのうしろ姿は……見たことがある！」

でも結局、あの家やらは元々あったんでしょうね。だって最近造ったとは思えない劣化具合ですし。

「ホラホラ　ハラがすいたのか！？　マイケルにプリンス
がっつくんじゃあないぞッ！　ちゃんと栄養は考えて好物の貝ガラも入ってるよ！
丸々太っておいしいニワトリになるんだぞ…ライオネル」

「何者なんだッ！」
「あのうしろ姿はッ！　まさかッ　あの男はっ！」
「待て！　わしが話をする　みんなここにいてくれい……

わたしの名はジョセフ・ジョースター　この４人とともにエジプトへの旅をしているものです」
「帰れッ！　話はきかんぞッ！

わ…わしに話しかけるのはやめろッ！　このわしに誰かが会いに来るのは決まって悪い話だッ！　悪い事が起こった時だけだッ！　聞きたくない！」
「あっ！」
「帰れッ！」

「アヴドゥルさんッ！」
「アヴドゥル……」

黒白反転したようなアヴドゥルはとっとと家に入っちゃいました。
どんな顔してるやら。わたしでも内心にやけ顔ですよ。

「「「まっ　まさかッ！」」」

「アヴドゥルの父親だ
世を捨てて孤独にこの島に住んでいる…　今までおまえたちにも黙っていたのは　もし　ここへ立ち寄る事がＤＩＯに知れたらアヴドゥルの父親の平和が乱される可能性がある　その事を考えてのことなのじゃ」

「父親」
「だが…息子のアヴドゥルの死を報告するのは……つらいことだ」

ドッキリみたいなモノですよねぇ、これ。ｔｏポルポル君

「アヴドゥルの死は君のせいじゃあない　ポルナレフ」

「いいや　おれの責任　おれはそれを背負ってるんだ……」

「あの父親もスタンド使いなんですか？」

「ああ　だがどんなスタンドなのか　その正体は知らない」

「あの父親の態度じゃあ協力は期待できそうもないですが……」

「わしひとりにまかせてくれ　父親と話をしてみる」

なんて会話を尻目にポルポル君は他所に行っちゃいました。

展開的には後でアヴドゥルと一緒にそっちに行くってルートもあるんでしょーが、別にどーでもいいし無視です、無視。

暫くしてアヴドゥルがポルポル君追っかけて行きました。
そん時にドッキリのプラカード持たせようと思ったけど、なんて書けばいいかわからなかったのでやめときました。

……待ってる間ヒマなんでシアーさん造ってノーマルを走らせたりエアロを飛ばせたりダイバーを泳がせたりして遊んでます。
これも「スタンド」としての能力の練習みたいなモノですからね、三台並行操作とかって。
砂漠の途中とかでサーモセンサ付きのも造ってみようかな？　日中だとマトモに動かないから夜にね。まぁ、やるからには近所迷惑にならないようにしないと。

「おい！！　みんな驚くなよッ！　誰に出会ったと思うッ！」

とかやってたらポルポル君が帰還したようで。

皆さん貴方の登場に驚いてますけど。

「ポルナレフ！　心配したぞッ！」
「どうしたそのキズは？」
「敵に襲われたのか？」
「土人形にでも喰われたんですか？」

「ってなんで知ってんだよエンッ！　いや　そんなことやキズのことは　どうでもいいんだよッ！　いいか！　たまげるなよ承太郎ッ！　驚いて腰抜かすんじゃあねーぞ花京院ッ！　誰に出会ったと思う！？　ジョースターさんッ！」

テンション高すぎて皆さんついてこれてないですよー？

「なんとッ　喜べ！　パンパカパーｚ―ン　アヴドゥルの野郎が生きてやがったんだよォ！　オロロ～～ン！」

「さ！　出発するぞ」

「みんな　荷物運ぶの手伝うよ」
「ようアヴドゥル」
「アヴドゥル　ひさしぶり　元気？」
「アヴドゥル　もう背中のキズは平気なのか？」

「ああ大丈夫　ちょいとツッぱるがな」

「なんだったらわたしがちょいと身体を弄ってもいいですよ？」

「いや　それは遠慮しておく」

「インドからの旅はどうだった？」

「敵にはまだわたしが生きていることは気づかれてはいないはず」

「おい　ちょいと待ておまえら」

「2週間ぶりか　お互いここまで無事でなによりだったぜ」

「承太郎　あい変わらずこんな服きて暑くないのか　フフフ」

「こら！　待てといっとるんだよッ　てめ――らッ！
おい……どういうことだ？　その態度は！？　死んだヤツが生きていたというのに！　なんなんだ！？　その平然とした日常の会話は？」

んで、今度はポルポル君がついてこれてないと。

「お…ポルナレフ　すまなかったな　インドでわしがアヴドゥルを埋葬したというのは　ありゃウソだ」
「なっなな　なにィ――――ッ」

「インドでわたしの頭と背中のキズを手当てしてくれたのはジョースターさんと承太郎なのだ」

魚みたいな顔で固まるでないっ、とつい思ったわたしはどこも悪いことは無いですね。

「て…てめーら　インドから　すでにアヴドゥルが生きてるってこと知ってやがっておれにだまってやがったのか？
花京院ッ！　てめーもかッ！」

「ポルナレフは口が軽いから敵に知られるとまずい
君にはずっと内緒にしていようと提案したのはこのボクだ……
（翌日だがね）」

「うっかりしゃべられでもしたら　アヴドゥルは安心してキズがなおせないからな」

「信頼されてるんですよ、ポルナレフは。……マイナスベクトルに」

「そ…そうだ！　アヴドゥル！　おまえのおやじさんがこの島にいる！　おまえが来たことを知らせよう」
「ありゃおれの変装だ」

コント並みに滑りコケたポルポル君、とことんギャグ担当ですよね

ー。

「に…にゃにお～～んッ！
そこまでやるか…よくもぬけぬけとテメーら　仲間はずれにしやがって　グスン」

「すまんポルナレフ
変装してこの島に来たのには理由がある」

「敵にバレないためもあるが　ある買物をしてもらっていたのだよ」

「とてもめだつ買物でな　アラブの大金持ちを装って買って来たのよ」

「ある買物？」

「さあみんな！　それに乗って出発するぞ――――ッ！」

という訳で、島の反対側に来てみれば、何故か黒白縞の　潜水艦がありましたとさ。
一応金持ちでしたよねぇ確か、ジョースター家。

「うおおおおお――――！！
せ…潜水艦　ここまで買う？」

「これで紅海を渡るのか」

「追手から姿を消せるかもしれないが」

「ずいぶん金のかかる旅行だな…この旅はッ！
アヴドゥル　操縦できるのか？」

「わしもできるよ　わしも！」
「貴方は機械に触らないで下さい。ただでさえすぐ壊れてしまうのに貴方が触ると寿命が尽きるのが加速してしまいます」
「」
アヴドゥルはともかく、潜水艦は既にバレてるっぽいですしねー

第17話：そもそももやる気ないんですよね（後書き）

シアー三はちゃんとないないしときました。

1ネタ？

第18話：扱いをどうしましょうかね？

「1　2　3　4　5
ん　カップが5つしかないぞ」
「おい！　早くコーヒー入れてくれ！　のみて――よぉー」
「自分で入れろ自分で！」

「あ、わたし無くていいですよ。なんだったら自分で出せますんで」
潜水艦で紅海を北上中、その艦内での一幕。
既に『女教皇』が潜入していると思われるが、全員気付いてはいない。

「ン！
おい！　アフリカ大陸の海岸がみえたぞ　到着するぞッ！

ここの珊瑚礁のそばに　自然の侵食でできた海底トンネルがあって　内陸２００メートルのところに出口がある　そこから上陸しよう」

潜望鏡で外を見たアヴドゥルが岸を視界に入れ、地図で上陸場所の確認をする。

「いよいよエジプトだな」

「ああ　いよいよだな」

「エジプトか……」

「……」

「ああ　いよいよだ」

「（たしかジョセフさんのカップが『女教皇』でしたっけ）」

一人だけズレているが気にすることでもないな。

そしてコーヒーブレイクとすることにした一行。遠音は彼等から少し離れた位置で音楽を自分で再現したｉＰｏｄで聴いている。因みに今の曲名は「Ｉｎｎｏｃｅｎｃｅ」。

「おい…花京院　なぜカップを６つ出す？　５人だぞ」

「おかしいな　うっかりしていたよ　５コのつもりだったが…」

その時、突然ジョセフの持ったカップが変化し、鋭い爪の生えた腕を持ったナニかとなって彼の左手首を切り裂いた。

「「「「なっ」」」」

「なにイイッ！」

そしてさらに義手の左手の指が切れ飛び、「ぐっ」　ジョセフの首元に二つほど刺さる。

「じ…じじいッ！」

「うおお……」

「バカなッ！　スタンドだッ！　いつの間にか艦の中にスタンドがいるぞッ！！」
「ジョースターさん！」
「オラアッ！」
「ブキャアアーッ！」

その天井付近に移動したナニか…スタンドに承太郎がスタープラチナで殴りかかるが、素早く退いたそれはすぐに見えなくなった。

「き…消えたッ！」
「いやちがうッ！」
「化けたのだッ！
この計器のひとつに化けたのだッ！　コーヒーカップに化けたのと同じようにッ！」
「ジョースターさんッ！」

「もうサンゴ礁だ　あと数百メートルでエジプト上陸だっていうのによッ！」

「ジョースターさん…　傷はあさいが気を失っている
義手でよかった」

「義手ならわたしがすぐに造れますけど…後にしたほうがいいでしょうかね」

「「女教皇（ハイプリエステス）」だ　敵は「女教皇」の暗示をもつスタンドだ」

「知っているのか」

「聞いたことがある……スタンド使いの名はミドラーというやつ……　かなり　遠隔からでも操れる「スタンド」だから本体は海上だろう…

能力は金属やガラスなどの鉱物なら何にでも化けられる…　プラスティックやビニールはもちろんだ

触ってもたたいても　攻撃してくるまで見分ける方法はないという…」

「し…しかし　どこから　この潜水艦にもぐり込んで来たんだ?」

ポルナレフがそう言った時、部屋の一部から水が噴き出して来た。

「こ……

なるほど　こーゆーこと?

単純ね……穴を　あけて入ってきたのね?」

「浮上システムを壊していきやがった　どんどん沈んでいくぞ!」

「いつの間にか酸素もほとんどない　航行不可能だ!」

「（わたしは酸素無くても活動できるんですよねぇ。まぁ、今言うことじゃないから言わないですけど）」

「つかまれッ!　海底に激突するぞッ!」

激突、沈没、御臨終。

「やっぱりこーなるのか　おれたちの乗る乗り物って　かならず大破するのね」

実はそこまででも無いんだがな。

「花京院…「スタンド」のやつ　どの計器に化けたか目撃したか？」

「た…たしか　この計器に化けたように見えたが…」

花京院の指差した計器を、承太郎はスタープラチナでいつでも叩けるように狙う。

しかし、花京院の背後の装置が変化し、さきのスタンドが現れてくる。

「ちがうッ！　承太郎ッ！　もう移動しているッ！　花京院のうしろにいるぞッ！」

承太郎が振り返るが、彼がいくら速くても間に合いそうにない。
そしてそのスタンドが花京院に襲いかかろうとした時、下から太い鉄棒が飛び出してそれを打ちすえた。
「ムッギィーッ！　ブッショアアアアアア！」
が、スタンドはすぐにそこから同化、姿を消した。

「みんな　ドアの方へ寄れ！　い…いつの間にか　機械の表面を化けながら移動しているんだッ！
この部屋にいると全員　どんどんケガをしてダメージをうけるぞッ！
みんな　となりの部屋へ行くんだッ！　密室にして閉じ込めるんだ！」

アヴドゥルがそう言いながら隣の部屋に続く扉を閉めようとハンド

ルを握るが、

「ば！」

「ブッギィイイイイイ～～～！」

「ば…ばかな

す　すでに移動して　ドアの取っ手に化けてやが…

（手…手をはなさなくてはッ　こいつの爪はジョースターさんの義手をも切断するッ！）

なにイィ！」

そのハンドルは既に変化した「女教皇」だった。

そしてそれがアヴドゥルを切り裂こうと腕を振り上げるが、それをスタープラチナが捕らえた。

「ゲッ！

アギャース！」

「やったッ！　捕まえたぞッ！」

「あ…あぶなかった……」

「スタープラチナより素早く動くわけにはいかなかったようだなこいつをどうする？」

「承太郎！　ちゅうちょするんじゃあねーッ　情無用！　早く首をひきちぎるんだ　早く！」

「アイアイ　サー」

捕らえたそれを捻りつぶそうとしたが、

「！　うぐぅ！」

「ケケケ」

「ヤ・ヤロー　カミソリに化けやがった！」

剃刀に化けることでスタープラチナから逃れ、天井に張り付いた。

「きゃはははははは！」

「ば…ばかなッ！　こいつ！　強い……」

「承太郎に一ぱい　くわせるなんて……なんて敵だ」

「ヒヒャホホフハホハホハホハハハハ」

「かまうな承太郎ッ！　また化けはじめるぞッ！
浸水しているし　とにかく　ヤツを閉じ込めるんだッ！　闘う作戦はそれからだ！」

「ムキャキャイイイイイ　ハハハハハ！」

「てめーはこの空条承太郎がじきじきにブチのめす」

そう捨て台詞を吐き、隣の部屋へ、次の部屋へと逃げた。

「これからどうする！　ヤツか　われわれか…閉じこめられたのがどちらかわからんが…いずれ遅かれ早かれ　あの部屋から何かに穴をあけて　ここまで来るぞッ！」

「この機械だらけの密室の中では圧倒的に我々の不利！　この潜水艦はもうだめだ
捨てて脱出するのだ　とにかくエジプトに上陸するのだ！」

「正直、わたしの能力と向こうの能力の相性も悪いですから、ここで始末することはかなり難しいです。たしかに陸に往くしかないですね」

「しかしここは海底４０メートル　そんなに深くはないが　どうやって海上へ！？」

で、用意されたのはスキューバセット。

「今度はスキューバダイビングかよ　おれ　経験ないんだよね　これ……」

「やれやれ」

「わたしは装備無くても問題ないんですよねぇ、「暗青の月」の時もやりましたけど。

話は変わって、ちょっと「あるダイバーの最期」っていう映像を思い出しました。ダイビング繋がりで」

「おい　不吉なこというなよ……」

「義手を切断してるから装備をつけるのがしんどいわい」

「あ、それでしたら、わたしが造りなおしてあげますよ。急ぎですからそこまで性能はよくできませんが。

まぁ、一段落したらちゃんとしたモノにしたげます」

「おぉ　ありがたい」

義手を失って不自由しているジョセフを見かねた遠音が義手を造りなおして彼の左手先に取り付ける。

必要最低限の動きが出来る程度の簡単な作りだったが、無いよりはマシになったようだ。

「さて　この中でスキューバ・ダイビングの経験のある者は？」

「ない」「ない」「ありません」

「となりの部屋から「女教皇」が襲ってくる！　早く潜り方を教えてくださいッ！」

「あわてるなアヴドゥル
いいかみんな　ます決してあわてない　これがスキューバの最大注意だ
水の中というのは　水面下１０ｍごとに一気圧ずつ水の重さが加圧されてくる…
海上が一気圧…ここは　海底４０ｍだから五気圧の圧力がかかっている
いっきに浮上したら　肺や血管が膨張破裂する
体をならしながら　ゆっくりあがるのだ……　エジプト沿岸が近いから　海底に沿って　あがっていこう
水を入れて加圧するぞ

これがレギュレーターだ　中が「弁」になっていて　息を吸った時だけタンクの空気がくるしくみになっている　吐いた息はこの左の所から出ていく」

ジョセフのダイビング講習。こいつはなかなかに多芸だと思う。

「それと当然のことながら水中ではしゃべれない…
ハンドシグナルで話す……簡単に２つだけおぼえろ」

親指と人差し指で輪を作るＯＫサインをして、
「「大丈夫」のときはこれを出す　ＯＫだ……」
次に手を地面に対して水平にして横に振り、
「やばいときはこうだ…」
簡単な合図だけを決めた。
「我々なら「スタンド」で話をすれば？」
「それもそうだな……！」
「なあ～んだ　ハンドシグナルならおれもひとつ知ってるのによ…
…」
ポルナレフはそう言い、
手をパンと合わせ
指で２を表し
ＯＫサインをして
手で陽射しから眼を庇うような風にする横で花京院がそれを読み
「パン　ツー　まる　見え」
「ＹＥＡＡＡＨ！」

ピシ　ガシ　グッ　グッ

要するにアホなことをやっとる。

「襲われて死にそーだっていいのにくだらんことやっとらんで行くぞッ！」

そして室に水が満たされ、全員がＯＫサインをだす。

が、ポルナレフがやばい時のサインを出しながらバタバタしている。

口元を見ると、レギュレーターが女教皇になって口の中に入ろうとしていた。

〔ポッ　ポルナレフッ！〕

〔い…いつの間にッ！？　や…やつが　すでにレギュレーターに化けていたッ！〕

〔口の中から入って　体内をくいやぶる気だ……

やばいぜ　この部屋を排水しろッ！〕

〔もう遅いッ！　やつめ！　この時をねらっていたのか！！〕

〔オラア！〕

承太郎がスタープラチナで捕まえようとするも、間に合わず体内へと侵入された。

〔しっ　しまったッ！〕

〔ポルナレフの体内へ入っていったぞッ！　くっ　くいやぶられる

ぞッ！
　ど…どうするッ！」

「隠者の紫ッ！」「法皇の緑！」
それを捕まえようと、ジョセフと花京院がなぜか鼻から触手を突っ込んだ。

「オガゴゴ　はっ　お…おい！　オゲッ」

「のどの奥に行く前につかまえたぞッ！　花京院！」
「ボクもですッ！　変身する前に吐き出させるのだッ！」
「オガーッ！」

そして、口から女教皇を引きずり出す。

「やったッ！」
「いや　倒したわけではないッ！　別の物に変身するぞ！」

「水中銃に変身したッ！　早く脱出しろッ！」

変身した水中銃から銛が発射されたが、

「〝シールド展開〟」

遠音の出した円形の盾のような緑色の半透明なモノに弾かれた。
その隙に扉を閉め、潜水艦の外へと脱出した。

「だ…だいじょうぶだ　ＯＫ…助かったぜ　ありがとうよ（メルシー・ボークー）」

脱出してすぐに遠音が一行から離れていったが、気付いた者は居なかった。

そして一行は海底付近を泳ぎながら陸を目指す。

〔なんて美しい海底だ……ただの　レジャーで来たかったもんだぜ…〕

〔追ってくるか？〕

〔いや見えない！　「女教皇」は金属やガラスなどに化けるスタンド　魚や海水や水泡には化けられない〕

〔後ろに注意して泳ぐのだ　追ってくるとしたならスクリューのあるものかなにかに化けて追ってくるはず　動く石ころや岩にも注意するのだ〕

遠音がいたなら海底にも注意すべきだと言ったかもしれないが、いないのでどうというものでもない。

〔深度7メートル〕

〔ついにエジプトの海岸だぞ！
この岩づたいに泳いで　上陸　するのだ〕

そして、何事もなくエジプトの南東端の海岸から上陸。

浜には倒れている女と、遠音がいた。

「お　エンだ　いつの間に先に行ってたんだ？」
「おい　女が倒れているぞ」
「「女教皇」の本体のミドラーだ」

「やーやー皆さん。ミドラーさんはわたしが意識を刈り取っておきましたよ、ちょいと体機能弄って」

「しかしついにエジプトへ上陸したな」

「ジェットなら２０時間で来る所を…３０日もかかったのか」

「（脳の中も夢の中も通らなかったですねー）」

「そだ、ジョセフさん、義手を調整したいんでちょっと手を出してくださいな」

と言ってジョセフの義手に触った遠音。
暫くそのままでブツブツ言っていたが、作業完了したらしく手を離した。

「これで大丈夫ですね。普通の手と遜色ない動きを可能とし、軽くて丈夫、さらに最終手段として指先から弾が出るようにしてみました。一応太陽光をエネルギー源としてますから弾切れの心配もありませんよ」

余計なことやってんじゃあないぞ遠音…
しかもそれなんてエックスバスター
確実にチャージショット撃てるだろ

第１８話：扱いをどうしましょうかね？（後書き）

タイトル→ミドラーさん

３ねたカナ？

第１９話：そういえば水にも干渉できるんですよね（前書き）

でも能力でヤッちゃうヴィジョンが見えないよ

第１９話：そういえば水にも干渉できるんですよね

「なっ！　なんだっ！　こいつは！？」
「来たな」

上陸してからほぼ国境沿いに進み、只今砂漠前の荒野ってな感じのとこにいます。

「ヘリコプターだッ！」
「言わなくても見りゃあわかる」

「スピードワゴン財団のヘリだ…降りれる場所を探している」

「あ、ちょっと場所を作ってきますね」

皆さんからちょっと離れたとこまで行って、地面に手をつきます。
能力の届く最大範囲をコンクリート製の地面に造り”直す”イメージで

「”パネルリターン”」

ピ――――、ガチョン…みたいなね。
中心にはちゃんと黒でＨを書いときました。
んですぐにそっから離れて皆さんのとこに戻ります。

「それじゃあなぜ　あのヘリがやって来たのですか？」

「「助っ人」を連れて来てくれたのだ」

「なんだって！？　「助っ人」！？」

「ちと性格に問題があってな　今まで連れて来るのに時間がかかった」

「ジョースターさん　あいつがこの旅行に同行するのは不可能です！　とても助っ人なんて無理です」

「知ってるのかアヴドゥル？」

「ああ　よおくな」

「ちょっと待て　「助っ人」ってことは　当然スタンド使いってことか？」

「「愚者（ザ・フール）」の暗示をもつスタンド使いだ」

「「愚者」ゥ　ウフ　へへ　なにか頭の悪そうなカードだな」

「敵でなくてよかったって思うぞ　おまえには勝てん」

「なんだとこの野郎口に気をつけろ　えらそーにしやがって」

「本当のことだ　なんだこの手は？　いたいぞ」

「もうやめないか　ヘリが　着陸したぞ！」

ってかいつまでたってもポルポル君の慢心は無くなりませんね。
それで何回も危ない目に遭ったってーのに。

とか思ってたらヘリポート（仮設）に着地して中から二人イッパンさんが降りてきました。
無駄につよげな顔ですけど所詮イッパンはイッパンですしただの使い捨てモブですし。

「Ｍｒ．ジョースター　ご無事で……」

「わざわざありがとう　感謝する」

「どっちの男だ？　スタンド使いは？」

「どっちでもないですよＪＯＪＯ。ですよね？」

「はい我々ではありません　うしろの座席にいます」

「！？」

と言われて見ても、後部座席にはただ布？　がくるめて置いてあるだけに見えます。
まぁ、ヒトって先入観があったらですけど。

「うしろの座席　いないようだが……」

「いや　います」

「？」

「おいおいいるってどこによッ！　とてつもなくチビな野郎か！？
　でてこいやコラァ！」
「あ　危ない！！」

「なんだ？　このベトベトは？」

ポルポル君が近づいて座席バンバンしながら文句タラタラ。んでその時にガムの食べ滓？　に触ってしまって指先ベトベト。

「気をつけてくださいッ！　ヘリがゆれたんでゴギゲンななめなんですッ！」
「近づくなッ！　性格に問題があるといったろ――ッ！」
「ポルナレフ　おまえには勝てん」

「お　おおおお

思いでつかまえたのだ」

「グアアアーッ！」ブヂブヂブヂブヂブヂ

イギーがポルポル君に飛び掛かり、顔に貼り付いて髪を噛み抜いてます。

「ああそうだ　思い出した
髪の毛をむしるとき　人間の顔の前で「へ」をするのが趣味の下品なヤツだった」

プ…とポルポル君ご愁傷様です。

「このド畜生ッ！　こらしめてやるッ！　おどりゃあ――――っ　「戦車（チャリオッツ）」！」

キレたポルポル君、顔からイギーひっぺがして投げてチャリオッツ召喚。その際イギーは危なげなく着地してます。

そしてチャリオッツを見たイギーも自らのスタンド「愚者」を召喚。背後の砂が盛り上がり、カタチを成しました。

「こ……これはッ！」

「これが「愚者」か……」

「シンガポール沖でオランウータンのスタンド使いに出会ったが……」

「てめえ本当にブッた切るぞッ！」

宣言通りポルポル君がチャリオッツで切りかかるも、「愚者」は自ら真ん中から真っ二つになりかわし、

「ゲッ！　す…砂のようになって！　きっ　切れないッ！」

チャリオッツが動きを止めたところで剣を巻き込むように再構成しました。

「こ…今度は　かたまっておれの剣をとり込みやがった！」

「簡単に言えば砂のスタンドなのだ」

「うむ……簡単（シンプル）なヤツほど強い……おれにも殴れるかどうか……」

「わたしなら間違いなく殴るなりなんなりで攻撃は可能でしょーけど、アレがダメージを受ける未来（ヴィジョン）が全く見えません」

「ひっ　ひ――っ
おい！　助けて！　この犬どけてくれーっ！」

「例の大好物をもってるか？」
「持ってなきぁ連れてこれませんよ」

ピクリ、とすぐさま反応したイギー、アヴドゥルに突っ込んできます。

「なんてものすごく鼻のいいヤツだ
イギーはコーヒー味のチューインガムが大好物でな　こいつには

目がない」
「アヴドゥルさん　箱の方はヤツの見えない所へ隠してッ！」
誰に言ってるのやらアヴドゥルは？
しかもちっと誘導失敗してますし。

「あ
　し…しまったッ！　箱の方をとられたッ！」

バリバリクチャクチャクチャバリバリ

「コーヒー味のチューインガムは大好きだけれど　決して誰にも心はゆるさないんじゃ　こいつは」
「紙ぐらいとってからくえ」
「こんなヤツが助っ人になれるわけない」
「やれやれ」
「チクショー」
「まぁ、長い目でみましょうよ。ＤＩＯの拠点に着く頃にはマシになってるでしょーしね」
なってますからね、とは言えないです。わたしに未来視は出来ない筈ですから。

荷物も届けてくれたＳＰＷ財団のヒトたちは役目を終えて帰還の途に。

「Ｍｒ．ジョースター　それでは我々は　これで帰ります
これは旅に必要な水や食料です　医薬品や着がえも入っています」

本来はここでジョセフさんの義手を着け直すとこですが、既にわたしがやったんで無しに。

「旅立つ前に尋ねたい……　わしの娘のことだが……」

「……」

「ホリィの容体はどうだ？　ハッキリ言ってくれたまえ」

「……はい
言いづらい事ですが　あまり良いとはいえません……
体力の消耗がはげしく　命は　いぜん危険です
我々ＳＰＷ財団の医師の診断では　もってあと２週間」

「時間がない」

「ちくしょう」

「それとひとつ情報があります
カイロ市内にあるＤＩＯと思われる人物をひそかに探し調べていましたが　報告によると　２日前　謎の９人の男女が　ＤＩＯが潜伏しているらしい建物に集まって　そして　いずこかに旅立ったということです」

えーっと、ンドゥール、オインゴ・ボインゴ兄弟、マライアさん、アレッシー、ダービー兄弟、ケニーG、ヴァニラ・アイス、でしょーね。

アヌビスとペットショップ？　あれは非人ですからね、カウント外ですよ。
てか最後の三人は館に残ってんですけどねぇ。

「ＤＩＯと　９人の男女だと？」

「何者かはわかりません　それ以上の追跡はスタンド使いではない我々には不可能なことです　遠くから写真をとることさえ危険なのですから」

「新手のスタンド使いか！」

「いや待て　タロットカードに暗示されるスタンドは「皇帝（ホル・ホース）」を除けば　残すは「世界（ワールド）」のカードただ一枚　この「世界」のカードがＤＩＯのスタンドかと思っていましたが　アヴドゥル？」

「わ…わからん　……わたしにもわからない…　９人だと？」

「まぁ結局、スタンド使いがタロット分しかいない筈がないって訳ですよね」

「ＤＩＯのやつ　自分の首が新しい肉体に　まだなじんでいないらしいな……
ＤＩＯは妙にプライドの高いヤツだから　決してカイロから脱出したりしない
とにかく我々のカイロ入りをこばむつもりらしいな」

「やれやれ　あと2週間の間にあと9人か……　ちょっぴり疲れるというところか…」

サヨナラですよＳＰＷ財団のイッパンさん。まぁ、次会うのはすぐですけど。

そんな感じで、サンドバギー的な車で砂漠を進むわたしたち。
ジョースター家は運転席と助手席、イギーが後部座席、そして残りの三人は荷台に荷物と一緒に乗ってます。
わたしですか？　屋根に乗ってますけど。

そのまま走ってたらさっきのヘリコプターを発見、地面に落っこちてます。

じきにジョセフさんも気づきそうなんで屋根から飛び降りときます。
勿論、浮遊を起動してですが。

「うわあああああああ！」
「ワンアンン！」
「なっ　なんだァ――ッ！？」
「いきなり急ブレーキをッ！？　どうしたァ――っ！？」

「み……見ろッ　あ　あれを！」

「こっ　これはッ！」

「ヘリコプターだ……飛び去ったＳＰＷ財団のヘリコプターが砂に埋まってるぞッ！」

「これは……」

いや、埋まってないですし。

「兵器による攻撃のあとはない」

「なんか　そのままドスンと落ちた感じだ」

「ま…まさかッ！」

「気をつけろッ　敵スタンドの攻撃の可能性が大きい！」

「見ろ　パイロットだ

死んでいるぜ　…見ろ　指で機体をかきむしった跡がある」

「用心して近づけ　何か潜んでいるかもしれん」

その、死んでる方のヒトに近づいて見てみると、口から多めの水が出てきました。

「……水だ

？　こんなに大量の水が…パイロットの口の中から……いや

肺の中からこんなにたくさんの水が…小魚もいるぞ

溺れ死んでいるぜ！　この砂漠のど真ん中で……いったい？」

「お…おい……もうひとりはここにいる！　生きてるぞ！」

「だいじょうぶかッ！　しっかりしろ！！　いったい何があったん

だッ！」

「み…　み…ず」

えっ　ミミズ？　……ってボケはいりませんね。

「なに！　水が欲しいのか　おいポルナレフ　その水筒をくれ
ほら　しっかりしろ水だ　ゆっくり飲んで」

瀕死な方のヒトにジョセフさんが水を飲ませようとすると急に元気になって（語弊）、

「ヒィィィィィィちがうゥゥゥゥ～～～～～ッ水が襲ってくるゥゥゥゥウウウウウ！！」

ってわめきたて、そしたらその水筒から水の手が伸び、

「なにイイイイイッー！！」

そのヒトの顔をひっ掴んで水筒にクビを引きずり込みました。

「うッ…！！」

「て　敵スタンドだッ！　敵スタンドが水筒の中にいるぞッ！」

引きずり込んだ反動で宙を舞う水筒……って！

「んなこと考えてる場合じゃあないですかッ、届けッ！」

袖やら身体に仕込んでる素材やらを動員してその水筒を包むように金属板を造り出し、ナカミが出て来ないように継ぎ目無くピッチリ

と覆ってやりました。

用心に越したことは無いだろうと、今度は落ち着いて二重三重に金属布を巻いて（防音処置もしてみました）、中で暴れられてもいいように浮遊装置も取り付けて、完成っと。

「ふぅ」

「くっ　くそっ！　ＳＰＷ財団の人間は無関係なのに襲いおってッ！　アヴドゥル　どんなスタンドか見たか！？」

「見えたのは「手」だけでした」

「でも宙にあるうちに捕らえましたから、出ていってない筈ですよね」

「何者なんだ…　ＤＩＯの所に９人の男女が集まったということだが……そのうちのひとりが攻撃して来たのか？

しかしタロットに象徴されるカードの残りは「世界」のカードただ一枚なのだが……」

だからタロットはもう無意味だと……そもそもわたしがタロット関係無いですし。

「承太郎！　敵の本体を探せッ」

「今探しているぜ　だが……

今回も視界の中には敵本体は見えないな…

「太陽」の時のように　まぬけな鏡にも注意して探したが……

どうやら敵はかなり遠くから操作しているようだ　スタンドも小型だし　たぶんそうだ」

……確かンドゥールは西方の、とある弓兵の射程限界辺りにいるんでしたっけ？

「では、わたしがちょいと見つけて来ますね。敵スタンドの情報は読み取りましたし」

まぁ、嘘ですけど。

「なにィーッ！！」

「ほ　本当かエンッ！？」

「ええ、この中に入ってる「スタンド」は、タロットカードの起源ともいうべき『エジプト９栄神』のうちのひとつで、大地の神を意味する『ゲブ神』…らしいです」

「エジプト９栄神！？　なんだそれは！」

「いや、わたしに訊かれても…。

それはともかく、飛んで空から探して来ますから、ここで皆さん待機しててくださいね」

答えを聞かずに飛び上がります。

今回の飛行装備は飛翔滑走翼じゃあなく、「神姫」と呼ばれるガイノイド？　の「アルトレーネ」という機種のユニットを模したモノです。

で、そのまま２０ｍ程上昇、西に向かって飛び続けます。

暫くしたら、砂漠の真ん中にポツンと座り込んでいる人影を発見。

空中で静止したわたしは「ＬＣ３レーザーライフル＋ＳＫ」と呼ばれる武装を出し、ロックオンをしてからチャージ開始。

二段階目までチャージをし、放出。

レーザーは見事命中、彼の身体をあらかた蒸発させちゃってました。

さて、皆さんの所に戻りましょーかね。

あ、そだ、あの金属球もナカミ出して元になおしとかないと。

第１９話：そういえば水にも干渉できるんですよね（後書き）

最初は天駆ける天使の騎馬って宝具（笑）を使おうと思ったけど何故かこうなったり@レーザーライフル

第２０話：何事も無いですよね？（前書き）

困った事に、花京院（ついでにアヴドゥル）を怪我させなかったせいでちょいと狂いが生じてしまったのです。

第２０話：何事も無いですよね？

はい、アスワンにやってきました。

本来なら花京院とアヴドゥルを入院させる為に来るとこですが、わたしがちゃっちゃとンドゥールをヤッちゃったんでどっちも怪我することなく続行です。

此処には補給とか休憩の為に立ち寄っただけみたいな感じですね。

「おい　たくさんカフェがあるぞ
ひさしぶりの町だ…なんか飲み物でも飲みながら休もう」

「いいな…どの店にする？」

ポルポル君が吸ってた煙草をピン！　と飛ばすと、『ＭＡＸＩＭ』って名前の店を向いて地面に落ちました。

「オレのタバコはあの店をえらんだぜ」

なのでそこで一休み。

「いらっしゃい
なにを……注文なさいますか？」
「そうだな　紅茶がいいな」

「同じだ」

「わたしも」

「わたしはコーヒーがいいです」紅茶は好みじゃあないですから。

「ぼくもコーヒーにしよう」

「……」

「はい　紅茶を……4つと　コーヒーを2つですね」

「いや　紅茶やコーヒーはやめたほうがいいな……」

「え？　なんですって？　ジョースターさん」

「いいか……ここは敵地エジプトだ…　今まで以上にどこに敵が隠れていて　いつ敵が襲ってくるかわからんぞ……

飛行機事故を用心するように　今まで以上に「毒」にも用心したほうがいい

これからはビン入りやカン入りだけを飲むようにするんじゃおい……紅茶とコーヒーをとり消してコーラにするよ　そこの冷蔵庫の中の　右から3番目から8番目のコーラを栓をぬかずにもって来てくれ」

「コーラァァ！？」

「そうだ　どうかしたか？」

「は…はい　コーラですね　コーラ6本ですね」

「そうだ　栓はテーブルでぬくからいいぞ　それに右から3番目と4番5番6番7番8番目のコーラを指定する」

何故か、慌てた様子の店主さん。わたしは別にコーラだろーとコーヒーだろーとどっちでも構いませんがね。

「おい！　主人！　ちょっとこのコーラぜんぜん冷えてねーぜ
なんだこの店！　なまぬるいコーラ出すのか！　金は払わねーぜ
バカヤロー！！」

「……」

「おい待て！　コーラ冷えてないのか？」

「れ　冷蔵庫がこわれちまってましたァ……」

「なあジョースターさん　すこし神経質すぎるぜ」

「たとえば仮に　あの主人が敵だとして　おれたちに毒をもろうと…しているとしよう！
おれたちがどうしてこの店に入るとわかる？
この町にはこんなにたくさんの店があるのに　選んだのはこのオレだ　一軒しかないならともかく　何軒もあるぜ」

「用心に越したことはないと言ってるだけだ」

「そんなにこだわるなら店を変えようぜ！　向かい側の店にうつろうぜ」

神経質なジョセフさんのせいで店を変えることになりかけた時、その行こうとした先が騒がしくなってました。

「火事だあ――――！
　おれの店が燃えてしまうだあ――――っ！　うわああ――――！　誰かが道にすてたタバコの火がゴミに燃えうつったんだァ――――！」

「おい主人　やっぱりはじめのとおり紅茶４つ　コーヒー２つでいいや」

で、結局紅茶とコーヒーになりました。
わたしは砂糖それなりと、ミルクたっぷりで飲みます。
苦いのあんまし好きくないですからね。

「しかし　タバコをゴミのところに捨てるなんて　悪いヤツもいたもんだぜ」

”おまえだよポルナレフ”ってつい脳内ツッコミいれたわたしは間違って無い思うんです。
捨てたのあんた以外に見てないのよ、って風にも。

そして皆さんが口に含んだ、って時に

「きゃあ　この犬が！　あたしのケーキをッ！」
「だれだ　犬を店の中につれこんだのはァ！」

なんて声が聞こえて、口に含んだのを噴き出してしまいました、わたし以外。

「「「「「イギィ～～～」」」」」

「やれやれ」
「やつを忘れてた」

「この犬！　おい出してくれ――ッ！」
「だれの犬よ　あたしのケーキ食べられちゃったわ！」
「アウアウ」

「待てェ！　このクソ犬――ッ」

皆さんイギーを追っかけて行っちゃいました。

わたしはちゃんと全部飲んで、代金払わずに行った皆さんの分も払っておきます。

「やれやれ。まぁ、用心するのは悪かないですけど。でもわたしにとっては毒なんて効かないですからどーでもいいんですよねぇ」

店主さんに聞こえる程度の独り言を残して、さて、皆さんを追っかけましょか。

皆さんに追い付いたところで、休憩がてら散策でもしましょうとわたしが提案。承太郎君とわたしと花京院、そして残りというふうに別れるようにしてみました。

んで一旦解散、集合場所は病院です。
理由？　目立つから、ということにしておきました。

といっても、別にやること無いですからねー。
適当に合わせて病院に向かいましょかね？

つまりは中略なのです。
病院前～

ジョセフさん達の到着です。

「あれ？　承太郎！」
「承太郎じゃあないか」

「よぉ　遅かったな」

「遅かったな？　おまえ早すぎるぜ　××××」

ハテサテ、ナンテイッタンデショーカネー

「車より先につくなんて…おまけにクリーニングも仕上がったのか？」

「？　？」

なんかボケた会話を聞いてると、救急車がやって来ました。

「けが人らしいな
ン？　オレンジか　のどがかわいてたところだ　一つもらうぜ」

「おやっ　あの男の服は……」

「知ってるやつか」

「いや　知るわけねーだろ」

結局、オインゴ・ボインゴ兄弟（ブラザーズ）は、誰にも気付かれることなくリタイアしたって訳ですよ。

第２０話：何事も無いですよね？（後書き）

超やっつけ。一時間くらいで済ましたした。
別視点が無いことからやっつけ度が量れるというものです。

花京院は空気にしてやるんですっ

わたしに生かせる筋もない（台詞イメージ：仮面ストーカー）

第２１話：また、超時短なんですよね（前書き）

中身については言うまでもなくディスガイアでいうところの『新規キャラ作成ただし必要マナ１』相当なのです。

第２１話：また、超時短なんですよね

コム・オンボきましたよ、です。

ポルポル君がいつの間にかどっか行っちゃってましてね、皆でフラブラと探して回ってます。

んでもって町外れのパルテノンっぽいとこに行ったら見っけました。

「おいポルナレフ　そこにいたのか！？
ひとりでいなくなるから心配したぞ……敵に襲われたらどうする？」
「ハッ！」

わたしたちが来たのでアヌビスの乗っ取りが中断され、そのせいでポルポル君頭がぼーっとクラクラしてます。

「ポルナレフ？」

「え？　…あ…ああ　ジョースターさんか
（う…うーむ　こ…ころげまわったせいか……ケガをしたせいかなぜか頭がボーッとするぜ）」
「ポルナレフ　うずくまってどうした？　××××でもふんだか？」

わたしにとって不適切なコトバはジャムさせていただきます。

「……」

「なんだ…？　刀を持ってるな……なんか……あったのか……？」

「ああ……たった今　くそったれの敵に襲われたのさ…」

「！　なにッ？　敵だと！？」

「もう終わったがな
アヌビス神の暗示のスタンド使いといってたぜ……
剣の達人で物体をすりぬけてものを切断できるスタンド使いだった　強敵だったぜ
（当然おれ様程じゃないがねという確固たる自信の気持ちはあるがね）

この剣でヤツは襲って来……あれ？　ない

……

なんだ…ネズミだ…　ネズミが刀を持っていこうとしているぞ！
コラアッ！」

「チューッ」「チューッ」

「手くせの悪いネズミが住んでんのか　ここは！　どうせならチーズを盗めチーズを…」

「ポルナレフ　助かったからよかったが　必ず二人以上で行動するんだ　気をつけろ
ほんの数分ひとりになった所を襲ってくるやつらだからな…
さあ船に戻るぞ今日中にエドフまで行くのだ」

さっきみたいアヌビスをに抜こうとしたポルポル君、しかしビクともしません。

「？　なんだ　おかしいな…　今度はカタくって剣が抜けなくなったぜ」

んでもってここでわたしの出番なのです。

「ポルナレフ、ちょっとその刀貸してくれませんかね？」

「ん？　ああ　だがおれに抜けないのをおまえが抜けるのか？」

「いやいや、別に抜こうだなんておもっちゃあないですよ」

とか言ったりしつつアヌビスを受け取って、

「今のアヌビスのスタンドの効果は、”死”に絶える」

『アヌビス神はかんぜんはかいされてしまった
「かわいそうなアヌビス神…」』なのです。

本音はそんなこと1ピコグラムも思って無いですよ勿論。

「おいッ　なにやってんだッ？」

「んにゃあ、この剣自体がアヌビス神だったんです。だから消さし

ていただきました。
　ちなみに本体は居ないみたいです。かなり前に死んでしまってたそうで。
　ついでに能力は『抜いた人間を操り、剣の達人にする』みたいな感じっぽいです」

「そうだったのか……だからあいつの動きが　ちぐはぐだったんだな」

ま、退場者の話はこれくらいにして、船に戻りましょー。

っと、その前に、そこにぶっ倒れてるチャカ君をせめて治しといてあげましょう。
勿論、傍目に分からないようにですけど。

てな訳でエドフです。

わたしとポルポル君と承太郎君、それ以外と別れて行動中。

ポルポル君が寄りたいと言ったので床屋に来てます。

とっととアヌビス神を壊したので、ここも壊れることもないし、警官の人もとばっちらないし、牛の乗った船も沈没しないしでいいことずくめじゃないですかね？

「しかしころげまわったんでハンサムのナイスガイがうすよごれちまったぜ　ピカッピカッにしてくれよン　おやっさん！

イテッ　イテッ
ちょっとおやじィ！　そのカミソリ切れ味悪いぜ　ちゃんと研げよちゃんとォーっ　散髪の中で一番気持ちいいとこなのにィ～～～」

「やれやれ　うるせえ男だ」

「ソースカー？　スンマセン」

承太郎君は居眠りった模様なのです。

わたしはお節介というかなんというかで、剃刀を床屋のカーンさんにあげましょか。

ステンレス的ななにかで切れ味とっても落ちにくいわたし印の一品モノです。

「あ、これ使ってみてくださいな。だいぶいいモノって自負してるんですがね」

「ドーモ　アリトヤース」

あとはやることないんでまたｉＰｏｄ造って音楽聞きながら時間潰しです。

「おっ　ん〜〜〜　イーイーッ　今度はよく剃れるじゃあねーか…
…気持ちいいぜ」

「ソリャー　ヨカッタッスネ」

「トレビアンだよ　ト・レ・ビ・ア・ン！　アゴの下もたのむぜ」

「アイ　アゴノシタッスネ」

とかなんとか。

……

ポルポル君の散髪も終わって、皆さんと集合なのです。

「さて…次はルクソールだな　旅をつづけよう」

第２１話：また、超時短なんですよね（後書き）

カーンさんは
乗っ取られなかったので
終始片言でしたとさ

だと思ったからこんな感じに

第２２話：またとか言っちゃあ駄目なんですからね？（前書き）

花京院は居るけど文章的には居ないものとされてるっぽく見えちゃいますね。

第２２話：またとか言っちゃあ駄目なんですからね？

「この岩山の中にある村は　墓泥棒たちの子孫の村だ」

えーっと、確か「死者の都（ネクロポリス）」ですね。そこんとこに来ました。

ここでマライアさんとアレッシーの出番な訳ですよね。

わたしは勿論アレッシーの方に行きますけど、あることをしたいので。

本来なら前に往った世界のどれかでやっててもよかったんですけど、まぁそれはそれなのです。

「いまだにどこかの家の地下では　金銀財宝を求めて政府に内緒で洞窟を掘ってるやつがいるということだ」

「まだ発見されていない墓や財宝があるかな？」

「ひょっとしたらな」

「ところでじじいはどこへ行った？」

「トイレだ…　イギーといっしょだから異常があれば気づくだろう」

「トイレ？」

「おまえもいくか？」

「……　まともな　しくみならな……」

今頃ジョセフさんはオーマイガーオーマイガーやってるんでしょーね。

ま結局、ホテルまで我慢したそうですけど。

「ジョースターさんどうしました？　そろそろ出発しますよ」

「え！？　ああ？　わかった行くよ

フウー　しかしビックリしたわい……電気が通っているとは地中を電線がとおっていたのかな？

しかしわけがわからん所だ　シュールよのォ――――」

そんなことは置いといて、てな感じで出発なのです。

後方の岩場の上にマライアさん居るみたいですね。まぁ、今はどーでもいいですけど。

ちょいと先の町にて。

今回は人数分の瓶入りコーラを注文して休憩中です。

「ジョセフさん、義手の調子はどうですか？　どっか不具合があっ

たら言ってくださいね？」

「うむ……今のところはどこも悪くはないようだ」

ちなみにこの義手が磁力に反応してない理由は、ただ単純に鉄やらではなく、わたしの造った特殊合金だからです。

多分ＳＰＷの技術力でも再現できるかなーとは思ってます。

「おい！　チョットそのラジオ　ブッこわれてんじゃあないの？　ガーガーうるさいからスイッチ切ってくれ」

「変だなあ？　日本製だし買ったばかりなのに……」

「あと2日あればカイロまで行けますが　全員疲労がたまっています　今夜と明日はルクソールに滞在して休息をとるというのはどうですか？」

「うむ」

コーラの王冠が引っ付いてきてますね。

「そうしようぜ　エジプトに入ってから特に敵スタンドが強くなってきているってわけでもねーし　ぶっとおしで急ぐこともねーだろーしな」

「まさかのポルナレフによる賛成意見なのです」

「うっせー」

「……」

「カイロに入ったときのためにそうするのがいいな……ただし油断は禁もつだ」

「ホテルを探そう」

「あっ　ラジオが急になおった！　あいつらがいったとたん磁石でも持ってたんじゃあねーのか！？」

わたしたちが立ち去った後にそんな言葉が聞こえてきました。

そのまま歩いてると、木箱を作ってる人がいました。
当然ながらみなさん気にもしてないですが、通り過ぎた後にその人が持ってた金槌がすごい飛んで来て、ジョセフさんの頭をぶち抜こうとしました。
でもそれは当たる寸前にアヴドゥルに止められましたけどね。

「うぎゃあああ！
あうううう　く…くぎが…くぎが　イテェー～よォ～～」

「くぎ？　おいおいトンカチで指でも打ったかァ！？　気をつけろよ　あぶねーじゃあねーか　トンカチふっ飛ばすなんてよ」

アヴドゥルは返さずに、金槌をその場に放り落として行きました。
てかまぁ、指打ったんじゃあなくて頬貫いちゃったんですよねぇ、磁力に引っ張られて。

その後、一見何事も無くホテルに着き、チェックイン。
部屋割りはアヴドゥル&ジョセフさん、承太郎君&花京院、そしてわたし&ポルポル君でした。
チャリオッツにわたしが用意した林檎を切らせたなんて事はきっとなかったのです。

翌朝～

起きた後、年長組以外はとっととホテルから出ました。
ポルポル君が早く朝食を食べに行こうとうるさいので。
今も二階の年長組がいる窓に向かって騒いでます。

「早く起こせアヴドゥル！　普通年寄りは朝が早いもんだがな――っ
　5分で降りてくるように伝えろ――っ」

……とは言ったものの、5分経っても来る気配がありません。
「ジョースターさん　おせ――なあ――」

ポルポル君は座り込んで煙草吸ってます。

まだまだ、待つ事になるんですけどね。

それから更に２０分くらい。
この間ずーっと、エアロシアーさんを使ってサーチャーを作ろうとしてみました。
理由としては、やっぱり自壊機能あったほうがいいじゃあないですか？
一つだけ出来たので、光学迷彩も付けて浮かせてみてます。
一応、設定に『追尾：ポルナレフ』とか入れてますから、この後の事に役立てさせる予定です。

「おせーなあ――　なにやってんだ？　女の身じたくよりおそいんじゃあないの？」

「アギ」

「全くだ」

「やれやれだぜ」

「とりあえず、サンドイッチ用意したんですけど、つまみます？」

「いつの間に？」

「勿論、わたしの『造物者（クリエイターズ）』でさっきちょこちょこやってたついでにです。

無機物有機物、武装から飴ちゃんまでなんでもござれなのです」

子供達がままごとしてるのを横目に。

「へへへ　子供は無邪気でいいよなあ」

「……
じじいとアヴドゥル　やはり遅すぎるな…」

「……」

「敵と遭遇しているのかもしれん」

「ちょいと見に行った方がいいかな」

「ああ　やれやれだがな」

「こい　イギー」

「ガルルルル」

「わかったわかった」

「ガルル」

はっはっは、仲がいいですねぇー。

さて、もうちょい後ですが……
アレッシーくーん、あっそびーましょ～♪

第２２話：またとか言っちゃあ駄目なんですからね？（後書き）

やっぱりいい加減に

本来のステータス
本式のパラメータ
本当の能力
本物のスタンド

の説明枠が要ると思います？
そこんとこどうですかね？

どうやらあっちの方も観測されてるみたいですし

第＊＊話：あ、やっぱ（前書き）

発動した能力一覧

2話
修復能力（リペアー）：身体、服、女医、校舎一部、手首
肉体変化（めたもるふぉーぜ）：止血
物質変化：血痕消し

3話
物質変化：能力確認

4話
造物者（クリエイター）：焼鳥＆メロン
物体変質＆物質変化：虫網風金属板→金属球（中）→金属球（小）

6話
キラージャック：船の手摺
肉体変化：船員に変装、半魚スタイル＆硬質化、首刈り
物質変化：出血否認

7話

造物者：発信器、槍、釘、焼鳥
物質変化&肉体変化：浮遊システム、受信機
肉体変化：声帯まわり（若本ヴォイス）
物質変化：『力』に干渉、炭化銃、フォーエバー口まわり、槍→死
棘の槍、金属塊→猿覆う→元サイズ
物体変質：槍加熱

８話
造物者：消毒薬&包帯
キラージャック：『悪魔』の足
なんか：『悪魔』殺処分

９話
バジリスク&メデューサ：『節制』石化
キラージャック：石破壊

１０－Ａ
造物者：スナイパーライフル
物質変化：メモ用紙→銃弾

１０－Ｂ
物質変化&肉体変化：浮遊システム
造物者：クスリとホータイ、金貨複数

１１話

造物者：消毒液と包帯
なんか：人面疽をひっぺがす
修復能力：→痕、袖

１２話
物質変化：写真ｓ→金属塊
物質変化＆物体変質：（断片＋肉体一部）×デザイン＝妙金属製腕輪
物質変化？：土壁
物質変化＆肉体変化：飛翔システム
造物者：鎖
造物者＆物質変化：車→ハイブリッド的な高機能車

１３話
肉体変化：機械鎧
造物者：爆式†第七聖典（武装神姫的パイルバンカー）、炭化銃
物質変化（失敗）：天井＆壁抜き
物質変化：機械鎧→パタ（爆式）
修復能力：左手首の取り替え

１３．５話
造物者：太陽銃
造物者＆肉体変化：飛翔滑走翼

１４話
造物者：ボロ車
修復能力：身体

物質変化：肉の芽→自分の脳細胞、金属製口封じ、鋼棘
物体変質：脳幹まわり
肉体変化：ズームパンチ、貫手
キラージャック：ばくれつけん
なんか：塵は塵に（ダン消滅）

１５話
肉体変化&造物者：フロートシステム
造物者：冷暖房、日除け、水筒、シアーさん（空）
物質変化&物体変質：地面→盾代わり

１６話
機械弄り：セスナ改造
物質変化：金属的なモノ→腕輪

１７話
機械弄り：セスナ修正
造物者：シアーさん（陸海空）

１８話
造物者：ｉＰｏｄ、義手（簡易）、シールド展開
物質変化：潜水艦床→鉄棒、義手（簡易）→義手（改造）
生体操作？：ミドラー気絶

１９話

物質変化：パネルリターン、袖や素材→金属球、金属球→元のモノ
肉体変化＆造物者：浮遊システム
造物者：金属布、防音処置、浮遊装置、ニーベルング＆フロートシステム、ＬＣ３レーザーライフル＋ＳＫ

２０話
修復能力：毒無効化

２１話
物質変化：アヌビス神殺害
修復能力：チャカ治療
造物者：ステキ剃刀、ｉＰｏｄ

２２話
造物者：エアロサーチャー、サンドイッチ

第＊＊話：あ、やっぱ

～浮往界～

はろはろ～、僕ちゃん第一話に出てきたレント・カームリィ、音無（おとな）静音（ししずね）だよ～。

あれから向こうっ側は三十何日経ってるけど、こっちは三時間ちょいくらいしか経って無いんだ。

まっ、そんなこたー置いといて、エンってばなかなかいい感じにやらかしてくれちゃってんじゃない？
んでもボクがあげたスタンドのことはビミョーに把握しきってないよーな……ってアレ？　この紙は……。

あーあ、なんだミスってたわぁ。
試式のデータを転送（おくっ）してて、本式の送ってなかったんだ。
だからあんな感じになってたんだなー。

……よし、今からでもまだダイジョブだ、きっと。だからこっちのデータも、ちょちょっと注釈いれて……転送っ！

これで晴れてエンもちゃんとスタンド使いになるね！

……ん？

なんかポケットに感触が。

紙……ですか。レントさん、こんどは何でしょ？

なになに…？

【＊本式のスタンド説明書
＊この紙に書かれてるのが、君の本当のスタンドだよ
バリアブルズ
Ａｃｔ．１―コンダクション
破壊力：Ｅ
スピード：Ｂ
射程距離：１５ｍ
持続力：Ａ
精密動作性：Ｃ
成長性：Ｃ
本体が持つ能力を伝達するスタンド
対象にスタンドパワーを込めたり、射程内に於いて自在に能力を操る事を可能とする

スタンド自体にパワーは無く、せいぜい小石を持ち上げたり本のページをめくる程度
ヴィジョンは数体の小さな妖精のようなもの

Ａｃｔ．２―タイムオペレイション
破壊力：Ｄ
スピード：Ｂ
射程距離：Ｂ
持続力：Ｂ
精密動作性：Ｃ
成長性：Ｃ
時間の流れを変化させるスタンド
例えば
・対象の身体の動きを止める
・対象の時間を巻き戻すことで損傷をなおす
・対象の時間を加速させて、高速動作を可能にする
・『世界』
ビデオテープ＋デッキを擬人化させたようなヴィジョン
大きさはヘブンズドアーより少し小さい】

……なるほど。では少し試してみましょう、バリアブルズＡｃｔ．1。

妖精のようなモノが5体出て来ました。なんかまだ出せそうですね。

まぁ、いいですか。次、Ａｃｔ．２。

妖精が全て消えて、わたしの半分くらいの大きさのヒトガタが現れました。

……どうみても女体化ビデオマンです、はい。
能力試してみましょう。
とりあえず手の中に小石を出して投げて、

「Ａｃｔ．２、あれを止めてください」
『イチジテイシ』

おぉー、小石が中空で停止してます。

ま、確認はこのくらいでいいでしょう。
スタンド引っ込めて、さて、アレッシーを追いかける作業に戻りましょうかね。

第＊＊話：あ、やっぱ（後書き）

レントは紙切れ一枚でヒトの要素を付けたり取ったりできるヒト

※ただし同郷に限る

そういえば忘れてたエンの能力→物体変質と物質変化

他のは全部これをそれっぽく言い換えたもの

第２３話：さて、楽しい楽しい魔改造の時間ですね

わたしたちの後をつけてくるヘンな頭のアレッシー。

ポルポル君が真っ先に気付いたようです。

「う…うーむ　え　えーと　小銭を…落として……えーと　どこかなあ～～」

「おい……何……ガン飛ばしながらおれたちを尾行してんだよ！てめー……殺気があるな」

「え」

わざとらしいアレッシーにポルポル君が近寄ります。

ちなみにわたしは前向いたままですよ、サーチャー越しに見ています。

「……わ…わたしに話しかけたんでしょうか？　え？　な……なんのことだか……　両親にもらった目でしてェ　殺気だなんて　コインあったぞ」

「ほう……
それじゃあスタンド使いじゃあないかどうか……たしかめさせて…もらうぜッ！」

ポルポル君がチャリオッツを出して近づくと、アレッシーの、ヘンな頭部になってる影に目が現れ、

「ン　はッ！」

のびてポルポル君に襲いかかります、が、ポルポル君はジャンプで避けました。

「あぶねえッ！　てめ――やはり「スタンド使い」ッ！」

そして第一の目的を果たしたアレッシーは直ぐに逃走を図ります。

「むう！　……？　逃げんのか！？
おい承太郎ッ！　花京院ッ！　エンッ！　敵だッ！　敵が　あらわれやがった！」

わたしたちが振り返ると、既にアレッシーを追いかけたポルポル君の姿を見つけることはできませんでした。

そしてふたりがキョロキョロしてるうちにわたしも離脱、ポルポル君達を追いかけます。
サーチャーと同期してますから、何処に居るかはすぐ分かりますからね。

途中でわたし本体は本当のスタンドを発現した関係で足止め状態ですが、サーチャーは問題なくポルポル君を追っかけてます。

「待てッ！」

そのポルポル君はだんだん小さくなってて、アレッシーから引き離されてました。

「うう……　なっ　なんだー速いぞッ！　なんて足の速い野郎だッ！　あっという間にあんなに遠くにッ！」

そして周りを見て無かったので、

「あ！　うげっ　い…いてェ～
　ハアハア　な…なんだオレのクツは？　妙にブカブカになってるぞ？？？」

通行人に衝突。ようやっと自身に起きた異常を認識しだしてきたようです。

「おい……危ねーぞ　道路でチョコマカ走ってると交通事故に遭うぞ　おれが自動車じゃあなくて　よかったな」

「うるせーこのウスラ野郎ッ！　でかい口でおれに説教するな　どけッ！　トンチキ　おれは人を追ってるんだッ！」

素直に頷いとけば注意ですんだ（ポルポル君の性格からすると望めないことですけど）のに、わざわざ反抗的な口をきくので

「ううッ？
　なにしやがるッ　な…なんだなんだ？
　なんだッ！　なんか高いぞ！　こ…こいつ片手でおれをもちあげ

ているッ！　いったい　こいつ身長何センチあるんだッ！　顔も手もでかいぞ！」

吊し上げられて

「おい！　生いきな口をたたくヤツだ　大人をなめるとどうなるか少し教えといてやるか」

「えっ？　うげっ！」

張り手をくらっちゃいました。

「ブカブカの服なんか着やがって大人にでもなったつもりか！　憎ったらしい顔をしているガキだぜ」

「どけッ！　小僧じゃまだじゃまだ！」

「うわ」

「オン！」

「な…なんだこれは!?　歩くヤツがみんながみんな……大きくなったみたいだッ！　はっ！」

ちょっとしたパニック状態?　なポルポル君、店のガラスに映ったモノを見てようやく自分に起きた異変をしっかり認識したようです。

「なっ!?　なんだ――っ

子供だァァァ――っ!!

ま…まさかッ！　こいつがッ！　このガキがッ　まさかッ！

おれかあ――！　こっこっ子供だァ――！　子供になっちまって

るウウウハハハハ　ウソ！　ウソ　ウソぉっ！
はッ！　（や…「やつのスタンドッ！」　あのうすら気持ち悪い男の影のような「スタンド」がおれの影と交わった時に　ヤツはオレに術をかけたんだッ！　な…なんてこった！　チックショーやばい！　やばいぞこれはッ！）　あっ」

その時、承太郎君と花京院が。花京院はまだ法皇を使って探してないみたいですね。

「ジョッ　承――――……
……あ　ジョウ……い…いや…ジェイ　ジャッキー　し……ジ」

「おいぼうや…　今……この辺でフランス人の男を見なかったか？　身長は　このぐらいで　君にちょっと似た髪型をしているんだが……」
「そっ　それはぼくだッ！　ぼくっ　ぼくっ」

「やれやれ　子供にきいたのがまちがいだったぜ」

「エンもいなくなったし　どこにいったのやら」

「あっ　ま…まって！」

チビポル君が追いかけようとしますが

「アッ！」

「フフフ　肉体が子供になるってことは　すなわち脳も子供になっていくってことだから　記憶もだんだん子供までもどるってことよ
　フフフフフフ　そろそろ　いいかな？　弱い者いじめ……大ィィィー好きッ（はぁと）　オレってえらいネェ――」

アレッシー　が　あらわれた！
チビナレフ　は　にげだした！
しかし　まわりこまれてしまった！

「おっとォアアアアア！　逃がさねえぜェ――――　ガキ」
「ううっ」

「ウクックックックックッ　大きい声じゃあいえねーがな……
……おれは弱い者をイジめるとスカッとする性格なんだ…フへへへ　自分でも変態な性格かなァと思うんだがね…
でも　よく言うだろ？　自分で変と思う人は変じゃあないってな…　だから　おれは変じゃあないよな……　子供には絶対負けないという安心感もあるしよ…」

ふむ…既に追い付いていることですし、そろそろ出ましょうかね？

シュタッ　と

「いやいや、１００人中八割くらいは変って言うんじゃあないですかねー。ほれさっ」

出現と同時、アレッシーを路地裏に吹き飛ばして、チビポル君をひっ掴んで追いかけます。

「やーやーポルナレフ、なんかちっちゃくなってますけど、骨肉細

工でも習得したんですか？」

すぐに下ろして、隔離結界を展開。

格好よく言いましたが、要するにこの路地に壁を造って入れないようにしただけですけどね。

すぐに反対側も封じて、アレッシーが逃げられないようにします。

「あ！　エ…え…誰だっけ…誰だっけ」

「エン、ですよ。これほど覚えやすい名前も無いでしょーに」

まあそれはそれとして、わたしは今チビポル君の方向いて、アレッシーに背を向けている訳です。

勿論、サーチャーがいるので何してるかは見えてるんですけど。

そして起き上がったアレッシー、わたしが隙だらけだとみたか、セト神をのばしてきます。

「あッ！　そいつの影に気をつけてッ！」

「おおっと」

飛び退きましたが、一瞬触られました。

「やったッ！　さわったッ！　エンの影にさわったぞッ！」

「しまった！」

「わあはははははははははははー！！

エン！　てめ――もおれの「セト神」の術中に落ちたのだ――ッ

！」

「う…こ……これはッ」

だんだんと小さくなっていくわたしの身体。

「た…たいへんだッ！　あのおにィちゃんも子供になる……」

わたしはお姉ちゃんですよーって言いたいですね。

まぁ、

「わたしが、小さくなってしまうなんて、”嘘”なのです」

けどね。

すぐに元に戻り、とりあえず一発アレッシーを殴ります。わたしにとって３ｍ程度、無いも同じなのです。

「ブ……な…何故だッ！　たしかにおれの影にさわった筈ッ！」

「ええ、勿論触りましたよ」

現に今、スタンドは使えないですし。

「実際わたしの時間は十年ほどもどされてますから。しかし！　わたしにはその十倍程の時間があるのです。故にその程度大したことではないのです！」

まぁ、最大まで戻されても姿は変わらないんですけど。

「そして時間を戻されたことでわたしの能力の規模が増大したのです！」

と、分身を造りながら言います。
わたしの隣に、ヒトガタが二人現れました。

「では、あとは任せるのです。わたしはやりたいことがあるので、工房に篭っているのです」

「了解だよ、マスター」
「マスターの期待に応えるネ♪」
さすがわたし、ノリがいいですね。
一人芝居？　……はて、なんのことやら。

彼等に任せて、わたしはチビポル君を壁際に持って行き、

「悪いですが、ここから先はＲ－１５なのです。だから隔離させてもらうのです。」

彼の周りを更に壁で覆ってあちらが見えないようにしました。

そしてわたしも、万が一セト神に触れてしまわないように、同じように自分を壁で囲います。
ではでは、人形造りとイきましょう。

（ここからは括弧有りが分身、括弧無しが本体の作業風景？　です）

「まずはやっぱり口封じ～♪」

「口をきけなくするって意味で、殺すって意味じゃあないからね」

まずは素体から造りましょうか。

「達磨にして～♪」

「しなくてもいいけど念のためにね」

次はコアユニットですかね。

「あ、セト神は無駄だからね～♪」

「僕達はさっき生まれたばかりだからね」

次はＣＳＣ（コアセットアップチップ）なのです。これは入念にやらないとです。

「んじゃまぁ、とっととヤッちゃおっか～♪」

「マスターの方もだいぶ進んでるみたいだしね」

基本は出来ましたね。あとは組んで調整ですか。

「まーるかいてて～♪まーるかいてて～♪」

「だんだんと人外化してくね、順調に」

あ、そういえば装備を造って無かったです、造らないと。

「ひゅるり～るりらん♪」

「外装は順調だし、僕はプログラムを組むとしよう」

さて、大方できてきましたね。

「あと３０分あと３０分♪」

「そんなにかからないけどね」

あとは……起動ですかね。

「出来た～♪」

「こっちも出来たかな」

ではでは、起動です。ついでに壁も取っ払いましょうか。

「どうですかー？　っておぉ、なかなかの出来じゃあないですか」
「そっちもいい感じに出来たんじゃないかな？」
「傑作だね♪」
「それは誉められてるのか微妙に思うのです」
壁を解いたわたしの目に映ったのは、分身達と、元アレッシーのヒトガタでさえないナニカ。ドラクエのローズバトラーが近い感じですかね。
そしてわたしの頭の上には、先程造った『戦乙女型ＭＭＳアルトレーネ』という種別の『武装神姫』が。
この娘は語尾に「（な）のです」がつく口調ですね。ちなみに体長１５ｃｍです。
「んで、そっちのは要望通りに出来ましたか？」
「勿論だよ、僕は君だし」
「あたしもキミだかんね～♪」
「ＯＫ、ではではコレは端っこの目立たない場所にでも置いてきましょか」
そして置いてきた後、システム適用の為に再起動。スタンドの効果

も消します。

分身二人も消えたし、ポルポル君も元に戻ってることでしょうから
戻って、あと承太郎君達、年長組とも合流しましょうかね。

後日、ルクソールの町外れに、
何でも食べる植物のようなモノが現れた　とか
その影に触ると翌日の日の出まで若返る　とか
そんなハナシが、生まれたとか。

―アレッシーは―
2度と人間へと戻れなかった…。
機械と生物の中間の生命体となり
永遠にルクソールに在り続けるのだ。
そして死にたいと思っても死ねないので
―そのうちアレッシーは考えるのをやめた。

されどプログラムは働き続ける

訳ですねぇ。

第２３話：さて、楽しい楽しい魔改造の時間ですね（後書き）

あ、ありのまま　今回起こった事を話します！
『わたしはアレッシーを一旦死ねなくしてフルパワーでボッコボコにしようと思ってたらいつの間にかアレッシー三分クッキングになっていた』
な、何を言っているかわからないと思いますが　わたしも何が起きたのかわかりませんでした……
頭はきっとどうにかなっています……
手抜きだとか　やっつけだとか　そんなチャチなもんの片鱗を味わったのです。

きょうのひとこと
＜「勿論だよ、僕は君だし」
＜「あたしもキミだかんね～♪」
→誰よこいつら

第２４話：ＤＩＯを撃つ！？／ファービー君……でしたかね？（前書き）

とりあえず前話の工房タイムの時にエアロサーチャーとＲＯＧ（神姫用憑依コントローラみたいなモノ）も造ったってことで

第２４話：ＤＩＯを撃つ！？／ファービー君……でしたかね？

―カイロ

「（ちくしょう　暗いぜ　目がなれねえ　あの野郎はどこにいやがるんだ……真昼間だってのに……探すのにひと苦労だぜ　この館は……）」

ＤＩＯの館に来たホル・ホース、ついでに煙草に火を点け、ライターを灯りに進む。

「たしかあっちの部屋だったな　ＤＩＯのいる部屋は……」

進んでいくと、ヒトの死骸を発見。

「な　なんだ…ＤＩＯの「食料の吸いカス」か…」

（この女どもはイヤイヤじゃあなく　自ら喜んでヤツに血を吸われる…とんとわからねえ心理だぜ！　悪魔の人望というやつか…恐ろしい男だ　ＤＩＯというやつはよ…

それに　この財宝と美術品……いったいどこから手に入れたんだ？　あいつにできないことはないという感じだぜ……）

「何か……用か？」

そのまま歩いていると、突然声をかけられる。

声の主は彼の頭上、本棚に掛けられた梯子にいた。

「ＤＩＯ！　……様……
　ハアハアハアハアハアハア
　（ち…ちくしょう…こ…こいつの前に来るだけで背骨に氷をつめられた気分になる……
　落ちつけ…ホル・ホース　圧倒されるな…なんてこたあねえ！おれよりほんの少し強いかもしれないってだけだぜ！）」
ＤＩＯは本を一冊とり、降りてきた。

「なんの用だ？ときいたのだ　ホル・ホース」

「あっ　うっ　そ…その　ほ…報告に来たんです
　「９栄神」のうちの５人目と６人目のマライアとアレッシーが先ほど倒されたそうですぜ……」

「……
　それで？」

「……
　そ…それで…　それが報告です…ジョースターたちは明日にはカイロへ到着しますぜ　「９栄神」の残りは３人」
「それで…といったのはおまえのことだよホル・ホース」
「え！？」

「おまえは　いつわたしのためにやつらを倒しに行ってくれるのだ……？　ホル・ホース
　わたしに忠誠を誓うと言っておいて…まったく闘いに行かないじゃあないか…
　情報連絡員なら誰にでもできるぞ　２度も失敗して…逃げ帰って来たな…」

「ハァーハァーハァーハァー　ううっ」

ホル・ホースに両手を近づけたＤＩＯはそのまま彼の煙草の火に両人差し指の腹を押しつける。

「……？」

「おれの首から下はジョナサン・ジョースターという男の肉体（ボディ）でな…ジョセフ・ジョースターの祖父だった男よ

見ろ　この両指を……左の方が傷の治癒力が遅いだろう……？

体の左半身が弱いのだ……　まだ完全におれになじんでおらん証拠　不死身ではない…

やつらと闘うにはまだ準備不足というところなんだ

はやくジョースターどもを始末して　わたしの期待に応えてくれ」

椅子に座り、燭台の灯りで本を読みだすＤＩＯ。

（ふ…ふざけやがってッ！　「わたしの期待に応えてくれ」だとなめんなよ　おれは強い方につくだけの男！　心の底からてめーにゃあ忠誠を誓ってねーぜ！　魂までは売らねえ！

チクショーッ！　おめー本当に強いのかッ！　背後がスキだらけだぜ！　肉体がまだ思うように動かねえんじゃあねーのか！　か…考えてみれば　ジョースターたち５人と闘うより　こいつは　今たったひとり！

いっそのこと　おれがこでこの野郎の頭をコッパみじんにふっ飛ばした方が　簡単にケリがつくぞ　財宝もおれのものだ――ッ）

その背後に近づき、「皇帝」を出して向けるホル・ホース。

（やはりスキだらけだッ　「皇帝」の銃口を向けてるのにこいつは気づいていない！　今ならやれるぞッ！
引き金をちょっと引くだけだッ！　一瞬で終わりさッ！　接近での暗殺こそ「皇帝」の独壇場ッ！　おれならやれるッ！やれるぞッ！）

「なにをしているっ　早く行けよ……」

（あばよＤＩＯ　死んで後悔しなッ！）

そして発砲。しかしその瞬間ＤＩＯの姿が消え、本だけが椅子に落ちる。

「な…なにッ！？」

「殺そうとする一瞬　汗もかいていないし呼吸もみだれていないなやるじゃあないか？　ホル・ホース
フフフフフフ…」

ホル・ホースの背後にいたＤＩＯ、それだけ言うと部屋から出て行った。

「う…動きが見えなかった……
見えなかったとしても　ここらの蜘蛛の巣をちっともやぶらずにおれの背後に回れるはずがない！
スピードじゃあねえ　どうやって！？　どうやっておれの背後へ……？
わからん…今のが…ＤＩＯの『スタンド』『世界（ワールド）』なのか！
ジョースターたちと戦うには準備不足だと……？　ウソつけッ！

や…やっとわかった　ＤＩＯ様……あんたにとことんついていかなきゃあならねーことが
か…完敗だ……」

――――――――

――――――――

――――――――

……む、時間停止の感覚……このタイミングだと、ホル・ホースさんがＤＩＯを撃とうとした時のやつですか。

とりあえず五秒、フルタイムで動けましたね。

まぁそれはそれとして、ジョセフさんは電話でホリィさんの容態を訊いた模様。今から列車に乗ってカイロに往きます。

カイロのカフェではジュースを頼みました。
それとハーヴィー君の賭けには手を出さなかったとと、最後にアヴドゥルが少年の「やっぱり」発言に気付いただけここに記しておき

ます。

ところで頭に人形を載っけてる（パッと見）男……怪しいですね。

まぁ、わたしのことですけど。

第２４話：ＤＩＯを撃つ！？／ファービー君……でしたかね？（後書き）

別視点が台本みたい

そしてワナビー君の扱いが酷い

全ガットゥーゾ（↑なぜかカット変換候補にあった）されたし

第２５話：まぁ、今回も見学ですけどね（前書き）

ビデオマンの成長性がＥだと停止時間が延びないのでＣに変更

具体的には一年で一秒延びるくらい

と、おもうよ

第２５話：まぁ、今回も見学ですけどね

「わしは４０年もこのカイロで屋根の修理しとるけど知らんねえ
こんな館は…　似たようなのがいっぱいあるからなあ
　でも建物の雰囲気だと建てられたのは百年以上前だにゃ　ということはこの辺りから南の方を探していけばいずれ見つかるよ　カイロは南の方ほど古い建物になっているんじゃ
　参考にならなくて悪かったね」

「いや……ありがとよ…邪魔したな……」

館に入るまであと二組となりました。
こんにちは、自称ｎｏｔ―ｃｈｅａｔの遠音ちゃんです。
まぁ　んなもんは世界を基準に決められるんで此処だと理不尽レベルのチートになりますけど。
例えるなら聖杯戦争に十二の試練、戦闘続行、単独行動、諸々の防御スキルを詰め込んで耐久ＥＸでマスター殺害に全力な真アサシンで参加するようなもんです。
……あれ？　なんかおかしいよーな？

スタンド無視で本体全力みたいなとこあるし、多分こんな感じっしょ。
スタンドが覚醒（ちょっと違うけど）したせいで、余計にスタンドとの殴りアイが出来なくなったんですし。

極端言うと一町殲滅弾とかもかませないことも無いけど……っとと。
横道にズレましたけど、今は冒頭の大工のおじいさんのいる建物の屋上、そのちょっぴり上空にいます。

「エン！　どうだ　見つかったか！？」

「駄目ですね、どれも似たようなんばっかりでさっぱり判りゃあしません！」
とまぁ、こういう理由です。
勿論、見つけてはいますけどね。

こっからパッと飛んでサッと仕留めるってのもできますけど、そんなん誰も求める筈が無いでしょーからやりません。

「いくぞ…聞き込みを続けよう」

「そいじゃあわたしは別ルートで探してみますんでー、見つけたらこれで連絡しますんでー、んじゃまたー」

言ってトランシーバー投げ渡し、サーチャーも『追尾：ジョースター一行』に設定してわたしは抜けておきます。
彼等に近づかなきゃきっとトト神にも写らないでしょう。

さて、安全なトコによけときましょーかね。

という訳で原作通り、

ホル・ホースさんがポルポル君に尾行バレ
↓鼻に指突っ込む
↓一行来る
↓トラックが一行に突っ込む

「おやイギー、あなたもこっちに来てましたか」

「……」

「無視、か。まぁ、いいですけど」

↓トト神「12時きっかりにパイプにホルホル弾ブチ込むがいい」
↓せっかく実銃渡したのに「皇帝」で配管工脅す
↓やっぱりカネ払うわ
↓財布無ェ！　ボインゴ！　小銭入れ出せ！
↓ぶちまける

「端から見ると滑稽極まりないのです」

「…言わないであげましょ。ただでさえスタンド使いは端から見ると変なんだし」

↓彼等の気を知らない配管工達、小銭拾い
↓「あとでひろってくれ――ッ！　全部やるぜ――――ッ！」
↓おばさん「お茶入れたから休けいしたら」　ホル「ババアすっこんでろッ！」
↓岩で脅してパイプ開けさす
↓「くたばれ承太郎ーッ！」
↓「勝った！　パイプのド真ん前にッ……承太郎の顔面があるぞッ――――ッ！」

↓ポルポル君くしゃみ、かかった承太郎君のけぞる
↓全弾当たらず他所に飛んでく
↓向こう側の建物の屋根に当り、方向転換

「遠距離になると威力が無くなるんじゃあ無かったですっけ」

「普通頑張って中距離までだと思うのです。ハンドガンなのですし」

「ビットやミサイル並ですねぇ、これじゃあ」
とか言ってたりしたら弾丸が帰ってきてトト神のページをぶち抜いてホル・ホースさんに着弾。
救急車呼んどきましょ。
好感度高いのに何故助けなかったか、ですか？
別に死にゃあしませんし、とか、『高いからって助けると思いました？』『甘ぇですよ』とか言ってみたりして。

それはともかく、見えなくなって近づいて、ちょっとだけ治しましたから全治1週間程度になってるでしょう。
全快させるとまたきて再見になりますからね、今日明日来れないくらいがいいんです。

「ぼくの予知にまちがいはなかった…そしてホル・ホースはこうなる運命だったんだ
しかし…あの承太郎……なんて運の強い奴なんだろう……
……
お兄ちゃんもホル・ホースも運命にやぶれた……
あんな運の強い奴に対抗できるのはＤＩＯ様のような人だけだろう……」

まぁ、人外（吸血鬼）ですけど。

「オインゴお兄ちゃん……なんかホル・ホースを見て　復讐なんてすごくバカバカしく思えて来ました
もう承太郎たちのことは忘れましょう
ぼくの予知のスタンドは　攻撃のためでなく　ぼくたち兄弟の幸せや　困ってる人のために役立てた方が…
もっと人からも愛されるし　いい運命がやってくるような気がします」
隠れるのに使っていた木箱を蹴っ飛ばし

「あんな箱の下で他人を怖がってオドオド生きる人生なんてまっぴらです
ぼくはこの闘いで大きく成長しました
帰りますお兄ちゃん！　お兄ちゃんのいるアスワンへ」

その木箱がこっちに飛んで来たので受け止めます。

「危ないですねぇ、当たったらどうするんです？」

「あ　ご　ごめんなさい　ついうっかりケ飛ばしちゃったんです…
……　悪気はなかったんです」

「はいはい、わかりましたから、次からは気をつけてくださいね」

「は　はい」

適当に言葉を交わして別れました。

でもイギーを回避したけどこの後になんかしらの不運がある気がするんですよねぇ。

まぁ、そこまでは知ったこっちゃあないですけど。

あ、トランシーバーですが、わたしのはまだ造って無かったので意味が無かったり。

第２５話：まぁ、今回も見学ですけどね（後書き）

これ以上ないくらいのやっつけ

以下、作者に代わりましてとある声優の卵とそのパートナーがお送りします
（括弧内は作者）

「はい負けた、惨敗した、圧倒された
もうまともに戦う（書く）ことすら出来ないんだから、いい加減考えを改めれば？」

なーにを甘いこと言ってるの？
この程度で考えを変えたり、諦めたりするなら、最初から、夢なんてもた（書こうなんて思わ）ないよ

「だからさぁ、夢を持つ（書こうとする）のはいいけど、
それを叶える（実行する）為の努力の仕方ってのを、もっと真面目に考えなよ……」

第２６話：わたしはこっちで手一杯です、だからどうにかなりませんかね？（前

おかしいなぁ
投稿時間が
すくないなぁ
睡眠時間が
だめですねぇ
自業自得よ

第２６話：わたしはこっちで手一杯です、だからどうにかなりませんかね？

ポルポル君が（偽）乞食と言い合ってて通行人に恵んでもらい、アヴドゥルが乞食組合の説明をしてました。

「実はたのみがあって君を探していたんだ　礼は十分にする
この写真の館の場所を知りたい　それもかなり急いでいる」

「……」

そう言ってＤＩＯの館の写真を渡すと、（偽）は襤褸（ぼろ）を取っ払って、上質な感じのスーツと車で出る準備を。

「今日は仕事はやめだ……　写真の館は3時間で探せるぜ…そこで待ってな」

「あ、わたしも連れてってくださいな。もしかしたら危ないことがあるかもしれないですし」

「危ないこと」に一番対応できそうにないわたしが名乗り出た事に訝しんだような気がしましたが、とくに反対もなく着いて行くことに。

レーネさん（名前はエンネですが今界は便宜上こちらで呼びます）は承太郎君に預けて、出発です。

二時間後―ＤＩＯの館前

隼と犬がにらみ合いをしていましたが、隼の方がここにたどり着いた情報屋に気がついたようです。

「まちがいないぜ…この館だ　フフフ　２時間でつきとめたぜ　この街で　このオレ様に調べられないことはない　え？」

しかし、彼の頭上に突然巨大な氷柱が現れ、突っ込んで行きました。当たる寸前に遠音ちゃんが彼を引っ張っていましたが、よけきれずぶつかってしまったようです。
そしてその時とんだ写真は、隼がビリビリに破いてしまいました。

その後、隼は犬の前に降り立ち睨んでいて、犬はバカのふりで「無関係」を装い、車が隼に突っ込んでくるとその下を飛んで館に戻って行きました。

隼が居なくなったのを見計らってか、遠音ちゃんが潰れた車から丸っこい塊を持って抜け出し、去って行きました。

そういえば、目玉を集めるカラスの話がありましたっけ。
あの隼が、彼等が来る前に殺した犬の死骸の一部を食べているのを見て思い出しました。

―――
―――
―――

「おい…もう陽がくれるぞ」

「3時間ありゃあ写真のＤＩＯの館がつきとめられると豪語したあのコジキ…どうやら見つけられなかったようだな…よう！　アヴドゥル」

「……今　思ったのだが…見つけられなかったならそれでいいのかもしれない……
ひょっとして　見つけたからこそ帰ってこれないとしたら……」

「……」

「館に近づく者を阻止する役目のスタンド使いがいてもおかしくない

エンがいるから万が一のことはないと思いたいが……」

……マスター、ここでわたしにどうしろというのですか？

――

――

――

「……」

「どうした？　承太郎」

「やはり誰か尾けてくるのか？」

「いや…何者かが我々を…呼んだような声がした」

「声？」

承太郎君達が話していると、物陰からイギーが出てきました。

「イギー？　どうした　少しケガをしているが」

「事故にでも遭ったのか？」

「この犬は交通事故に遭うようなタマじゃあない……敵に襲われた

な　イギー」

「……イギーの声じゃなかった　たしかに人間の言葉でオレたちを呼んだんだぜ」

さて、出て往きましょうかね。

でもなんでイギーは軽傷なんでしょ？　ペット・ショップとやりあった筈なんだし原作だと左前足が無くなってた筈だし…。

「イギーは敵と遭遇しました。ＤＩＯの館を見つけましたからね」

「エン！　おまえ無事だったのかッ！」

「あの乞食はどうしたんだッ！」

「彼は敵に攻撃されまして…治療に時間がかかりましたが、ちゃんと治して帰しましたよ」

とか話してると、イギーがどっかに行こうとします。

「おいイギー　どこへ行くんだ？」

「人間やスタンドにまったく無関心だったイギーが、わたしたちをどっかに案内したいみたいですね。

敵スタンドと闘って何があったかわからないですけど、きっとちょっかい出されて苛ついてるんじゃあないですかね？」

レーネさん回収っと。

ＤＩＯの館前～

レッカー移動されるあの車がありました。

「こ…この車はッ！　あの乞食が乗っていた高級車だ……　こ…この破壊のあとは……」

「でっかい氷柱が突っ込んで来たんです。びっくりしましたよ」

「おい　なんだ…急に冷汗が出て来たぞ……
この精神にくい込むような圧迫感は……
イギーは　おれたちを　ど…どこに連れていこうとしているのだッ！」

「わしにはもう…わかった…この雰囲気はッ！　このドス黒い感覚はッ！」

「こ…この館はッ！　写真のッ！」

「イギー　おめーがここを見つけるとはッ！」

「……」

「いる……この感覚はまちがいなくヤツだッ！　やつはこの館の中

にいるッ！」

「……」

「我々の旅は…」

「……」

「ついに終点を迎えたわけだ」

「（このバトルが終わったら、ふるさとに帰るんだぁ）」

「（何故ゼルノグラード型の真似なのですかマスター？）」

「（いやぁ、お約束は必要かなーって）」

第２６話：わたしはこっちで手一杯です、だからどうにかなりませんかね？（後

イギーパート

例の「別視点」の彼がついに参上みたいな話
フラグ＞視点変更時ナレーション別人

書かずに館るか

書いて補完るか

どーしょっかなぁ

第２７話：前哨戦すらまだ無いですけどね（前書き）

→なのにアゲたって意味

第２７話：前哨戦すらまだ無いですけどね

「わしにヤツの存在がわかるように　ヤツの方もわしの到着に気がついている
うっかりこの館に入るのは敵の胃袋にのみこまれるようなものさて…どうしたものか」

と館の入口で留まっていると玄関扉が開きました。

「！！」
「扉が開いたぞッ！　気をつけろッ！」

その中を見てみると左側に等間隔に横道があり、右側がずーっと壁な直線廊がずーっと続いてます。

「おい　見ろよこのろーか…終わりが見えねーぜ
本物じゃあねーよな…トリックか幻覚だよな…」
「ポルナレフ……ドアの中に飛び込むなよ……ＤＩＯの前にスタンド使いが　ひとりやふたりいるはずだ」

とかしてたら廊下の向こうからヒトが少し浮いたままシュゴォーっと結構な速さでやってきました。

「ようこそジョースター様　お待ちしておりました　わたしはこの

館の執事です」
「なんだかわからねーがッ！　ただ者じゃあねーなッ！　とにかくブッ殺すッ！」
「ポルナレフ早まるなッ！」

どうにも直情が過ぎるポルポル君、いい加減直して欲しいですねぇ。

「ダービーと申します
テレンス・Ｔ・ダービー
あなた方に再起不能にされたダービーの…弟です
さ…どうぞ中へ　上着などおとりしましょう」

「博奕（ギャンブラー）打ち――ダービーの弟だとッ！」

「兄貴へのとむらいの戦をしようというのかッ！　……」

「とんでもございません　私の兄はあなた方に言いませんでしたか
「勝負とはだまされて負けた方が悪いのだ」と……
そのとおりだと思います
兄は　あなた方と戦って敗北しました　敗北した兄が「悪」なのです　恨みなんかこれっぽっちもありません
兄は兄　私は私　ＤＩＯ様をお守りするだけでございます

それに

兄とは年齢が１０歳離れています　ま……それなりに兄を尊敬しておりましたが　兄とは世代が違うのでございます
兄はイカサマとかペテンで勝つという　古いタイプの物の考え方をしておりました

彼が勝てるのは　古いタイプの人間もしくは素人だけでございます
ＤＩＯ様も　それにお気づきだったようで　私の方を執事として
そばにおいてくださったのです

いかがなされました？　私との勝負を……お望みですなら……
さ……館の中へ……」

「みんなうっかり入るなよ！　この廊下は幻覚の罠と考えるべき…
……」

「おれたちは魂のうばいっこしているヒマはねえ……とっ
ととＤＩＯにあわせな」

「……」

「承太郎！　気をつけろッ！　何か出てくるぞッ！」

「失礼ですがわたしのスタンドは…兄のスタンドとはタイプが違い
ます」

ナービー君よりは近距離パワー寄りってことですかね、人型だし。

「おい…おい…こいつスタンドを出したぞ！」

「最近めずらしいな」

「まともにスタンドを出すタイプはひさしぶりだな……」

「最初は誰です？　誰が　わたしの相手です？」

「面倒くせえ！　承太郎　ブチのめしちまいな」

スタープラチナとアトゥムが対峙。両方人型なので見栄えもいいと思うのですがそこんとこどうですかね？

「賭けよう……スタープラチナの私への第一撃は　まず「左腕」をくり出す」

「！」「！」「！！」

「第一攻撃はまず左腕のパンチ　賭（ビット）けよう」

「承太郎！　なんでもいいッ！　おまえのパワーで殴れば同じことだッ！　やっちまえ！
早くうてッ！　承太郎ッ！」

「オラァァ！」

スタープラチナが右腕で殴りかかりますが、その前から動いたアトゥムが右へよけました。

「！」

「なに！　よ　よけた！？」

そしてそののびきった右腕を左手で掴み、

「！」

「残念　残念…今の賭けはわたしの負けでございましたな　わたしも兄と同じで賭けは好きなのですがどうも弱くて　フフフ　おわびに　とっておきの世界へお連れしましょう」

「！　なに！　穴…」

足元に穴が空いて引きずりこもうとします。

「しまったッ！　やはり　この幻覚の廊下は罠だった　ひきずり込むために……」

「承太郎ッ！」「法皇の緑！」

隠者と法皇で承太郎君を捕まえて引き上げようとする遠距離組。

「承太郎が穴におちるッ！　ひっぱり出すんだッ！」

しかし穴からテレンスが顔を出して、

「しょうがない…あなた方もお入りください」

「な！」「あっ！」

二人も引きずりこみました。

「ジョースターさん　花京院ッ！」

「待てポルナレフッ！　追うのは危険だッ！」

そしてこれらのことが起きている中、わたしは頭に乗ってるレーネさんを掴み、

「え、えっとなんですか？」

「いやいやちょっとした思いつきなんですけどね？」

純正武装を装備＆追加武装もつけて、

「とりあえず、あの穴に往ってみましょー」

「はわわ！　え、ちょ、はわ～～！」

ぽいっちょ。遠距離組といっしょに墜ちて往きました。

「アヴドゥルゥゥゥ　きこえるかァァァ　アヴドゥルゥゥゥ」

「！　ジョースターさんの声だ！　落ちながらしゃべっているッ！」

「１０分たってわしらからなんの合図もなければァァ……館に火を放てッ！　いいな……アヴドゥル……ゥゥ」

「ジョースタ――――さんッ！」

穴がぴったり閉じて只の？　廊下に戻りましたとさ。

第２７話：前哨戦すらまだ無いですけどね（後書き）

予定ではアトゥム終了まで行くはずだったの

しかしあとがさ時点で４：１５

だめね

実はＲＯＧ（ＲｉｄｅＯｎＧｅａｒ）で「伝達」一匹をレーネさんに憑依させることで対スタンドの性質を得させるって設定を考えたり（射程は１５ｍ以上）

第２８話：今こそ、代役の時なのです！（前書き）

非スタンド使い視点ってやつかな？

ただ今回は大して差別化はｒｙ

レーネさんこう画像

ｈｔｔｐ：／／ｈａｉｏｋｕｋａｎ．ｃｏｍ／ｗｅｒｅ／２０１００８０６ａｌｔｌｅｎｅ．ｊｐｇ

ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇｉｍｇ．ｇｏｏ．ｎｅ．ｊｐ／ｕｓｅｒ｜ｉｍａｇｅ／３ｃ／ｂｃ／２ｅｄｃ０ａａ０ｃ７ｅｅｆｅｅ９９ｃｆ０１ａ０３ｂ０ａａ１ｃｄ４．ｊｐｇ

後書き神姫分１００％故に注意なのです。

第２８話：今こそ、代役の時なのです！

グライディングでゆっくり降りて、ジョースターさんと呼ばれていたおじいさんの帽子に着地したのです。
周りを見ると海と空が広がる中での小島が幾つか。そのうちの一つに全員がいて、テーブルや椅子などが置いてあるのです。

「この潮風……この海水の濡れた感覚……
……
このリアリティー　迫真すぎるぞ…こ…ここは…」

「なにかお飲みになりますか？
もちろんこの飲物類は本物です　毒も入っておりません」

「館の中か？　ここは？」

「そうです」

「……館のどこだ？」

「それはいえません」

「地下か？」

「そうかも……」

「「スタンド」か？　この幻覚は？」

「そうです」

「きさまのスタンド能力か？」

「ちがいます」

「ＤＩＯのか」

「ちがいます」

「誰のだ？」

「いう必要は　ありません」

「ＳＰＷ財団の情報によると　あと2～3人のスタンド使いがいるらしいが　そうか？」

「言う必要はありません」

「「いえない」という答えが多いな」

「ウソをついてもかまわないのですよ
しかし　私は兄のようにウソをついたりだましたりしないからです」

「……フン」

「……」

相手の方の左の目元がピクっとしたのです。
神姫アイは、どんな些細な変化も見逃さないのです。

「つまりこういうことか？
『我々はおまえを倒さないかぎり先へは進めない……』」

「Ｅｘａｃｔｌｙ（そのとおりでございます）」

「このていねいすぎる態度…神経にさわる男だ」

「……」

「わしらをとじこめたつもりで……自信満々らしい
一対三ということを忘れているのか？　急いでいるので３人がかりで君を攻撃させてもらう」

「わたしのことも忘れないで欲しいのです。というか、認識して欲しいのです。
これでも、対人武装だってあるのですよ？」

さすがにこのサイズ（本体１５ｃｍ）で多段ミサイル使っても対軍武装にはならないのですけど。

「まあ　そう　お急ぎになると損をしますよ
その前に御覧にいれましょう　兄もあなた方にお見せしたと思いますが……自分のコレクションを……」

「！！？」「コレクション……！？」

相手の方…ダービーさんがクロゼット（というのでしょうか?）を開けると、中には沢山の人形があったのです。

「わたしも兄と同じにささやかながら集めているのです
まあ自慢のコレクションというものは他人に見せて賛辞の言葉を聞きたいと思うものです」

「こいつ　まさか…」
「人形!?　な…なんだこの人形は?」

そしてそのまま見ていると、人形が動き始めましたのです。

「ダービィ～ウウウウ
わたしに話しかけて…
テレンスダービーィィィ　ウウウ
さびしいの?　わたしと話をしてちょうだい…
おねがいお話を!　話をヲヲヲヲ～～～」

「フフフフフ」

「ダービィー～～～ウウウウ」
「さびしい～～～」
「オオオオオオ」
「ウウウウウウウウウ」
「助けて～～～」
「助けてくれェ～」
「オオオオオオ～」
「オオオオダービー様ァァァァァァ」

「ＯＨ　ＭＹ　ＧＯＤ……」

「生きている……こ……この人形らは生きている」

「て…てめー……魂を」

「なんだかすごく歪なのです……」

「わたしの趣味は人形を作ることです
そして本物の人間の魂をこの人形に宿らせたのです
バラしてしまいますが　これが私の「スタンド」の能力」

宿らせる……だからこうまで歪なのですね…。
わたしのようにプログラムを元にしている訳でなく、他所から捩じ込んでいるという訳なのですね…。

「兄のコレクションはつまらなかった
ただ魂のコインを並べて楽しむだけで　単純で　底が浅い
わたしのは着せ替えをしたり　話をして楽しめる
たとえば彼女の名前はソニア
華麗なる恋の体験談が楽しい女だ」

「ダービィィ～～～　ああ～～ダービィー」

「ハダが　きれいでしょう　シャネルの服が好きだというんだが
今はジャンニ・ヴェルサーチのデザインを　私が小さく作り上げたものを着ている
どこへ出しても恥ずかしくない美人だ

エリオット医師は殺人鬼だ……8人　殺している」
「アアアウ」
「殺した患者の話が楽しめる
このメガネも　聴診器も　わたしが作った

この日本の少年タツヒコはＩＱ一九〇もあるヤツでかなり手ごわい」
「ママア～～～　ママア～～」
「こいつはＴＶゲームの達人だったので　負かして魂をうばいとるのには苦労しました」

「こいつ　兄弟して異常なヤツだ…！　いや……きさまの方が兄キ以上だな　ムカツキ加減がな」

「紳士ぶっているが最低のサイコ野郎だ……ヘドが出る」

「……」

「ところで　兄との勝負の時体験したと思いますが…人間の魂というものは実に不思議だ
「敗北」する時　自分の「敗北」を自分で認めた瞬間　魂のエネルギーは　限りなく0に近くなる……
その一瞬をねらって相手の魂をひきずり出すッ！　それがわたしや兄のスタンドの原理！」
「もういいッ！　話は　いいッ！　きさまの「スタンド」の話などムカツクだけだッ！
早いとこ　きさまをたたきのめして先へ進むだけだッ！」

何か皆さんから変わったエネルギー反応があるのですが、神姫アイ

にはなにも映ってないのです。
スタンドってなんなのです？

「話はきかなくてはならないッ！
少なくとも承太郎！　あなたはわたしのペースにすでにはまっているッ！

承太郎……あなたは　さっき「右腕か左腕」かでわたしに攻撃を読まれショックだったろう？　そして「なぜ」読まれたか！　未だに謎がわからない」

「……」

「ま…敗北を認めてはいないのですが……かなりのショックだった…
「魂」にスキができましたよ承太郎様　あなたの「魂」にちょっぴりですがさわることができました……
で…さわってどうしたと思います？」

「！」

承太郎さんが右の袖を捲り上げると、一部が手の形に腫れ上がっていたのです。

「なッ…なにィッ！」
「なんだッ！　これはッ！　手が承太郎の右腕の中にッ！」

「わたしのスタンド「アトゥム」の腕をあなたの魂にくいこませたままおいてきたのです
このままあなたの右腕をつぶせばＤＩＯ様は　さぞ喜ばれるでし

ょう……？

しかし承太郎の右腕をつぶした瞬間　わたしもすかさず花京院とジョースターさんのふたりの攻撃をくらい　ひとたまりもなくやられてしまうでしょう……　そいつはごめんです

そこでひとつどうです　みなさん「魂」を賭けてゲームをしませんか？　わたしが完全なる負けを認めれば腕をはなしましょう」

「なにッ！」

「……！！」

「やれやれ…もうすでにてめーのペースにはまっている…か…

たしかに……しかしオレをはめたことを後悔しねーようにな……

ダービー」

「承太郎ッ！」

「こいつ　どうやらなにがなんでも魂がほしいようだぜ…

おれの皮膚の下に埋まっているやつの「スタンドの手」は　今は痛くも　苦しくも　異物感さえもない……

しかし　おれの右腕のひじから下をちぎり飛ばす力ぐらいはたしかにあるようだ……やれやれといったところだぜ」

「ぜひ聞かせていただきたいものですな　『魂を賭けてゲームをやる』という言葉を……」

「ＴＶゲームか

どれだけおまえがゲームをやり込んでいるか知らねーが　おまえには兄キのダービーにはない…隠された賭けの秘密がある…オレのパンチの「右か左か」がなぜかわかっていた

とはいっても　キサマごときのために右腕を失うのもごめんだぜ…

しかたないようだ……TVゲームで命をはるたあくだらねーがてめーの提案どおり　ゲームで勝負するしかないな……

「ひとつ言っておきます
最初にわたしと勝負するのは　花京院…あなたを希望します！」

「「！」」

「おい…どういうことだ？
腕に奴のスタンドをつけられたのはこのオレだ……キサマと闘うのはこのオレというのがスジだぜ」

「ジョースターとあなたは肉親だが　花京院とは血のつながりがない……
あなた方ふたりの魂を奪ったあと　急に「魂」を賭けるのはいやだとスタンド攻撃にはいられるとやっかいですので……」

「……」

「うぬぼれの強い男だ　こいつ　もうわしらに勝った気でいるぞ」

「いいでしょう…最初は…ぼくが相手しましょう」

「なにッ！」
「花京院！」

「大丈夫…自信はあります……
TVゲームはぼくも御多分にもれずくわしいですからね…
それに　そこにあるゲームソフトは　日本の若者なら「もう　あ

きたよ」というものばかりです

ゲームはこの「Ｆ－ＭＥＧＡ」で……対戦を希望したいが…」

「……」

「「魂」を！　賭けよう！」

「グッド」

「花京院！」

「おめーが最初にやる必要はねえ」

「大いにある…腕にそんなものをつけられている君は　ゲーム操作をミスる可能性がある」

ダービーさんは、既に花京院さんの人形を用意していたのです。

まさか自分で作ったのですか……？

ま、まぁ、人には色々な趣味があるのです。

「わしの「隠者の紫（ハーミット・パープル）」で調べたが　このＴＶやマシンやゲームソフトにはイカサマはない…世界中どこにでもあるＴＶゲームじゃ」

「兄とは違う　イカサマはしませんよ」

それでも結局、花京院さんが負けを認めたらしく、体がぐったりし

ていて、ダービーさんの持つ人形が動くようになったのです。「うう　ううううう　ううううおおうううう」

「……」

「うぐぐぐぐぐ」

「おっと…何度もいうが　激昂してわたしの生命への攻撃はやめろと忠告したい……

いや攻撃だけではない…もし　この私がバナナの皮ですべって頭をうったり　チューインガムをのどにつまらせたり　ポップコーンのあき袋のパン！　とわれる音で心臓マヒで死んだとしても……

……この花京院の魂は　あの世へ飛んでいく」

なんだか例えがおかしいと思うのです。ギュウドンをつまらせておけばいいと思うのです。

そしていつの間にか承太郎さんの腕の腫れが無くなっていたのです。

「すでにわたしのスタンドの腕は……君の腕から戻させてもらったよ

花京院の魂を手に入れた以上　君の腕にいつまでもくっつけとく理由はなくなったし……

これから君と対戦するのに　わたしのスタンドが片腕ではちょっと不利だからね…君の「スタープラチナ」はすばやくて超精密な動きをする」

「……」

第２８話：今こそ、代役の時なのです！（後書き）

今回の武装は

大剣

ランチャー

多段ミサイル

の、三本でーす

勿論ＲＡ付き

→ゲイルスケイグル（ｏｒＥＸ）

↓ランチャー

←大剣

↑ミサイル

純正固め＋マジカルスカート、ヴィードラシューズパーツ、イヤリング（スター）

ただし全部最高品

みたいな

第２９話：勝ったと思うのは早いのです！（前書き）

６日の半分を無為に過ごしただなんて……執筆的な意味で

前回からの非スタンド使い視点なり

第２９話：勝ったと思うのは早いのです！

わたしは扉のオブジェの上に行って観戦することにしたのです。

「おい！　承太郎！　なにをすわっているッ！　わしがやつをやっつけるッ！　次はわしじゃ！」

「じじい　てめーはこの中のＴＶゲームをひとつでも花京院以上にやったことがあるのか？」

「……

……う…う」

「ひっこんでなじじい…トランプや花札とはワコがちがうゼ」

「うぬぬ…」

そういって承太郎さんが選んだのには「ＯＨ　Ｔｈａｔ'ｓ　ＡＢＡＳＥＢＡＬＬ」と書いてあったのです。

Ｂａｓｅｂａｌｌが野球と訳されるというのは分かるのですが、野球ってなんなのですか？

「おれの魂を賭けよう……」

「グッド
わたしは花京院の魂だ
それにしても　この野球ゲームを選ぶとは…フフフフフ
このゲームはわたしの最もとくいなゲーム」

「ダービー！　おまえが承太郎に敗北した瞬間…わしが　おまえをたたきのめしてやる　忘れるなよ」

ゲーム開始なのです。

『「ＯＨ！　ＴＨＡＴ'Ｓ　Ａ　ＢＡＳＥＢＡＬ」ハ対戦型本格野球ゲーム！
ルールハ実際ノ野球ト同ジ！　９イニングデ得点数ノ多イチームガ勝利！　タダシ得点差ガ１１点以上開イタ場合ハ　コールドゲームトサセテモラウ！
球場ハ　ブルースカイスタジアム！　センター両翼マデノ距離（一二〇・九五Ｍ）』

「このゲームソフトにもイカサマはない　確認した」

「まずはチームを選抜してください」

「ジャガーズ」

「なるほど　攻撃力に重点をおいたチームを選んだわけか…　４割を超える打者が２人いる…

ならば　わたしはレッド・ドラゴンズを選ぼう」

『レッド・ドラゴンズ！　ドラゴンズ　ドラゴンズ　ドラゴンズ』
（エコー）
『ジャガーズトノ対戦成績ハ２１勝２１敗！　ジャガーズハ最大ノライバル！』

「次に選ぶのは先発のピッチャーです」

「……」

ＪＡＧＵＡＲＳ
「［背番号４１］
―・右上投　―
―・最大投球速度１６１？／ｈ　―
―・とくい球　フォークボール　―
―・パワーレベル　５　―
―・防御率　１．９８　―
」

「この４１番でいい」

「なるほど　けっこう手強いのをもってくるな
わたしは背番号１５番のピッチャーだ…1月5日生まれなんでね」

Ｒｅｄ　Ｄｒａｇｏｎｓ
「［背番号１５］
―・右中投　―
―・１４２？／ｈ　―
―・とくい球　カーブ・フォーク―
―・パワーレベル　９　―
」

―・防御率　2．18　―

「先攻後攻…好きな方を言いたまえ」

「……先攻」

「いいでしょう　ジャガーズが先攻ですね……」

ダービーさんがモニターに絵を描き始めたのです。

「……？」

「！？」

「自分でかいたキャラクターの顔を　選手にインプットできます
これは　スター…プラチナ」

なるほど、お二人のスタンドというのはあのような顔をしているのですね。

「インプット！　それではいよいよ　プレイボールといきますか！」

始まったのはいいのですが、承太郎さんは野球というもののルールは知っているらしいのですが、ゲームをやったことが無かったようで、８回も空振りしてしまったのです。

見ていてわかったのは、バットという棒でボールを打ち返せばいい

らしい、ということくらいなのです。
それ以上は別に詳しく知らなくてもいいと思いましたし、知りたかったらマスターにインストールしてもらえばいいと結論付けたのです。

そして9回目、ダービーさんのチームが投げた球を、承太郎さんは打ち返して、フィールドの外まで飛ばしてしまいましたのです。

その後さらに三回同じことをして、4点を得たのです。

「これで1回オモテ4対0！
どうやら　このゲームのツボは　つかんだらしいのォー承太郎ッ！　そのまま行くんじゃあ　そのままああ！
おいダービー　聞く気はないと思うが　一応やさしさで言ってやる…　今すぐ花京院の魂を戻し…わしらをDIOの所へ案内するのなら……」
「うう～う～　う…う…」
「命だけは……助けて……やるぞ……」

という、どう見ても無駄なジョースターさんの脅しに対して、ダービーさんは無視して自分がお兄さんより優れているというようなことを言って、挑発　しているのですかね？

「わたしの能力に不安をいだいている…
「まさかな！」「いや…ひょっとして」と　さっきから思っているッ！　だろ？　承太郎…」
「なんのことだきさま――ッ！」

「……」

「ピッチャー交代！　背番号１５から背番号７７へ……！」

「［背番号７７］
・右投
・球速　１６５？／ｈ
・特徴　豪速球投手だが
　直球とフォークボール
　しか投げられない
・パワーレベル　４
・防御率　５．２３」

「そして『投球予告』をするッ！
これからこの７７番は！　ド真中へフォークボールを投げるッ！」

「なんじゃとぉー！　投球予告じゃとぉ〜〜ッ！」

「ド真中へフォークボールを投げる！　ッ
信じるかッ！　信じないかッ！」

「……」

「承太郎　こいつは精神をまどわしているだけじゃッ！　投球予告なそきゆするんじゃあないぞッ！」

「……投げな……ダービー」

「しんじるか？　信じないか？　……フフフフ！」
そう言って投げたボールは中心を真っ直ぐに。承太郎さんはその下

へ振って、アウト・チェンジとなったのです。

「承太郎ッ！　なにをバカなことをッ！　こいつの投球予告なんぞしんじてッ！　フォークボールのコースを振りぬきおってッ！」

「……」

「いや…こいつはすでに知っていた…おれが「フォーク」を振るという決心を……投げる瞬間から知っていた　そして　直球に変えたのだ

やつのいうとおり　おれは　この館に入った時から不安をいだいていた……　こいつは　スタープラチナの「左のパンチ」が出るのをなぜか読んでいたのだッ！

おれが「直球」を振ると決めてれば　フォークを投げたろう！」

「ば…ば…ばかな！　するとおまえはこういいたいのか！？

「こいつはおまえの心の中を読んでいる」…と」

「次は一回のウラ　わたしの攻撃だ」

ダービーさんはバットでフィールドの外を指すポーズをしたのです。

「なっ！？」

「これはホームラン予告だ！

君は内角をねらってくるな……？　それとも低めかな？それをレフト・スタンドへたたきこんでみせよう」

「じじい…このゲームと機械にイカサマがないことはたしかだな？」

「それは絶対にない…
それだけではない…あらゆるイカサマに目を光らせている……
……」

「ならば秘密はこいつの「スタンド」にあるッ！
こいつのスタンドは「魂」をとるだけではない……なにか謎の能力があるッ！」

そう言って決めた投球位置は、ダービーさんの操作すれキャラクターに重なる位置、つまり球をぶつけるつもりでいったのです。

でも、ダービーさんは投げられてすぐに後退させて、それを打ち返したのです。

「よ…読んでいたッ！　今！　完全に読んでいたッ！
こいつッ！　承太郎の心を読まなければ　こんなことができるわけがないッ！」

そしてその球はフィールド外へすっ飛んでいったのです。

『ホームラン！』

「フフフ　まず一点」

「バ　バカな　心を読むスタンドだと?」

この後ダービーさんが二回繰り返して、これで4対3なのです。

そして承太郎さんは帽子をＴＶの上に置いて、ダービーさんから顔が見えないようにしたのです。

「ひさしぶりに　ちと汗をかいたんでね…ぬいだだけさ」

「早く次を投げてほしいですな」

「……

しかし…もう汗はかかないですみそうだぜ

投球予告をする！　外角高めへストレート」

「！」「！！」

「なん…だって！」「なっ　なに！　今なんといった！？　承太郎ッ！」

「言葉どおりだ…　老いぼれて耳が遠くなったか　ジジイ

投球予告をすると言ったのさ…　おれは外角高めへストレートを投げる」

「ハ！」

「信じるか？　それとも信じないか？」

「フン　マヌケか……きさま…

外角高めへストレートだと？」

「投げるぜ」

「……」

……？

承太郎さんは、コントローラーに触ってないのに、投手が投球をしたのです。

これもスタンドというものなのですか？

「１１点の差がついたらその場でコールドゲームということをお忘れなくッ……」

そして球は承太郎さんが言った通りではなく、途中で軌道が変わったのです。

「なにィーッ！！　変化！　……ッ　した――ッ！　シュートしたー！　バカなッ！　曲ったッ！」

それを打ち損じたせいで、ダービーさんはアウトとなったのです。

「次も外角高めストレートでいくぜ…」

「！　承太郎…まさか…イカサマはしてないよな？

なに！！」

承太郎は答えてないのに勝手に驚くダービーさん。心を読むのはいいのですけど、見ているぶんにはなんだか変な感じなのです。

勿論この投球でもアウトをとられたのです。

「イカサマをッ！　承太郎！　きさま！　機械になにか細工したな！？

！？　ハアハア　え！　！？　ハアハア　ハアハア　ハアハア　ハアハア

イカサマをしているのはわかっているッ！　どんなイカサマをしているのだ！

ハアハアハアハアハア　ハアハアハアハアハア」

「どうやらおまえの読心術は　ＹＥＳ・ＮＯの答えのみのようだな……

きさまの兄貴はいっていたぜ……

バレなきゃあイカサマじゃあねえんだぜ……」

「ハア――――アー　ハア　ハアーハアーハアーハアー

この承太郎の魂はウソをついていない！　ハアーハア　ハアー

しかし…イカサマをしている！？　バカな　どんなイカサマなのだ……ハアーハアー」

「さて続けようか……　次の投球予告は外角高めストレート…」

「バレなければ……イカサマじゃあないだとお～～～　クキクウウウ～～～～ゥゥ

よくもぬけぬけと…聞いた風な事を～　誰に向かっていっているのだ…

投げろォォォ承太郎ォォォーッ！　きさまのイカサマをあばいて魂を抜き取ってくれるゥゥゥゥゥ！」

余裕の無くなってきたダービーさん、やっぱりアウトになったのです。

『アウトォォォ！　スリーアウトチェンジィィィ！』

「やっつけてやるぜ……ダービー」

「やかましいーッ！　こ…この学帽を脱いだことが怪しいッ！　そ…　その学帽を脱いだ時からイカサマを始めたッ！　どけッ！　きさまの座席とコントローラーを調べさせてもらうッ！」

承太郎さんの帽子を叩き飛ばして回り込み、調べるのですが、何も出ないのです。

「くっ…　くっそお～～～～　わ…わからん　わからんが……

その学帽がイカサマの正体だッ！　そうだろお――――ッ！　うわはははははははーッ！」

ダービーさん、硬直。なのです。

「イカサマをしているのはこの辺りだなッ！　このあたりかッ！」

ＴＶを示すダービーさん、無反応の承太郎さん。なのです。

「スタープラチナをイカサマに使っているな――ッ！　素早いからなーッ！」

無言、なのです。

「イカサマをしているのはわかっているんだッ！　しこんだんだろォーッ！　承太郎――ッ！

ハアハア　ハアハアハア　ハアハアハア　ハアーハアハア　ハアハア　ハアハアハア」

「なんか…こいつ…年とったように見えるぞ…とても２０代の若者には見えん」

「ダービー　おまえの投球の番だぜ　早く投げろよ……」

「ブツブツ　ブツ　ブツブツ４対……３
１点くらいすぐに逆転してやる」

「……」

憔悴したダービーさんが席に戻って投球しますけど、やっぱりホームランされましたのです。

『入ったーッ！　ホームラン！　ジャガーズ５点め！　５対３！』

すごい表情で固まってしまったダービーさん、よろめいた時に何かしてしまったのか「はっ！　ああっ！」と叫んだのです。

「しっ　しまったァ――ッ！　うっかり魂をはなしてしまった――ッ！」

「花京院の魂がッ！　花京院の魂がっ！　もどったッ！」

「ちっ…ちがうッ！　ちがうぞッ！
おれは負けを認めてはいないッ！　うっかりだッ！　うっかり魂をはなしてしまったんだッ！」

「魂が解放されたということは　おめーの「心」が負けを認めたということだぜ」

ここでダービーさんが、承太郎さんのコントローラーを見て仕掛けに気付いたみたいなのです。

「コ　コ…コントローラーにジョセフのスタンドが……のびている」

「！　お…おっと…しまった……」「！！」

「こ…こんなくだらねーこと！　イ…イカサマというのはッ！　コントローラーを　ちくしょう…操作していたのは…承太郎ではなくおまえかッ！　ジョセフ・ジョースター！」

「そうダービー　おまえの兄貴ならこんなイカサマなんなく見破っていただろうな…」

「ハアハアハアハアハア」

「ところで　じじい……　おれのアイデアがなんの合図もなしに通じてくれてうれしかったぜ」
「う…う…うう」
「おまえの考えくらいすぐに読めるわい！　わしの孫じゃもんな

ニヒヒ」
「う　うーむ」
「しっかりしろ花京院……？」
「く　くそお～　う　後ろから……」
ダービーさんが背後から廃者のように近づいてきますが直ぐにバレ、振り返られて
「さてと！　あとはこいつの始末だけだな」
「ゆ…ゆるしてくれ！　花京院の魂だってもどしただろっ！　これで元に戻ったじゃあねーか！　ゆるして　ねっ　ねっ　ねっ」
「ゆるすかゆるさねえか　心の中を読んでみりゃあいいじゃあねーか」
「ひぃえ～～～っ」
「質問だ……右の拳で殴るか？　左の拳で殴るか？　あててみな」
「ひ…ひと思いに右で…やってくれ　ハアハアハアハア
ひ…左？　ハアハアハアハア
り…りょうほーですかあああ～　ハアハアハアハア

もしかしてオラオラですかーッ！」

「ＹＥＳ！　ＹＥＳ！　”ＯＨ　ＭＹ　ＧＯＤ”」

「オラララオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」

「ブギャーッ！」

急にボゴボゴになって飛んでいって、空間に穴を開けたのでした。

その穴から、わたしたちは脱出したのです。

第３０話：セーブはしましたか？（前書き）

教会でおいのりは？

部屋の隅でカタカタ打って保存をする準備はＯＫですか？

「ここで一旦自宅に戻ってセーブすることをお勧めします」

第３０話：セーブはしましたか？

待ち時間の間に、サーチャーを調整して、エアロシアーさん（空中仕様熱源探査爆弾）に。勿論、わたしたちは探査から除外されるようにしてます。

「すでに１０分たった　館の中へ突入するぞ　ポルナレフ　エン」

「ああ……」

「あいあい」

「ジョースターさんが待てといった１０分がたった
ポルナレフ　エン　突入する前にひとつだけ言っておきたい
わたしは　もし　この館の中でお前たちが行方不明になったり
負傷しても　助けないつもりでいる…」

危ない解きは助けない　とは言ってないんですよね、だから別に矛盾してないと。

「……」

「イギー　おまえもだ
冷酷な発想だが　我々はＤＩＯを倒すためにこの旅をしてきた…
……
自分の安全を第一に考えるのだ……　ひとりを助けようとして全滅してしまうのは　さけなくては　ならない」

ふたり（？）を助けて訳ですから、これもそう、と。

「おまえたちの方も　もし　わたしがやられたり……おまえたちとはぐれたとしても……わたしを助けようとしないことを約束しろ」

「……

ああ　わかったぜ……アヴドゥル」

で、男同士の、握手？

「生きて出てこられたら豪勢な夕飯をおごれよ」

「イギーにもな」

死亡フラグ連立とは…（決意系・終わったら系）…、ここはわたしも「目の前に敵が現れたのなら、たたき斬る…までだ！」とか言っておきましょうかね？

…って、これは『ボロボロになっても戦い続けていってついに力尽きるもかつて敵として闘った者に助けられる』でしたっけ。

「よし　入るぜッ！　アヴドゥル！　イギーッ！　エンッ！

銀の戦車（シルバーチャリオッツ）！！」

チャリオッツをだして床を叩き、穴があかないか確認してから壁にくっつくように皆さん移動を開始。わたしはそれを横目に普通に入ります。

「おい　エンッ　少しは警戒しろッ！　どこから敵がくるかわから

ないんだぞッ！」

「大丈夫ですよー、わたしは人間相手なら負ける事は無いんですから。

それに、わたしがやられる訳ないじゃあないですか」

「ＤＩＯは吸血鬼だがな」

あれも元人間じゃあないですかー　とか。

一つ目の横穴から中を見るととんでもない迷宮が広がってました。

「おいアヴドゥルどうする？　延々続いて見えるぜ」

「うむ　ジョースターさんは館に火を放てといったが……こんな遠大な迷路では　火を放つのは　こっちが危険だ……　それより　『魔術師の赤（マジシャンズレッド）』！」

魔術師が六個の火の玉と、それを繋ぐ十字の火の糸を出します。

「……」

「……？」

「この炎は生物探知機だ……

人間　動物の呼吸や皮膚呼吸……　物体の動く気配を感じとる……

……　『スタンド』のエネルギーの動きもわかる……　これを見てこの迷路を進もう」

「なぜ炎が６つかたまっている？」

「それぞれが　前後・左右・上下の方向を示す

半径１５ｍ以内にいるものなら　どの方向にどんな大きさの物が隠れているかわかる！

ジョースターさんたちは地下へ向かって連れ去られた…下へ向かおう」

「あいや、ちょいと待っちくれます？」

階段を降りようとする彼等を止め、シアーさんを取り出します。

「どうした？　エン」

「いやね、この子も似たようなモノですから、使ってみようと思いまして」

言いつつ飛ばしてみたら、ちょっと前方に行って、直ぐに左方向に行き、壁に突撃、爆裂。

今回のは威力を抑えてましたから、それがおさまった後には人間だったモノが散らばっていました。

「シアーさん、あなたの犠牲は忘れません……三十秒くらい」

「おいおい！　な　なんだ　あれは？」

「は！　まわりを見てみろポルナレフ」

「ああっ！　この館の迷路がッ！　消えている！」

「どうやら　この幻覚を作っていたスタンド使いだったらしいな…

……　あっという間だが　エンが　やっつけたぞ」

ケニーG　戦いもせず再起不能（リタイア）　です。

幻覚系がどうやって戦うのか…とも思いますが。

穴あけたりできるし、いわおとし　とか、バンブーランスみたいなんとかニードルカッター（岩製）とかできたんでしょーかね？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3803t/

エンの奇妙な冒険

2012年1月4日05時50分発行